

## 平成28年3月NHK中央放送番組審議会

3月のNHK中央放送番組審議会は、14日(月)、NHK放送センターにおいて、12人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、E TV特集「書家・金澤翔子30歳～娘と母 新たな旅立ち～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、4月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	北城恪太郎 (日本アイ・ビー・エム (株) 相談役)
副委員長	小林いずみ (前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官)
委員	秋池 玲子 (ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター)
	有森 裕子 (元マラソンランナー)
	大野 博人 (朝日新聞社役員待遇論説主幹)
	大日向雅美 (恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授)
	倉重 篤郎 (毎日新聞社論説室専門編集委員)
	佐野真理子 (主婦連合会参与)
	永田 紗戀 (書家/花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰)
	比嘉 政浩 (全国農業協同組合中央会専務理事)
	藤村 厚夫 (スマートニュース株式会社執行役員メディア事業開発担当)
	渡部 潤一 (国立天文台副台長)

### (主な発言)

< E TV特集「書家・金澤翔子30歳～娘と母 新たな旅立ち～」

(Eテレ 2月20日(土)放送) について >

- よい番組だった。書道の素人が見ても分かる圧倒的な力で番組が始まり、引き込まれた。取材対象者との人間関係が作られていて、いろいろな考察をしたうえで判断されていることに驚いた。ダウン症のほかの家庭も相当取材し、配慮されているからこそ取り上げることができたという印象を持った。

金澤さん親子にはいろいろな苦悩があるかもしれないが、光明を見だし、今を生きている。しかし障害は一人ひとりが特別であって、金澤さんと同じ方法で皆が

うまくいくわけではない。取材者はそのことを分かっていると思うが、単純に物事を見る人が、障害がある人が皆、金澤さんのようにすればよいのと思うかもしれない、そのことが多少気になった。

- 大変優れたドキュメンタリーだった。障害がある人を描く際、どうしても障害の重さが前面に出てしまい、ややもすると紋切り型になりがちだ。この番組は演出過剰に流れることなく制作されていたと感じた。障害がある方やその家庭の苦悩も伝わったが、それ以上にもっと普遍的な価値、親子の問題や芸術作品とは何かについても考えさせる内容で、優れた文学作品を読んでいるような気分になった。また、そのように描くために大変考えられた構成になっていると思った。

冒頭で翔子さんをダウン症の書家であると紹介し、ダウン症がテーマなのかと思ったが、翔子さんの圧倒的な作品群が紹介され、建長寺の管長が「自由無碍(むげ)の世界」と言うとおりで、きれい、上手だということではない、深い陰影をたたえている作品をいくつも見ているうちに大変強い印象が刻印された。続いて、日常生活の金澤さん親子の様子を紹介するシーンに移り、番組の局面が変わった。その後、翔子さんの生い立ちや、お母さんが翔子さんの命を奪うことさえ夢想したという衝撃的な話が紹介され、一気に番組が深いものに転じる感じがあった。そして、そこから書道の持つ意味がじわじわと感じられるようになった。最後は「羯諦(ぎゃあてい)」という般若心経の文字を大筆で書くことがテーマで、お母さんが「魂の領域では翔子が私を包み込んでいた」と述懐する場面が紹介された。見事なまでの起承転結で構成された番組で、大変感動した。

- 大変感動した。翔子さんの書は伝える力がある字だと驚いた。基礎を徹底的に教え込んだお母さんの努力はすばらしいものだったと思い、番組の最後でお母さんが「ありがとう、翔子」と言ったのが大変印象的だった。翔子さんの命についての思いも印象的だった。ダウン症に限らず、障害がある子どものお母さんに通じることばであろうと思う。子どもと一緒に生きていこうというメッセージを発信していたと思う。「愛」、「共に生きる」、「羯諦」、「佛心(ぶっしん)」という、「誰もが幸せに」という翔子さんの気持ちが伝わるような書を紹介していたところも大変よかった。

お母さんは70歳を過ぎていて先が分からず、翔子さんを独り立ちさせたいという気持ちが伝わってきた。30歳で翔子さんは独り立ちするわけだが、お母さんの気持ちを酌んで自立しようとしたのか、なぜ翔子さんが自立したかったのかが分からなかった。その背景がもう少し見たかった。ダウン症の子どもが大人になり、一緒に暮らす親はどうしたらよいのか、お母さんの気持ちがひしひしと伝わってきた。

(NHK側)

翔子さんがなぜ自立したかったのかについては、番組の中で描ききれなかった。お母さんは翔子さんに対して日常的に生活面を指摘することが多い。翔子さんは自分でできるため、お母さんから少し離れたいという気持ちがあったと思う。翔子さんが20代半ばを過ぎたぐらいから、「私は独りで暮らす」と、お母さんとけんかをするたびに言っていたが、お母さんは無理だろうと思っていた。お母さんが72歳になり健康も害され、自分の先々を見て自分がいなくなったときのことを考えた末に、今回の自立が実現した。翔子さんからするとうれしい自立で、お母さんは心配でしかたがないという感じだ。

障害がある方すべてが、翔子さんのように才能が見いだされるわけではないということは確かだ。番組の趣旨としては、子どもを思い、親を思うという親子の愛を伝えたかった。

- 見る前に予想したとおり大変感動した番組だった。演出過剰ではなく、自然体の親子について、ポイントを押さえた形で描かれおり、自然な形で感動した。母が子をあやめようと思った時期があったということだが、今回初めて告白したのだとしたら、本人による解説でもよいが、なぜ今回告白したのかについて説明があったほうが生きたような気がする。

書道について、基礎から学んでいたころと大筆を持って作品を書く技術とは相当かい離がある。今ある翔子さんにたどり着くまでには大変な基礎の積み重ねがあったと思う。その経過が分かるとよかったと感じた。

NHKは金澤さん親子を何度も取り上げているが、今回翔子さんが独り立ちし、新たな局面を迎えていると思う。これから先もいろいろなことがあると思うので、その後もフォローして行ってほしい。同じダウン症の子どもを持つお母さん方は、翔子さんに会えて喜んでいたが、「うちの子は本当にそんなことができるのか」と思いながら見ていたと思う。第2の翔子さんも別の形で存在していると思う。そういう人を発見し、掘り下げて伝えてくれるとありがたい。

- 大変明るく楽しく視聴できた。ダウン症や障害がある方の話としてではなく、健全な人が見て学ぶことの多い番組だと感じた。翔子さんが書道に出合ったことによって人生が開き、自分の才能を見つけ、幸福に暮らすということは、普通の若い人でもなかなかできないことで、そこに感激した。お母さんが高齢になって、晩年

の人生、最後をどうするのか、この世に心を残していくことに対しどう決着させるのかという決意は、健常な親子にとっても学ぶことの多い番組だったと思う。

お母さんの師匠に翔子さんの指導をお願いする場面で、師匠は「お引き受けします」と言っていた。そこにうそはないと思うが、カメラが回っていることによってコメントが少し変わることはないのかと思った。お母さんが不動産屋でマンションを探していた際は、障害者であることを理由に断られていた。その両方を見られたことで、この番組はまっすぐに撮影していると感じた。

(NHK側)

師匠の柳田泰山さんのシーンだが、ああいった場面を撮影することは、ドキュメンタリーでは大変難しい。あの日、柳田さんが翔子さんのために松山を訪れたが、ディレクターやカメラマンは、お母さんから指導を頼むと事前に聞いており、いつ頼むのかと待っていたそうだ。柳田さんもカメラを見て、恐らく気を使われたのかと思う。まるで合図があったかのように「やりましょう」と柳田さんが言ってくれた感じとなった。それぞれが何となく意識し、撮影されたシーンで、少しきごちなく感じるかもしれない。

- 私も引きつけられ、59分があつという間だった。書家である翔子さんのドラマとして、書もすばらしいし、天性の明るさで書を書き、「どうか、神さま、仏さま、私に降りてきてください」と祈りを込め書く姿は、ダウン症があるないにかかわらず、1つのものに打ち込む30歳前後の女性の崇高な姿で、心を打たれ、心が洗われる思いで感動した。

番組を視聴する前に心配だったのは、お母さんがどう描かれるかだ。民放の番組に出演した際、お母さんは翔子さんをあやめようとしたことをカミングアウトされた。そのことで、ネット上ではお母さんに対するバッシングがすさまじかった。そこまで追いつめられたお母さんの深い苦労がなぜ想像できないのかと、ネット上のバッシングを胸が痛む思いで見た。今回は、全体の中でそのことが決して浮いておらずほっとした。

お母さんは一人で立ち上がったわけではなく、夫に支えられていたことも触れてほしかった。クリスチャンの夫は「神の挑戦、主の挑戦を私たちは受け入れます」と言って、ダウン症があるないにかかわらず愛そうと、妻を支えていた。お母さんを支えてきたお父さんがいたからこそ、翔子さんは「お父さま、お母さま、ありがとう」と言っているのだと思う。

全編すばらしい番組だが、気がかりなのは、今は成功した翔子さんを育てたお母

さんについて、同じ境遇の母親がどう思うかで、フォローアップが必要だと思う。同じダウン症の子どもでも、才能がなく、自立もさせられず、苦しんでいる親子のほうが多いと思う。民放に出演した際も、お母さんに対して心ない声もあったと思う。翔子さんのような光明が差さないダウン症の子はたくさんおり、そういう人たちへのフォローアップもしてほしい。次回こういった番組を放送する際には、少し考えてもらえるとよいと思う。

(NHK側)

お父さんの裕さんをどう番組で位置づけるかは、制作時に議論になった。ディレクターは翔子さんをストレートに描きたいという思いが強かった。取材を進めるうちにお母さんの存在が膨らんでいった。お父さんがその裏で支えていたという話をお母さんもあまりされなかったため、今回はうまく紹介できなかった。翔子さんが成長した中で、お父さんの存在が大きかったことは確かで、取材が行き届いていなかったと思う。

放送後に、番組にどういう感想が寄せられたのか確認しているほか、最近ネット上で心ない書き込みもあるため、チェックはしている。今回に関してはそういった心配はないようだ。

第2の翔子さんの発掘も含め、継続して取材していきたい。

○ 室井滋さんの雰囲気のある語り口調が心をほっとさせ、よい余韻が残る番組だった。書は、上手、下手ということではなく、書いている本人の生きざまやエネルギーが確実に作品をパワーアップさせると思う。翔子さんの書を見れば、屈託のない笑顔が思い出される。今回の番組を見て、後ろで支えるお母さんの包み込むような笑顔も重なって作品が完成していると思った。人生は予期せぬことが起こり、少なからず皆が不安を抱えている。翔子さんとお母さんの存在がどれだけの人にエネルギー、愛を与えているのかと感じた。ニューヨークでの翔子さんのスピーチ、お母さんへのことばは、母親の気持ちと娘の気持ち両方の思いで涙を流しながら見た。私を支えてくれたのは母で、いつも褒めてくれた。番組を視聴したあと、自分の人生を振り返った。母の存在、親の存在、書道の深みをあらためて確認することができた。翔子さんの笑顔、今後のことがいろいろな人に伝わる機会を楽しみにしている。

○ 2つの意味で、フォローアップをぜひしてほしい。1つは、一過性にならないという意味でのフォローアップで、翔子さんがあと5年、10年とどういう生活を

送っていくのか興味がある。それが同じ境遇の方の指針、光明、勇気にもつながると思う。もう1つは、サクセスストーリーを持たない多くの方々にも目を向け、どういう形で普通に暮らしているのかだ。取り上げ方はなかなか難しいかもしれないが、ぜひ取り上げてほしい。スティーブン・ホーキングという理論物理学者は、筋萎縮性側索硬化症でコンピューターを使ってしか表現できなくなっても研究を続けている。そういう人は勇気を与える。生きざまのインパクトが十分に伝わった番組だったと思う。

- 心を打つものと心に残るものがあった番組だと思う。よいストーリーだったが、ダウン症に限らず、障害がある人たちにとってはまれに見る例だ。万人に当てはまるところの余韻があってほしいと思った。書道だけではなく、違う芸術も含め、いろいろな分野で同じようなストーリーを持った人たちにつながる余韻とケアの残るような部分があればよいと思った。いろいろなケースを取り上げてほしい。

障害がある人の家庭では、圧倒的に母親が表に出ている場合が多い。お父さんがいても表に出てこないケースが結構多い。こういった番組でお父さんの存在が少しでも表せると、同じ境遇の親が勇気を持てると思う。

- ネットの世界で考えると、59分というのは大変自由な時間で、逆に大変制約もあると思う。さまざまな視点でのフォローアップが求められるが、NHKが置かれたある種の不自由さも感じる。10分の時間で私ならば何を撮影したかと考えながら視聴した。

最後の「羯諦」を書くときに、巧まざるユーモアを作り手は意識していたと思うが、翔子さんが「太鼓かい」とつぶやくところや、翔子さんが書いた自分の部屋の見取り図の中にカップ麺の名前が書き込まれているところなどに、家人は開放感を持って番組を受け止めていた。「羯諦」を書きながらドラマティックに盛り上がっていくところは、ドライブ感が出ており、若い世代をも巻き込めるところだと思う。そういった部分を切り出し、制作するという作り方があればNHKの新しい側面がもっと表現できたのではないかと思った。ある意味で大変おもしろかったが、もっとシャープに若い世代の開放感を引き出すような切り口もあったのではないかと思う。

(NHK側)

若い世代を巻き込むには、59分という時間を変えたほうがよいのではないかという意見はある。

今回のケースはサクセスストーリーにどうしてもなってしまう、ダウン症やほかの障害がある人たちがどう受け取るの

かは、われわれの中でも議論になった。お母さんと取材者との議論の中でも、予定調和ではなく、ありのまま撮影させてほしいとお願いし、快く受けてくれた。撮影された真実の中でこの番組が制作された。「E T V特集」は一過性の番組ではなく、毎週59分、場合によっては89分で制作し、さまざまなテーマで長期取材を行っている。1つの番組の中で多面的に伝えきれていないところは、「E T V特集」を見続けただけ、いろいろなメッセージをそこからかぎとっていただければと思う。翔子さんは継続して取材していく。ダウン症だけではなく、いろいろなところで、いろいろな状況で生きている人々に焦点を当て迫っていきたい。

○ NHKならではの見応えのある番組で、感動した。心に刺さったひと言がある。翔子さんが「羯諦」を書く際に「魂をください」と祈っていたが、そのことばがすばらしいと思った。翔子さんの書がすばらしいというのものもあるが、人間として魂をくださいというところまで自分を徹底的に追い込み、集中し、昇華させていく精神力の強さがすばらしいと思った。ダウン症であるか、健常者であるかは関係なく、親が子どもに与えなければいけないいちばん大きなもの、「子どもがどうやって自立し生きていくのか」を親が徹底的に与えていたことにも感動した。障害者の番組としてではなく、子どもを育てる親にぜひ見てほしいと思った。

○ 大変よい番組だと思った。翔子さんの若いころの映像もあった。時間をかけ、1人の生活、考え方を追いかけられるのはNHKらしい取り組みだ。母親と翔子さんと取材陣との人間関係は、取材者に話しかけているのも自然体で、信頼関係も感じられた。

障害があるために大変苦勞し、サクセスストーリーにはならないが社会の中で生きている人たちがいることを取り上げてくれるとよいと思う。「E T V特集」は夜11時の放送だが、すばらしい番組は「NHKスペシャル」などの別の枠、普通に見られる時間帯に放送してほしい。今回は事前にある程度告知していたのだろうか。視聴者が少なかったのではないか。再放送の形でも、総合テレビで見られるとよいと思う。こういうすばらしい番組を作り続けてほしい。

(NHK側)

11月7日(土)のE T V特集「それはホロコーストの“リハーサル”だった～障害者虐殺70年目の真実～」は、ドイツ人がドイツ人を殺していたというホロコーストの“リハー

サル”という事件について取り上げたが、総合テレビでも放送した。折々で総合テレビへの展開は編成と連携しながら行っている。反響の多い番組は「E T V特集」の中でもアンコール放送を行う。再放送は違う時間だ。

- 視聴率はどの程度だったのか。

(NHK側)

通常の「E T V特集」は0.7%、0.8%程度が平均だが、今回の番組は、通常より高く1.4%で、反響も大きかった。よく見られたという実感がある。大変丁寧に取材していても視聴率が低いものもある。われわれの「これは伝えるべきだ」という思いと、視聴者がリンクしていないところもある。人間ドキュメンタリーはよく見られていて、今回は通常の倍ぐらいの人が関心を持ってくれたようだ。

この番組は1年かけて取材をしているが、スタッフはこの番組だけを制作しているわけではなく、ほかの番組も制作しながら1年かけて取材している。

- 翔子さんの若いころの映像がいくつかあったが、前にも撮影していたのか。

(NHK側)

「聴力障害者の時間」、現在のEテレの「ハートネットTV」の枠で数年前に取り上げていて、今回の番組でその映像を使用した。取材者、ディレクターは違うが、NHKのいろいろな人間が関心を持ってそのときどきにいろいろな番組で取材している。

<放送番組一般について>

- 3月6日(日)のNHKスペシャル「被曝(ひばく)の森～原発事故 5年目の記録～」(総合 後9:00～9:58)は大変興味深い番組だった。原発事故による放射能が自然界の野生動物や植物にどれぐらい影響しているのか、さらにそれが人間社会にどういった影響を及ぼすのかは、誰でも知りたいことだがはっきりしていない。地道

に続けている検証作業を通し、今の時点で答えられる限りのことを答えようという姿勢が大変よかった。明確な答えの出せない問いだと思う。今のところ野生動物で誰でも分かるような奇形が多発しているわけではないが、不気味な兆候は少くない。そういった事象を特殊なフィルムやカメラ、GPSを駆使し、アカネズミ、アライグマ、ハクビシン、サル、ツバメなどを広範に紹介していた。いろいろな研究者も登場し、できる限りその問いに答えようという番組づくりが大変よかった。アカネズミの染色体にはっきりとした差異が出ていないとする一方で、スーパーホットスポットにイノシシがやってきてえさを食べている映像はかなり不気味だった。目に見えない驚異といわれている放射能を可視化する努力がよかった。比較的淡々と進行していたが、データも豊富で、考えさせることが多かった。

- NHKスペシャル「被曝（ひばく）の森～原発事故5年目の記録～」を見た。生物学的には相当悲惨なことが起きており、定点観測を続けてほしい。霊長類の被害が大きいのではないかとこのものの明確ではなく、骨髄などの今後重要な資料になると思うのでフォローして行ってほしい。

(NHK側)

NHKスペシャル「被曝（ひばく）の森～原発事故5年目の記録～」については冷静な、客観的な態度を守りつつ今後とも企画を続けたい。

- 東日本大震災から5年に関する番組について、印象的だった番組について意見と感想を申し上げたい。いちばん印象に残ったのは3月10日(木)のNHKスペシャル「風の電話～残された人々の声～」(総合 後10:00～10:49)で、何度も涙を流した。命の重さ、生きる大切さ、残された人々の心のありようを素直に表した番組だと思った。線のつながっていない電話に話しかけ、亡くなった人、いまだに見つからない人に質問をしているのを思い出すと涙が出そうになる。電話をかけている遺族、家族が安心し、その場で涙を流している姿があった。「風の電話」のアイデアがすばらしいと思ったが、考えたのが中高年の男性で、東日本大震災の1年前にすでに存在していたことに驚いた。その経緯が簡単に説明されていたが、個人の庭に設置し、今はだれでも行ける形にしたという持ち主の気持ち、背景をもう少し知りたかった。また、この番組が放送された後に、大勢の人が「風の電話」を訪ね、あの静かな環境が変わってしまうのではないかと心配になった。番組自体はよかったが、その後のことを考えると気になった。

(NHK側)

NHKスペシャル「風の電話～残された人々の声～」の放送後に人が殺到しないかという指摘について。その点は事前によく協議している。「ベルガーディア鯨山」という庭園の中にあり、訪ねるときに連絡したうえで、庭園に立ち入る仕組みになっている。被災者の方には少しでも助けになればという考えで開放しているが、観光目的と考えられる場合はお断りするという立場を取っている。影響はある程度遮断できると考えた。NHKに問い合わせが来ても、「ホームページにその姿勢が書かれているので、それを見てから判断してください」と回答することになっている。

- 3月13日(日)のNHKスペシャル「原発メルトダウン 危機の88時間」(総合 後9:00～10:29)はドラマ仕立ての見せ方で専門用語の解説もあり、88時間の間に原発で何が起こったのかがよく分かった。欲を言えば、東京本部とのやりとりや一般の方々がどう逃げたのかまでしっかりとカバーするとよかったのかもしれないが、逆に筋が見えなくなって分かりにくくなるのだろうと思った。工夫された番組だと思った。1月17日(日)のNHKスペシャル「震度7 何が生死を分けたのか～埋もれたデータ21年目の真実～」は、工夫されていて、シミュレーション、映像、CGを駆使して制作されていると思った。科学、技術分野については、一般の方に分かりやすく伝える努力を引き続き行ってほしい。
- 私もNHKスペシャル「原発メルトダウン 危機の88時間」を見た。何が起きていたのか報告書などはいろいろ出ているが、番組では時系列によって映像や現場の人の声を入れており緊迫感も伝わってきた。また、当時なぜベントを行うことが難しかったのか、その背景についてよく分かった。原発で何が起きていたのか、分かりやすく伝えていて感心した。

(NHK側)

これまで5年間かけ、科学者など500人の証言をベースに信頼関係の中で獲得してきた知見で制作している。東京電力の東京本店とのやりとりについては、時間の関係もあり一部の紹介となった。一般の方々の避難については、3月5日(土)のNHKスペシャル「“原発避難”7日間の記録～福島で何が起きていたのか～」で、紹介している。それらを総合した番組を制作するという考えもありうるが、福島第1原発の中で何が起きていたのかということに集中した構成にし、探究し

ようという姿勢で制作してきた。

- 現場が混乱している際に総理大臣などが現場を視察することについて、かなりのやりとりがあったことが紹介されていたが、現場から見た受け止め方がよく分かった。
- NHKスペシャル「原発メルトダウン 危機の88時間」は大変分かりやすかった。医療班やほかの班が、それぞれの班名が書かれたゼッケンを着用しており、誰がどう動いているのかが分かりやすかった。
- NHKスペシャル「原発メルトダウン 危機の88時間」は、力を込めて作られていた。500人の証言を集め、やりとりもことばどおりだと思うが、きめ細かく、神経を使って当時の様子を再現していたと思う。再現ドラマは違和感を覚えるものが多いが、そういうことはあまりなかった。大変な数のエキストラで、CGもあまり使っていなかったため、大変な手間暇をかけ、1分1分のコマを作っていると感心した。88時間という意味、1号機と3号機がやられ、2号機が最悪の事態でベントができない、結果的にすき間から空気がもれていて助かったというドラマがあった。その直前には格納容器の爆発するおそれがあって、東日本がやられてしまうという事態の一步手前をよく描いていると感心した。なぜ1号機が数時間後にメルトダウンを起こしたのか、防ぐ手立てがなかったのかという観点からNHKの総力を使って検証して欲しい。1号機はしかるべく対応をしていればメルトダウンを防げたのではないかという疑いがいまだにぬぐいきれない。数時間後には全電源喪失でメルトダウンしてしまうわけだが、そういうことがある程度理解できていれば、現場から首相官邸に至るラインの中でベントをもっと早く行う、電源車をもっと早く配置することなどができるのではないかと思う。現場処理の中でああいう結果になってしまったことにこだわって検証してくれれば参考になると思う。

(NHK側)

NHKスペシャル「原発メルトダウン 危機の88時間」についてはこれまでにシリーズを5本制作している。いずれもこうすればよかった、あるいは過失があったのではないかという視点を入れるのはまだ早いというのが、500人の証言と科学者も含めた検証の中で得た形だ。まずは何が起きたのかをしっかりと検証するという姿勢でこのシリーズについては調査を続けていきたい。

- 3月は東日本大震災、原子力の事故にかかわる見応えのある番組がたくさんあっ

た。3月13日(日)の「特集 明日へ つなげよう」(総合 後10:05~11:49)の「あなたが主役50ボイス」との連携企画、「あの日わたしは」などでは普通の生活者たちがそのときどうだったのかという声もたくさん集めていた。それは今見ても感動的だが、将来に残る映像、声になっていくのだろうと感じた。「あなたが主役50ボイス」の高校生たちがどういう仕事に就きたいかということもおもしろかった。

- 3月2日(水)の探検バクモン「爆笑問題、陸前高田に行く」、9日(水)の「爆笑問題、陸前高田をもっと行く」で2週にわたって岩手県陸前高田市を訪れていた。NHKは東日本大震災関係を圧倒的なボリュームで取り上げておりすばらしかった。被災地には明るさや暗さも両方ある複雑な問題があり、その中でエンターテインメント性のある番組で取り上げたことが大変よかった。同様に、福島農業をエンターテインメント性のある番組の中で取り上げてほしい。福島県内の農産物直売所では、被災後に売上が2割程度減少した。今は徐々に回復し、被災前の15%減ぐらいとなってきた。毎日、地元紙では放射能の情報を取り上げており、福島人は福島の米が絶対に安全で、全袋検査で検出ゼロであるということをよく知っている。しかし風評被害は地元から遠ければ遠いほど厳しい状態で、それは情報の問題だと思う。逆説的にいうと福島のお米は日本一安全なのに、値がつかない状態だ。例えば「ブラタモリ」でタモリさんに福島の直売所を訪れてほしい。福島の直売所が元気で、福島の方が福島の農産物を信頼し食べているということを形にしてもらえると大変うれしい。

(NHK側)

ニュースや番組で福島の食の安全について多く取り上げている。5年経過したが、これからも取り組んでいく。

全袋検査を見ると、そこまで実施しても風評被害が続くのか、ということを感じる。爆笑問題やタモリさんに来てほしいという気持ちはよく分かる。NHKとしても、こうした取り組みについて、引き続き取り上げていきたい。

- 探検バクモン「爆笑問題、陸前高田をもっと行く」では、陸前高田市の孤児院を訪れていた。孤児たちが何を感じているのかについて、サヘル・ローズさんは自分も孤児で、当時同情してほしくなかったという話も紹介された。こういったドキュメンタリー番組ではない番組で違う見方を提示したのもよかった。来年以降もこういった取り組みに期待している。

- 3月6日(日)の日曜討論「東日本大震災5年 福島の復興を問う」は出演者に疑問を感じた。福島の復興を問う内容なので、林幹雄経済産業大臣、丸川珠代環境大臣が出演するのは理屈ではそうだと思うが、とりわけ丸川環境大臣は前に問題発言をしており、放射能に対する地元の人たちの不安にまったく共感を示さない、理解しようともしていない人であることを露呈したような人物だ。そのことについて「日曜討論」で追及してほしかったわけではなく、福島の復興について議論しようとするのであれば別の人物がよかったのではないか。政府の考えていることを話すにしても、別の適任者はいなかったのかと疑問に思った。案の定、環境大臣は肝心なことにほとんど触れない内容空虚な発言が多かった。地元の方たちのコミュニケーションを密にさせていただきたいと言っても何も響かない。司会の島田敏男解説委員、ほかの論者たちももっと実質的な内容の発言を引き出そうとしている感じがあったが、難しかった。環境大臣は下手なことを言わないようにしようということだけに終始していたような印象が強かった。議論を豊かにするためにも大臣だからということではなく、ほかの適任者でもよかったのではないか。

(NHK側)

日曜討論「東日本大震災5年 福島の復興を問う」について。どういう人に出演してもらうかは、番組の質、性格を規定するもので、重要なことなので、われわれもよく議論をする。今回は福島の復興を問うということで、事故を起こした原発の廃炉問題、放射性廃棄物をどうするのか、さまざまな問題がある。前にさまざまな発言があり、丸川環境大臣に対する批判があることも承知しているが、環境政策を担う環境大臣は最高責任者であり、今後どうするのか、どう考えているのかを聞くことは必要であったと思う。

- 3月11日(金)の「ニュースウオッチ9」では被災現場からの中継があった。特別なスタイルで、内容は犠牲者について悼む姿勢、災害を語り継ぐことに焦点が当たっていた。それ自体はよくまとめられていてなるほどと思うことが多かったが、5年目当日のメインとなるニュース番組であることを考えると物足りなかった。「3.11」は2つの顔があり、1つは未曾有の自然災害と天災、もう1つは身もふたもない人災ということかと思うが、「ニュースウオッチ9」では、天災に割と傾斜していた印象を持った。地元の人たちは大変な思いをされており、その思いを忘れないようにしようということは大事なメッセージだが、責任の所在という視点についても、「ニュースウオッチ9」であれば出してほしかった。そうした視点をほかの番組で出しているかもしれないが、「ニュースウオッチ9」はメインの番

組であり、そういう視点があったほうがよかったと思う。

(NHK側)

3月11日(金)の「ニュースウオッチ9」について。キャスターが現地に行って見て感じたことを話すことで、多くの犠牲者を出したことや語り継いでいくことの大切さを視聴者に共感してほしかった。東日本大震災は天災と人災の両面があるという指摘もそのとおりだと思う。「ニュースウオッチ9」では「3.11」を中心とする1週間だけでなく、引き続きそうした問題も取り上げ、そういう役割も果たしていきたい。

- 3月1日(火)のハートネットTV シリーズ東日本大震災から5年(1)「当たり前の暮らしを求めて～障害者たちの“震災復興”～」が印象的だった。5年間で何が変わったのか、何が変わっていないのかを見つめていた。金澤翔子さんとは全く違う、地域とも、福祉サービスともつながっていない障害者たちの掘り起こしを、市民団体が1年半をかけて行ったというすばらしい活動が紹介されていた。私は40数年前、ヨーロッパを初めて訪問し、障害者が大変多いと感じた。そのときは若かったため分からなかったが、そこから見ると日本の状況は、障害を隠し外に出さないというような実態があった。それが40数年前の話ではなく、今でも障害のある家族を外に出さない、家族で抱えるということが行われている。障害者に対する私たちの対応が悪いのではないかと身に染みて感じた。震災が明らかにした障害者の孤独、対応方法をもっと深く掘り下げ、番組を続けて行ってほしい。「ハートネットTV」はよく視聴している。いろいろな角度からいろいろな課題を取り上げており、大変よい番組だと思う。

(NHK側)

「ハートネットTV シリーズ東日本大震災から5年」のご意見は大変励みになる。現場に伝えたい。

- 3月13日(日)の「赤宇木(あこうぎ)」(BSプレミアム 後2:00~3:59)を見た。原発事故による被ばく量が高く、村に住めなくなってしまった人たちを追いかけて、村やその人たちの歴史を通じ今回の事態をあぶり出すという歴史的観点のある本格的なドキュメンタリーだった。アンモナイトの時代からその土地を描いて、日清戦争、日露戦争あたりからの足跡、言い伝えのようなものを比較対照として描き、今回の国策による1つの人災という流れの中で描いていた。芸術作品であると同時に

にドキュメンタリーとしてよかった。

- NHKは量と質で圧倒的に3.11の問題を取り上げていた。いろいろな角度から震災の問題を取り上げたこともありがたかった。
- 3.11関連の番組はいろいろ見たが、いずれも大変よくできていたし、今まで気がつかなかったことを教えてくれた。放送されていたか分からないが、甲状腺がんがどうなったのかについては大変関心のあるテーマであり、NHKもどこかで取材してほしい。
- 2月28日(日)のNHKスペシャル「難民大移動 危機と闘う日本人」ではシリア難民の問題を取り上げていた。特にヨーロッパでは難民が大きな問題なのにもかかわらず、日本人は関心を持ちにくく、実態が伝わりにくい。番組では国連で働く日本人スタッフがいろいろ活躍しているところを伝えており、日本からの支援も必要だと日本人に訴えるところもあった。大変よい番組だったと感心した。NHKらしい力の入った番組だったと感じた。
- 3月13日(日)の「NHKニュース7」で「AlphaGo」という人工知能が、囲碁のトップクラスの棋士に勝ったという報道があり、AI、ディープラーニング、深層学習を解説していたが、大変分かりやすかった。テレビでIT系の用語の解説などがあると、耳をふさぎたくなるようなケースが多かったが、最近のNHKの解説は大変よい。チェスで人間にコンピューターが勝って、次に将棋で勝って、今回囲碁で勝ったわけだが、一緒に見ていた家人が「碁がなぜ最後なのか」と私に質問した瞬間に、囲碁については、対局パターンがチェスや将棋に比べてはるかに多く、難しさが“べき乗”で指数的に高まり、ディープラーニングも含め、ようやく人間に勝てるようになってきたという解説が的確に紹介された。ディープラーニングはITビジネスの中でも大変重要な喫緊のテーマだが、一般の方に分かりやすく説明していた。そういった技術がどういうところに役立つのか、単にチェス、将棋、囲碁で人間に勝つことを求めているのではなく、無人の自動車の運転に使われるというところまで解説しており、ひざを打つような思いだった。

(NHK側)

IT系の技術の問題は理解し、説明するのが難しい。世の中で進んでいるコンピューターを使った新たな技術が人間にどう役に立つのかという視点で今後も分かりやすく取り上げる。委員のご意見は早速現場に伝える。

- 3月13日(日)の「NHKニュース7」は大変分かりやすかった。10の360乗以上という天文学的な数字の組み合わせがあることも、一般の方に“べき乗”がどの程度理解できるかは別としてもよい例えだったと思う。同様に3月6日(日)のサキどり↑ シリーズ人工知能がやってきた「第2回 日本企業の“逆襲”が始まった」でも自動車の自動運転でベンチャー企業が一生懸命に取り組んでいる姿をよく捉えていた。
- 最近のEテレは、子ども関係、教育番組でよい番組をたくさん作っており、私の周囲でも評価が高い。
- ともすると旅番組かとも思うが、中身が濃いのが「関口知宏のヨーロッパ鉄道の旅」だ。関口さんのひょうひょうとした頼りなげな様子はいつ見てもあのままだが、取材力に感心している。チェコを取り上げた回では、「プラハの春」の問題、ビロード革命について触れて、プラハの春のときにチェコの方々がどんな思いで戦ったのかを紹介していた。女性アナウンサーでソビエト軍に背中から銃を突きつけられ、脅迫されながらチェコの自由を守り抜いた女性がたまたま広場にいてお茶を飲んでいて、そこに関口さんがふらっと行って今を語ってもらっていた。今の若い世代はプラハの春、ビロード革命がよく分からないかもしれないが、あのスタンスで関口さんの何気ない雰囲気の中で歴史をひもとき、鉄道、ヨーロッパの歴史を紹介している。回を追うごとにおもしろいと思う。NHKの存在価値、取材力のすばらしさを改めて感じてよかった。

(NHK側)

関口知宏さんの鉄道の旅の番組は国内編から始まって、今は海外編を放送している。ヨーロッパの旅も関口さんらしく、地元の方と触れ合いながら巡っている。私も毎回見ており、次はどういう展開になるのか楽しみにしている。

- たまたま海外にいるときに、和食レストランが有田焼を使っているという番組を視聴した。有田焼も進化するし、和食を広げることにもつながり、今の世界が日本を見ているのにぴったりの番組でおもしろかった。日本国内でも放送してほしい。日本の文化を海外に発信するNHKワールドでもさらによりよい番組を期待している。

NHK編成局  
番組審議会事務局

## 平成28年2月NHK中央放送番組審議会

2月のNHK中央放送番組審議会は、15日(月)、NHK放送センターにおいて、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、BS1スペシャル「もうひとつのショパンコンクール～日本人ピアノ調律師たちの闘い～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、3月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	北城恪太郎 (日本アイ・ビー・エム (株) 相談役)
委員	秋池 玲子 (ポストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター)
	大野 博人 (朝日新聞社役員待遇論説主幹)
	大日向雅美 (恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授)
	倉重 篤郎 (毎日新聞社論説室専門編集委員)
	佐野真理子 (主婦連合会参与)
	仲道 郁代 (ピアニスト)
	比嘉 政浩 (全国農業協同組合中央会専務理事)
	藤村 厚夫 (スマートニュース株式会社執行役員メディア事業開発担当)
	増田 雅己 (読売新聞東京本社取締役論説委員長)
	渡部 潤一 (国立天文台副台長)

### (主な発言)

<BS1スペシャル「もうひとつのショパンコンクール

～日本人ピアノ調律師たちの闘い～」(BS1 12月23日(水)放送)について>

- 本当に興味深く、100分近い番組をあっという間に視聴してしまった。曲によってピアノを変更していることなど新鮮な驚きの連続で、今まで知らない世界をかいま見た感じだった。ショパン国際ピアノコンクールにかけるピアニストたちの夢の思いをサポートする調律師たちの仕事への意欲、熱意、喜怒哀楽がよく見え、印象が大変残った。コンクールではピアニストだけではなく、調律師たちが夜中まで一

生懸命に調律を行っているのを見て、コンクールを普通に見るのとは違う視点を発見した。同時に調律師という仕事についてもっと知りたいと思った。ピアノを調律し、保全、管理だけをしている人たちというイメージがあったが、そうではなく、ピアニストを友達のように支え、厳しい目で職人のようにピアノを調律し、組織として皆で関わる姿を見て、調律師とは何なのかと思った。国際ピアノコンクールでの調律師の仕事の複雑さ、命をかけていると知ることができたよい番組だった。

- 大変興味深く優れたドキュメンタリーだと感じた。著名なピアノコンクールの、注意をあまり払わない部分に大変おもしろい闘いがあることがよく分かり、そこに目をつけたことがこの番組が成功した理由だと思う。また、そこに日本人の調律師が多く関わっていることにも興味をそそられた。番組の内容時間は比較的長かったが、飽きることなく、最後まで視聴した。なぜ飽きないのか、恐らく挑戦者に視点を置き続けていたからだと思う。最初にイタリアのピアノメーカーの1人の日本人に焦点を当て、そのメーカーが敗退すると日本のメーカーに焦点を当て、そのメーカーがファイナルで敗退すると別の日本のメーカーに焦点を当てるといふ、うまくもあり、あざとくもある構成に引き込まれた。単にストーリーだけではなく、ピアノメーカーの意味、調律師の役割、演奏者と楽器の微妙な関係も考えさせる描き方で、興味深かった。見終わってからショパン国際ピアノコンクールはピアニストでなく、調律師の争いのような気分になった。どうしても最後に浮き上がってきたのが、優勝者が選んだアメリカのピアノメーカーについてもっと知りたいということだ。挑戦者の視点で最後まで構成されているが、王者として君臨するそのピアノメーカーとは何なのか、その強さとは何か。またそこになぜか日本人が関わっていないことがおもしろかった。調律師の世界で日本人がなぜ多いのかということと同時に、アメリカのピアノメーカーとの絡みではどういうことが言えそうなのかと考えさせられた。完成度の高いドキュメンタリーだったが、機会があればそういったことを取り上げる番組にも挑戦してほしい。
- クラシックから縁遠い人たちまで興味を引くような視点で音楽をクローズアップしてくれたことに感謝したい。音の違いを映像で見せることは大変困難だと思う。調律することでどのように音が変わったのか、聞いている人たちが自分の耳でどうだろうと思いつつも変わったかもしれないと思えるように番組を作っていたことは、大変なことだと思う。ピアノの仕組みや“なぜ”という部分もきっちりと押さえていた。調律師の世界は大変おもしろい分野ではあるが、日常の中で捉えた番組だったらそこまで入り込んで見ることもなかったかもしれないと思う。ピアノコンクールという極まった場でのありようであったために、うまく捉えることができたのだと思う。NHKでは、ショパン国際ピアノコンクールで使われた日本製

のピアノでのコンサートを収録したそう。そういう形でNHKが“受け継いでいる”こともうれしく思う。ぜひ続編の番組を作ってほしい。さまざまな楽器メーカーの歴史を紹介し、皆さんの挑戦の中で、今回は1位が日本のメーカーでなかったというストーリーだったが、2010年にユリアンナ・アヴデーエワさんは予選から本戦まで日本のピアノで演奏し、第1位になっている。イタリアのメーカーはいろいろなコンクールで優勝者に使われたという紹介があった後に、日本のメーカーのその事実が落ちていたのは気の毒に感じた。前回の第1位からの今回の挑戦であったという話にしてしまうと複雑になるという考えもあったのかもしれない。事実の部分とストーリー的な兼ね合いの問題もあるのかと思った。

#### (NHK側)

音の違いを映像で見せることは番組を提案した時に危惧されていたが、実際に収録された素材を見ると、私たちのような素人でもこもったような感じと鋭い感じが分かった。それぐらい調律師の仕事が深いことが素人でも分かった。当初はイタリアのメーカーの越智晃さんだけで番組を構成する考えだった。このイタリアのメーカーは大変躍進を続けていて、ルービンシュタイン国際ピアノコンクールでは上位6人中5人がそのメーカーのピアノを弾いていた状況で、ショパンコンクールでも活躍するのではないかと、そしてその調律師は日本人であり、100万人に1人の耳を持つと言われていた越智さんだった。最初の提案段階では、この越智さんを主人公にし、2時間番組を作るというものだった。日本の2つのメーカーについては取材許可だけは取っていた。結果として越智さんが1次予選で敗退したため、そこから日本のメーカーの取材を増やしていった。越智さんについては、1次予選で落ちたとしても、ピアノがまた次の段階で選択されることもあるので、ファイナルまで継続して取材を続けていた。毎日、現地のディレクターと連絡を取り合いながら取材を積み重ねていった。1つの番組に1人の主人公が定石だとは思いますが、そこを打破し、主人公が次々と替わっていく形とした。

- 大変興味深く、見始めたら時間がたつのを忘れてしまった。最初に越智さんのことを100万人に1人の耳を持つ男という紹介があったが、その後は関連する情報があまり出てこなくなった。前半に越智さんのストーリーと日本のメーカーの小宮山淳さんのストーリーがあったが、前半部分と比べると、後半部分はもう一つの日本

のメーカーやアメリカのメーカーについての情報が薄味に感じ、もう少しドラマがなかったのかと思ったが、今の説明を聞いて納得できた。取材も大変だったろうと思う。取材陣のそういった苦勞が番組の中で紹介されていたらもっとおもしろかったかと思う。

(NHK側)

日本のメーカーそれぞれにドラマがあったとは思いますが、ディレクター一人、カメラマン一人の体制だった上、調律の戦略は企業秘密の部分もあり、あのような形となった。結果的に、主人公や主題が次々に替わる形になったが、反対に斬新だったかとも思う。

- おもしろく視聴した。裏方、作り手がバタバタしていたところをドキュメントとして作るともっとおもしろいかもしいかなと思った。なぜピアノの調律で日本人がそんなに活躍しているのか、日本のメーカーは国内だけのメーカーだと思っていたが、なぜそんなに世界でシェアを持っているのか、それはどこにつながっているのかと考えた。2月13日(土)、14日(日)の「NHKスペシャル 司馬遼太郎思索紀行 この国のかたち」で日本人について特集していたが、同様の観点でなぜ日本人がそれほど活躍できるのかというところを掘ってもらおうと大変おもしろいと思った。また、ぜいたくかもしれないが、アメリカのメーカーとの対比があると興味深い点がもう少し強調されたのではないかと思った。
- ショパン国際ピアノコンクールが大好きで、5年に1回しか開催されないため、いろいろな観点から関心を持って視聴した。調律師に光を当てるという斬新さに引かれ、あっという間の100分で、すばらしかった。一方、主人公が次々と替わるため、いったい何を訴えたかったのか、消化不良の思いもあった。前夜まで自分が調律したピアノを弾いてくれると信じていたが、翌日演奏者が別のピアノを選択した。調律師は本当に残念だったと思うが、その演奏者が演奏後に調律師の元に来て悩みを訴えるときでも、恨みをまったく示さず、温かく助言をしていた。そこに日本人の懐の深さを感じた。そういったところをあぶり出してくれただけでもこの番組はすばらしいと思った。ローザンヌ国際バレエ・コンクールをいつもNHKで取り上げているが、バレエは画面で見ることができる。ピアノは音であり、私にはなかなか捉えられなかったが、今回は音の迫力も表現されていて、大変苦勞して制作したと思う。いろいろな意味で大変楽しませてもらった。
- 次々登場人物が出てきて、ドラマとしては結果的によい展開だったと思う。越智

さんは初めから調律師を目指していたようだが、最初は演奏者としてその世界に入った人もいる気がする。演奏者としての素質と自分の闘いを経て、黒子として、もっと素質のある人に弾いてもらうために調律師になったというような人間ドラマがあるのでないかと思う。そういったエピソードが1つでもあればもっと深みが出たと思う。ほとんど100点満点の番組だったが、プラスアルファとしてそういう印象を持った。

(NHK側)

私たちも調律師はピアニストになりたかった人が多いのかと思っていましたが、音の世界を作ることに最初から興味があり、調律師を目指す方は結構いるようだ。裏方の苦勞を紹介することもおもしろいと思う。おもしろい話としては、ショパン国際ピアノコンクールの事務局はコンクールの演奏や予選通過発表の様子などをネットで無料同時配信していて、そこによくうちの取材クルーが映り込むことがあった。私たちプロデューサーは日本でその映像を見ながらディレクターたちが、何を撮影しているか、誰にインタビューしているかなど、仕事内容を把握していた。そういった取材の裏側を紹介すると、確かにおもしろいかもしれない。

- 未知の世界を知ることができ、大変興味深かった。いろいろな場面で日本人が黒子として活躍していることはあるが、調律師の世界はかなり珍しいほうかと思う。ダイナミックな闘いであること、音の違い、コンクールから去っていく残酷さみたいなものも含め、興味深かった。調律師は、ピアノを教える立場でも審査員でもないという中立の立場から、ピアニストの心の支えになっていることもよいと思った。越智さんの所属するメーカーは小さく、ほとんど個人レベルでピアニストと関わっていたり、営業力が高くピアニスト専用の食堂でもてなすメーカーや、見るからに組織力で運営しているメーカーなど、メーカーごとに違いがあることも発見できておもしろかった。一方で、ピアニストの映し方に偏りがあったことに違和感があった。ロシアのピアニストは表面的な取り上げ方だったのに対して、中国のピアニストはその家族についての紹介とともに本人の声も紹介されていた。見る側としてその濃淡は解釈しきれなかったところもあった。欲を言っている気もするが、ショパンコンクールはアメリカのメーカーが強い、別のコンクールでは日本やイタリアのメーカーが強いなど、それぞれのコンクールの色合いや、作曲家、音楽と調律、ピアノの相性などが全体的に捉えられていたらもっとおもしろく見られたかと思う。またピアノのメカニズムの部分がもう少し分かるとさらにおもしろかったと思

う。全体的には、大変よい番組だと思った。

- ショパンコンクールには関心があり、これまでも関連する番組を楽しく視聴していたが、今回の番組は大変おもしろかった。コンクールで何人の演奏者にピアノを選択してもらえるかで、調律の苦勞がさまざまであることが紹介されていた。演奏者、調律師、ピアノ、オーケストラ、会場、作曲家、その組み合わせでさまざまなことがあることが分かった。調律師の腕だけではなく、ピアニストの腕もあるはずだが、ピアニストの腕と調律師の組み合わせの妙みたいなところをさらに伝えてくれるとよかったと思う。優勝者が演奏したアメリカのピアノは、オーケストラと演奏する際に華やかさがあるため、ピアニストは決勝でピアノを切り替えていた。ピアノそのもののよさだけではなく、そういった周囲との兼ね合いの中で、どのように演奏すれば高く評価されるのかということが見られ、興味深かった。また、あまり脚色していないところがよかった。素直に取材し、素直に構成したところが大変よかった。プロのすごさ、一芸に秀でるとはこういうことかと勉強になった。引き続き普段われわれの気がつかないところでプロが活躍していることを教えてほしい。

(NHK側)

私どもも胸を張れる番組であり、同じような番組をまた作っていきたい。私は音楽についてそれほど詳しくないが、NHK交響楽団の首席指揮者のパーヴォ・ヤルヴィさんに、音楽の素人として「作曲家、指揮者、アーティスト、聴衆がいるわけだが、聴衆には作曲家の意図がどれほど伝わっているのか、あるいは違うものになっているのか」と質問したところ、ヤルヴィさんは「まったく違うものだ」と答えていた。調律師はその関係性の中でどこに入るのか、だれに合わせて調律を行うのか、ピアノの音が曲によってどんな違いが出てくるのかなどは、考えても楽しい疑問だ。調律によって聴衆にどんな影響を与えるのか、素人として今後も見たいと思う。

今回描ききれなかったものはたくさんあるが、中でも曲と調律の関係がある。1次から4次予選まですべて違う課題曲であり、それぞれの曲に合わせ、細かく調律が行われている。そういったことを次回の5年後にはさらに細やかに紹介したい。調律師たちの闘いは実際はもっと激しいもので、そういっ

たことも含め今回の反省点を生かしていきたい。ありがとうございました。

<放送番組一般について>

- 1月17日(日)のNHKスペシャル「震度7 何が生死を分けたのか～埋もれたデータ 21年目の真実」を見た。あれだけのデータを分析できるのはNHKらしいと感心した。
- 1月31日(日)のNHKスペシャル「ママたちが非常事態！？～最新科学で迫るニッポンの子育て～」を見たが驚きの連続だった。赤ちゃんの夜泣きの原因、お母さんたちの不安の原因などが科学的にここまで解明できるのかと驚くと同時に、自分の来し方を振り返ると何と理解が足りなかったのかと反省を強く迫られ、印象に残った。女性だけでなく、男親が子どもを持つ、あるいは育児をすることで脳科学的に変化が生じることはないのか、そういうことも知りたいと思った。番組の端々で夫の接し方の話、社会の子育てに対する関わり方など、問題点のようなことがいくつもあった。今回のテーマからは外れてしまうだろうが、男性の育児参加、社会と育児との関わり方などについても深く掘り下げる番組を制作してほしい。今は少子化、乳幼児虐待・殺害などのニュースが飛び交う世の中で、参考になるのではないかと思った。

(NHK側)

NHKスペシャル「ママたちが非常事態！？～最新科学で迫るニッポンの子育て～」は担当した女性ディレクターが自ら育児をし、時短勤務をしながら制作した番組で、ワーク・ライフ・バランス的にも成果のあった番組だ。いただいた意見をフィードバックし、励みにしたい。

- 2月6日(土)のNHKスペシャル「史上最悪の感染拡大 エボラ 闘いの記録」は、ウマル・カーン医師の警告があつたにもかかわらず、結果としてエボラウイルスが拡大してしまったという番組だった。だれが映像を撮影したのか、エボラウイルスがまん延しているところに撮影しに行くのは大変だったのでないかと思う。そこからわれわれが何を学ぶのかということも報道してくれたことは意味があり、大変すばらしい番組だった。海外の番組を購入してきたのかは分からなかったが、大変よい番組だった。

(NHK側)

NHKスペシャル「史上最悪の感染拡大 エボラ 闘いの記録」はNHKが撮影したものだけではなく、病院のスタッフたちが記録していたものを現地で交渉し、少しずつ集めた映像も含まれている。NHK独自に取材を1人1人行い構成した番組だ。現地に入れるようになるまでに時間が少しかかったため、放送まで1年ぐらいかかった。発症当時からの番組を作ろうという記者、ディレクターの熱意のたまものということで先日ようやく形になった。

- NHKが作った番組で、映像は現地の方が撮ったということか。

(NHK側)

購入ではなく、NHKで独自に構成した番組であり、映像もNHK撮影が主体で、現地の方が撮った映像も含まれているということだ。

- 2月9日(火)のはに丸ジャーナル「はにスクープSP パクリの境界線を追え！」(総合 後10:55~11:20)を見た。はに丸のことはよく知らず、30年前に番組があったこともまったく知らなかったが、たまたま新聞を見ていて何となく視聴したが、大変おもしろかった。はに丸の質問が共感できる内容で、思わず引き込まれた。大人から子どもまで楽しめるジャンルとして期待できそうな番組で、次の放送が待ち遠しいと感じた。はに丸の質問の内容、透き通るような声、特に笑い方が楽しそうで、「はにゃ」と言うときの間の取り方もうまくできていると思った。時事問題に切り込む新しいキャラクターとして活躍して欲しい。はに丸の横にいるひんべえにも何か役割があれば、もっとおもしろいのではないかと思った。これから時事問題を扱う番組では、はに丸は欠かせなくなるのではないかとおもしろい印象を持った。

(NHK側)

今回が3回目の放送だった。はに丸は30年前に小学生向けの歴史番組のキャラクターだったが、番組が終了してから30年の間に世の中がずいぶん変わったという視点で、今の世の中の疑問を指摘するという番組だ。制作スタッフと一緒に何を取り上げ、どういう質問をするのかは考えているが、

タイミングよい会話を可能にしているのは、はに丸の声を担当しているのがアニメなどで有名な声優の方で、常に撮影現場のはに丸の隣にいて声を出しているためだ。相手との距離感、タイミング、質問の仕方が大変さえている方だ。これからも取り組んでいきたいし、どういう形だったら定時的に制作できるのか、安定した番組にできるのかも考えたい。

- NHKの取材力はすばらしいといつも思っている。2月11日(木)の「城から消えたダ・ヴィンチ『糸巻きの聖母』の数奇な旅」(総合 前8:15~8:59)を見た。城から消えたレオナルド・ダ・ヴィンチの絵画を追いかけていたが、私たちにはなかなか入ることができないフランスやイギリスの貴族の暮らしの中で名画がどう守られてきたか、盗難されたいきさつなどが見られ、おもしろかった。「岩合光昭の世界ネコ歩き」も好きだが、NHKの取材力はすばらしいと思う。
- NHKはアーカイブスを多く所有しているが、それをどう活用するかはそのときの歴史認識の判断みたいなものもあると思う。北朝鮮が水爆実験を行ったという発表にレスポンスした形で、アーカイブをひもといていた。2月14日(日)のNHKアーカイブス「“核なき世界”はいつ～湯川秀樹のメッセージ いま再び～」は、湯川の存在と発言がどこまで今のわれわれに響くのかという問題意識から視聴したが、あれだけ気骨のある人生を生きた方の、ことばと行動をしっかりと映像で撮っていたと思う。湯川が科学者としての道から核廃絶の社会運動家としての仕事にかじを切るきっかけとなったアルバート・アインシュタインとの交流がよく描かれていた。湯川の奥さんの証言として、アインシュタインが湯川の手を握ってポロポロと涙を流し「悪かった。われわれが作った原爆で、広島ではあれだけの人を殺してしまった」とごんげをしたという話も紹介された。その立場にあった人でなければ発しえない、今に残ることばの数々があった。アーカイブスとしてよかったと思う。
- 「これでわかった！世界のいま」を大変楽しみにしている。軽やかな演出を行っている側面と、課題や問題となるニュース解説の切り込み方に、制作現場の思いの強さを発揮させる効果が若干あるように感じ、言いたいことをある程度言えているニュース解説番組として私にフィットしている。NHKでここまで踏み込んでよいのかと思うこともある。たとえば1月17日(日)には、台湾総統選挙を取り上げており、若い人たちのパワーの源は、過去の経緯にさかのぼると実力行使によって得られた実感から来ているなどと踏み込んだ解説をしており、その内容に驚いた。そういうニュースの解説に制作現場の思いもいろいろな形で仮託されていて、その熱

い思いが伝わる番組だ。ところどころでそういう切り口をNHKには確保して続けていってほしい。海外の事柄で言いやすい側面はあるのかもしれないが、世界のいまも含む日本のいまという観点で踏み込んだ番組作りができるように応援していきたい。

- 「これでわかった！世界のいま」は大変おもしろい。出演者たちの素朴な疑問に対し、きちんと解説をしてくれるのがおもしろい。おもしろいと思っているところで1時間目としての項目が終わり、2時間目として次のテーマに変わるのも興味深い。家族で見る人もいる放送時間帯であり、よいと思う。私もときどき見ている。

(NHK側)

「これでわかった！世界のいま」は、タイトルのとおり「これでわかった！」と言っていただけのような国際ニュース番組にしたいという思いで作っている。授業のような形態にしたのは、若い世代も含め、国際ニュースに親しんでもらいたいという意図だ。「これでわかった！」と言ってもらうためには、現場で取材している人間の実感も込め、分かってほしいという熱意が伝わる番組にしたいということで取り組んでいる。国際ニュースはなかなか見ていただけない部分もあるが、そこを乗り越えて、「これでわかった！」と言っていただけの番組にしていきたい。

- 1月23日(土)の戦後史証言プロジェクト 日本人は何をめざしてきたのか 未来への選択 第7回「難民・外国人労働者 異国の民をどう受け入れてきたのか〜」(Eテレ 後11:00~翌24日(日)前0:29:30)は、シリア難民の日本での受け入れが60数件で、認められたのは3件しかなく、外国の人と一緒に暮らすための社会をどう作るかということを取り上げていた。ヨーロッパであれだけ難民の問題が起きているにもかかわらず、日本は難民の受け入れがこんなに少なくてよいのかという問題が常にあると思う。実際の難民の受け入れ問題の難しさを含め、日本人としてどう取り組むのかはこれからも継続して取り上げてほしい。
- 2月10日(水)のスーパープレゼンテーション「熱血校長奮闘記 高校を立て直せ！」はアメリカの貧困地区にある学校を立て直した女性校長先生の奮闘記で、なかなか見応えがあった。日本でも「スーパープレゼンテーション」のような番組を作ってもらいたい。日本にもすばらしい人たちが大勢おり、いろいろなプレゼンテーションの仕方があると思う。ご一考いただけないかと思う。

(NHK側)

日本でも制作できないか、考えてみたい。

- 二・二六事件から今年80年だ。一つの節目に番組を作ることが多いが、いつもよいものができるわけではない。2月14日(日)のころの時代～宗教・人生～シリーズ私の戦後70年「かくも長き道のり」を見た。陸軍教育総監だった渡辺錠太郎さんの娘・和子さんは、ノートルダム清心学園の理事長で著名な方だが、今回は二・二六事件の一方の当事者として出演していた。和子さんと取材したディレクターの間に相当長い信頼関係が築かれていることを感じられるインタビュー内容で、その関係の中で和子さんの話がどんどん深化していく印象を受けた。それもよかったが、もう一方の当事者が錠太郎さんの息の根を止めた反乱軍の兵士、安田少尉の弟善三郎さんで、天皇陛下に背いたという烙印(らくいん)を押され、戦中も、戦後も、鬱屈した家族それぞれの人生をよく引き出してくれたと思う。事件が起きたとき善三郎さんは10歳で、それから罪の意識がずっと消えなかったが、あるとき偶然に和子さんと二・二六事件の法要で出会い、和子さんが兵士の墓にも参ってくれたことをきっかけに自分の戦後がようやく終わり、人生の転機を迎えることができたという感じもよく出ていた。二・二六事件を扱う番組としてはよい出来かと思った。
- Eテレは昔、内容が固い番組が多かったが、最近は大変工夫された番組が多く放送されている。その1つが「スイエンスー」だ。NHKらしからぬ作り方だが、大変おもしろい番組だ。こういう形でサイエンスのおもしろさを訴えることもあるのだと思った。実験番組もぜひ続けてほしい。先日、重力波が検出されたが、その報道についても、理解が難しい重力波を分かりやすく一般のニュースの中で解説していた。そういう意味でも力を入れて取り組んでいる印象を持った。「スイエンスー」をはじめ、科学のおもしろさを伝える番組をいろいろな角度で制作してほしい。
- 「世界入りにくい居酒屋」が大変おもしろくて好きだ。なぜそんなにおもしろいのかと考えると、視聴者を動的に巻き込み、番組を受け身で見のではなく、裏トークみたいに画面で話す人たちとともに、旅雑誌を読んでいるかのような演出で、自分でそこに入って味わえるからではないかと思う。テレビが何かを伝え、視聴者がそれを受け取る、スイッチを押し、双方向で何かをするのではなく、見ている人の視点がいろいろな形で参加できるような番組の形があればとても広がるのではないかと思う。社会問題など難しい問題も、小さな問題も、難しいと思われる芸術も、

切り口、視点を変えたり、撮り方によって関心を呼ぶことができる。かつてドイツに住んでいたことがあるが、ドイツの番組は戦争については大変シビアで、自分の国のことなのに、本当にドイツ人に向けてこんな番組を流すのかというものが多くとても驚いた。日本は割と感情に訴える作り方が多いと感じる。国民性が異なるため、日本にドイツのような番組を作って受け入れられるかという点と違うかもしれないが、今の視点の切り口をさまざまな方向から捉えることによって、厳しいこともうまく伝えることができるのではないかという可能性を番組から感じた。

- 2月8日(月)の衆議院予算委員会で高市早苗総務大臣が「放送局が政治的な公平性を欠く放送を繰り返したと判断した場合、停波もありうる」というような発言をし、話題になった。NHKではどの程度そのことについて放送で伝えたのか。

(NHK側)

予算委員会のニュースを伝えた際に、高市総務大臣の発言内容と、安倍総理大臣の発言について、メインのニュースの中で伝えた。

- 質問の仕方等で、文脈が微妙なものを含んでいたことはよく分かる。かなり踏み込んだ発言でもあり、議論も呼んでいる。放送局自体のこともあり、どんな形でも踏み込んで解説するか、コメントを取るようにしたほうがよかったのではないか。高市総務大臣は確かにしつこく質問を受けていた部分もあるが、本人もこだわりがあるように見受けられるし、「停波」ということば自体が引き起こすインパクトにこだわる以上に、その背景に何があるのか、放送について政治的な緊張があるのかないのか、社会の要請はどんなものなのかということはこの機会に掘り下げてもよかったのではないかと思う。

(NHK側)

一つひとつの番組の中でバランスを取るべくベストを尽くすというのがわれわれのやり方であり、放送全体として公平性を確保するようにしている。過去の総務大臣は、「放送は全体でバランスを取らなければならない」と言っている。今回の件では「政府統一見解」が示されたが、前のスタンスを踏襲し、「全体でバランスを取るべきだ」という見解だと理解している。NHKはなぜ放送でそのことについて積極的に伝えないのかという質問だが、そのつどニュースでも伝えている。

- 本日午後からの民主党の山尾志桜里議員と安倍総理大臣、高市総務大臣の質疑を聞いた。「政府統一見解」には全体のバランスを取る部分と個別の番組でも対象にするという2つのことが併記されるような形で記載してある。政府と質問者の間でどちらが政府の意図なのかというやりとりがあったことに対し、政府側、安倍総理大臣にしても高市総務大臣にしても、“全体でバランスをとる”ということが、政府としての最終的な結論であるという答弁になっていなかった印象を受け、個別の番組でも対処することはまだ生き延びていると感じた。それだけ解釈の難しい問題だと思う。一つのニュースで終わらせるのではなく、言論機関、放送機関に対する大きな課題として、解説をもっと深めるべきだと思う。両論を紹介することでもよいし、全体を見て判断する形でも、放送で伝えたほうが、安倍政権からのNHKの自律性が浮かび上がり、見ている側にとっても安心感の持てる報道になるのではないかなと思う。

(NHK側)

いま一度「政府統一見解」をよく見てみたい。われわれにとっても言論の自由はきわめて重要なことで、無関心ではない。

- 国会で取り上げられており、視聴者から誤解を受けないためにも、何らかの形でNHKの基本的な考えを伝えたほうがよいのではないかな。

(NHK側)

NHKは放送の自主・自律を守っていく。いろいろな考えはあると思うが、放送の自由にも深くかかわる問題だと認識しており、十分に考えながら取り組んでいきたい。

- NHKが認識し考えていることを伝えた方がよいのではないかな。考えていても伝えないと一般の人には分からない。
- 何をもってバランスというのかがはっきり分からない。NHKとしてどう考えるのかは世の中に言っていくべきだ。NHKが政権寄りだとは思わないが、NHKだけではなく、民放も含めて政権に対して一歩引いていて、今までの放送と違うところがずいぶん出てきているような気もする。NHKとしてどう考えるのかをきちんと発言したほうがよいと思う。「クローズアップ現代」問題のときも過剰演出か、やらせかという線がはっきりと分からないまま、そこは平行線のため私もこれ以上は言わないが、NHKが何を考えているのかは、どこかで発言してほしい。

- NHKの番組の中で女性職員の活用の仕方、特にアナウンサーの活用の仕方について。NHKにはすばらしい女性アナウンサーが歴代存在しているが、年を少し重ねるとEテレなどで朝や夜の番組を担当するようになってしまっているように思う。あの方々の落ち着いたある語り口や見識は、ゴールデンのニュースなどで活躍してもおかしくないと思う。ときどきイギリス、フランスを訪ねてテレビを見ると、年配の女性アナウンサーが堂々とメインの時間に出演している。NHKでは40歳ぐらいになるとあまり見ることがなくなり、もったいないと思う。若い女性アナウンサーで最近では極端に短いスカートをはいている方がおり、ニュース番組でこの短さは心配だと思うことがある。インターネットではNHK女子アナの美脚というコーナーができていくぐらいだ。そういう楽しみ方はいけなくて堅いことを言うつもりもないが、ニュース番組に出ている方の服装の見識は考えていただきたい。また、もう少し年配の女性アナウンサーの力をゴールデンの時間でも活用してもらえれば、若い人たちにとってもよいのではないかと思う。

(NHK側)

貴重なご意見だ。40歳を過ぎると起用しないということはない。もともとわれわれの世代は女性をそれほど採用していない時代で、相対的に目立たないことがあるかもしれない。「歴史秘話ヒストリア」の渡邊あゆみアナウンサーなど、ベテランも活躍している。服装の問題は華美にならないように現場に伝えている。しかし現にそういうインターネットサイトがあるということで、そういう目で見られていることは確かにあるのかもしれない。海外のさまざまなニュースをBSで放送しているが、女性アナウンサーの服装はオーソドックスなのも確かだ。そういう印象を受けないように現場に注意したい。

- 北朝鮮のミサイル発射の報道でNHKは動画を撮っていたが、驚がくの映像だった。北朝鮮のプロパガンダの映像はともかく、報道として実際に垂直に上昇するところを撮った映像はほかになかったように思う。そもそも打ち上げの時間帯もはっきりしていないものを、場所を確保することも含め、いかにして撮影したのか。大変すごい映像だと思った。

(NHK側)

東倉里(トンチャンリ)という発射場の上空を俯瞰(ふかん)

して見られる街が中国と北朝鮮の国境の中国側にある。そのホテルを借り、カメラを持ち込んで待機していた。北朝鮮から発射の予告があったためその前にホテルに入り、朝からずっと見続け、打ち上がったところを撮影した。今回はたまたま天候もよく打ち上げを撮影できた。NHKだけではなく各テレビ局が同じようにそのホテルにカメラマンを派遣していた。

前の日にNHKはミサイルの発射の日取りが前倒しされたという特ダネのニュースを伝えており、その日に打ち上げるとほとんど決まっている感じだった。NHKも民放各社も、そこで準備していたということだ。

- 大相撲初場所で大関・琴奨菊が初優勝し、10年ぶりの日本出身力士の優勝となった。確かに事実だが、あまり10年ぶりということにフォーカスすると、その間に頑張っていた外国出身力士が気分を悪くするのではないかと思う。大相撲も国際化し、日本出身力士の10年ぶり優勝というのはニュースだと思うが、そこだけ取り上げるのもどうなのかと感じた。

NHK編成局  
番組審議会事務局

## 平成28年1月NHK中央放送番組審議会

1月のNHK中央放送番組審議会は、18日(月)、NHK放送センターにおいて、12人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」(27年度第3四半期・10～12月について)、平成28年度国内放送番組編成計画およびインターネットサービス実施計画について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、2月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

### (出席委員)

- |     |  |
|-----|--|
| 委員長 | 北城恪太郎 (日本アイ・ビー・エム (株) 相談役)                         |
| 委員  | 秋池 玲子 (ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター) |
|     | 有森 裕子 (元マラソンランナー)                                  |
|     | 大日向雅美 (恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授)                         |
|     | 倉重 篤郎 (毎日新聞社論説室専門編集委員)                             |
|     | 佐野真理子 (主婦連合会参与)                                    |
|     | 永田 紗戀 (書家/花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰)            |
|     | 仲道 郁代 (ピアニスト)                                      |
|     | 比嘉 政浩 (全国農業協同組合中央会専務理事)                            |
|     | 藤村 厚夫 (スマートニュース株式会社執行役員メディア事業開発担当)                 |
|     | 増田 雅己 (読売新聞東京本社取締役論説委員長)                           |
|     | 渡部 潤一 (国立天文台副台長)                                   |

### (主な発言)

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」

(27年度第3四半期・10～12月) について＞

- 質的指標と量的指標のデータを年に4回説明してもらっており、大変手間のかかったデータとして受け止めている。今回のように、ほとんど変化が見られない場合、善戦しているのか、改善されていないのか、評価が大変難しい。調査を始めてから、顕著な変化があり、何らかの対応を行い指標が改善したケースはあるのだら

うか。そうであれば調査や議論に意義があるということになると思う。

(NHK側)

前回の報告では「クローズアップ現代」と大河ドラマ「花燃ゆ」の指標が全般的に下がっていた。「クローズアップ現代」では「1. 丁寧に取材・制作されている」「2. 正確な情報を迅速に伝えている」が課題となっていた。大河ドラマ「花燃ゆ」はいくつかの指標でマイナスとなっており、最近では大きな変動だった。今回あまり変化が見られないということは、前回下がってしまった指標がきちんと回復していないことを意味していると思う。大河ドラマ「花燃ゆ」は放送が終了しており、新しい「真田丸」でどのような指標となるかは注目している。「クローズアップ現代」も新年度には新しい番組となる予定だが、今年度の放送も含め、信頼を回復していくために努力をしているところだ。残念ながら、顕著に回復したということは申し上げられないのが現状だ。

- 第66回NHK紅白歌合戦「ザッツ、日本！ザッツ、紅白！」の視聴率は39.2%で、それほど悪い数字ではないのかもしれない。芸能人が応援するパートで、ほぼ裸のお笑い芸人が出てきた。NHKは品位のある番組を提供してくれるから、家族で見るところがあると思うが、ほぼ裸の人を出演させる必要があったのかと疑問に思った。そういう意見は寄せられなかったのか。

(NHK側)

そういう意見も頂いた。特に「NHK紅白歌合戦」は幅広い年齢層に見ていただいていることもあり、悪ふざけのようなことがあってはよくないという意見もあった。今後の番組作りの参考にしたい。

- 多少の違和感があった。歌合戦であり応援団がいろいろ出てくるのはよいが、1人だけが際立っていた。考慮してほしい。
- 視聴率の数字は平均だと思うが、科学の世界では変動率というか、標準偏差のようなものがある。そういう統計は出していないのか。毎日の値を平均して算出しているのか。

(NHK側)

そのとおりだ。四半期の値の変動については、統計的な差があったかどうかを注視している。

<平成28年度国内放送番組編成計画

およびインターネットサービス実施計画について>

- 番組の編成を変更することは大きな意思決定で、今回は平日の時間帯を、総合テレビを中心に變更しており、いろいろと検討したうえでの意味のある変更だと思う。私たちはその断面しか見ておらず、改定した結果がどうなったのかは調査結果に表れており、おそらく組織の中での試行錯誤の結果を反映させ、取り組んでいると思う。視聴者のニーズは変化していくもので、編成の變更が将来に生きるように取り組んでほしい。調査の結果でテレビに期待している番組として、午後7時台は「気楽に楽しめる番組」が多いとのことだが、正しくニーズをくみ上げているのかどうかだ。ある程度、継続的に取り組まないといけないところがある。一方で、「気楽に楽しめる番組」という調査結果に引っ張られるが故にそのような番組を制作し、調査結果がそう出てしまうところもあるかと思う。その辺りで工夫しているところがあれば教えてほしい。

(NHK側)

「いつもこの番組を見ているからこの時間帯はこういう番組を見たい」という意見が調査で出てきやすいことは承知している。NHKを見ている人では、「1. 世の中の動きが分かる番組」は「NHKニュース7」と「クローズアップ現代」のある午後7時台、「ニュースウオッチ9」のある午後9時台が高い結果となっており、NHKの編成に合った形で視聴者が見ているということだ。生活時間帯の変化に合わせ、今の編成に満足している方や、新しいニーズを欲している方に合うような編成はどうあるべきかを、総合的に判断し改定を行うつもりだ。NHKとして、視聴者に見ていただきたい番組はどのようなものなのかを意識し、新しい編成計画に基づき、番組の内容を高めたいと考えている。午後7時30分から8時45分に、家族で楽しんでいただけるNHKらしい番組を作るために制作現場とも話し合い、新年度に向けた作業に入っているところだ。

- 年末にT P P (環太平洋パートナーシップ協定)の影響試算を農林水産省、政府全体が出し、農林水産業は2,000億円ぐらいのマイナス影響があるのでないかということだ。もともと日本の農業は右肩下がりの崖に入りかけているところであり、そこからさらに2,000億円下がると言われることに現場である農業関係者は違和感を持っている。しかしながら、そのこと自体が問題なのではなく、崖にいること自体をどうするのかを論じてほしいと思う。「日本農業の問題は兼業農家だ」という人がいるが、そうではない。こういった指摘をする人は、兼業農家が農地を手放さないから、大規模化したい農業者が大規模化できないと思っているが、そういう時代は終わっている。農地は余っているが、活用できる人がいないのが今の状況だ。かつて農業経済の世界では、農地や農産物の需要が限られているために農業者が減ることで生産性が上がると言われ、それが正しい時期もあったが、常識は変わり、そうではない時期に来ている。NHKは世の常識を問う力を持っており、こういった日本農業をテーマにした骨太な情報発信をするべきだと思う。
  
- 消費者としてスマートフォンを使っている者からすると、インターネットサービスを利用してより積極的に、津々浦々まで、そしてリアルタイムに情報を届けることは、受信料収入を得ているNHKが持つポジションとしても、より大胆に行うのがよいと思う。しかし、民業との兼ね合いも含め、その動きは少しずつに見える。現状では、利便性の高い情報、NHKが得意とする機動性の高い情報、質の高い情報すべてについて、インターネットを介して即座に欲しいと思っている方々が大変多いのではないかと。スマートフォンを一つのユニバーサルな受信機と考えたときに、そこが多くの方々が望むことであり、どう充実させていくのか重要だと思う。例えば英国のBBCなどでは政府からのコスト削減要請が高まっており、外部に向けた情報発信については、事業者などから積極的に収入を得て、その収入を前提にコストを適正化する動きがあると聞いている。今後の大きな枠組みの中で、いかに事業収入を得て、豊かな情報発信を行うかという観点についても、インターネットサービスは重要な分野だと思う。NHKがどういう方向に向かっているのかを伺いたい。

(NHK側)

NHKの機動性のある情報、正確な情報を多くの視聴者が求めているのは時代の流れで、ご指摘のとおりかと思う。ニュースも関連団体を通じ、各事業者に有料で配信しているものがあり、副次収入という形でNHKの予算に組み込まれている。テレビだけを見る時代は早いスピードで変化していく。民業にも配慮しながら、インターネットサービスでいかにNHKのニュースやコンテンツを見てもらうのかは、法律

の改正等もにらみながら進めている。

- 看板番組の一つである「クローズアップ現代」を「クローズアップ現代+（プラス）」にリニューアルし、放送時間帯を午後10時に移すことについて、午後7時半ぐらいは“ながら”で見る人が多く、じっくりと専念して見てもらえる人の多い午後10時台に移すという説明だった。そのほうが私自身も視聴しやすくなるので歓迎したい。一方、主婦層、中高生、高齢者が“ながら”で見るができる時間帯である午後7時半ぐらいに良質な時事問題を扱い、社会的な警鐘を鳴らす、啓蒙することができる番組があることは意義深かったのかと思う。また、民放のバラエティー番組を見るよりは「クローズアップ現代」がよいと思って視聴している人もいたのではないかと思う。来年度の編成で、民放と同じような種類の番組が午後7時半ぐらいに並ぶことになることは、そういう意味では残念だという感想を持った。

(NHK側)

「クローズアップ現代」で放送しているいろいろなテーマについて、去年の夏に「NHKのニュースは見るが、『クローズアップ現代』をあまり見ない」方を対象にインタビュー形式で調査を行った。「このテーマだったら本当は見たいが、午後7時半には家にいない」「午後7時半は仕事で見られない」という方が多かった。「『クローズアップ現代』がもっと遅い時間帯であれば見られるのに」という意見も頂いた。そういったさまざまなことを考慮して新しい編成にした。指摘された視点も重要だと考えている。

- 私も同じポイントに注目した。変更する部分が多岐にわたっているが、それなりの理屈の中で展開されており期待できると思う。エンターテインメント系を午後7時半以降に、報道番組をその後にまとめ、夜9時から報道番組を見てもらおうということだと思う。夜9時以降はなかなか見応えがあると思う。「ニュースウォッチ9」「クローズアップ現代+（プラス）」「ニュースチェック11」という編成に期待したい。ある意味で、この編成は、民放と夜のニュース番組を競い合うようなポジションに入ることもあると思う。民放番組に対するNHKの独自性をどう意識しているのかを聞きたい。「ニュースチェック11」は現在の「NEWS WEB」とどう変わるのだろうか。

(NHK側)

午後10時台や11時台は民放でも報道番組を放送してい

るが、どの放送局もわれわれが考えているように、仕事を終えられた方々が視聴する時間帯だから編成しているのだと思う。来年度の番組編成を考える際に、NHKの接触者率や視聴率が長期的に低落傾向にある問題が根源にはある。特に59歳以下について、NHKの番組を視聴してもらえないという課題がある。NHKは、視聴率のみを追いかけているわけではない。視聴率にかかわらず必要とされるものは放送する。一方、受信料を頂いている立場からすると、見てもらえない人たちをなるべく少なくしたい思いもある。見てもらえないことは、受信料も払っていただけないことにつながりかねない。民放とは違う意味で、年層ごとに平均して見ていただけるような番組を提供する必要があると思う。Eテレでは子どもたちに大変人気が高い番組があるが、Eテレを卒業する年代が徐々に低年齢化しており、ティーンエイジャーにはなかなか見てもらえないといった問題もある。そうしたことを総合的に勘案し、今回の編成を作っている。結果的には午後9時から報道系番組が並ぶことになったが、それぞれの番組の特徴をきちんと出し、NHKらしい番組を提供したい。午後7時台は娯楽番組に分類される番組が多く並んでいるが、「NHKらしさ」を生かした娯楽を提供できないかと考えている。「NHKらしさ」についての定義は難しいが、NHKは公共放送であり、より強く意識している。そういう視点からニュースやドキュメンタリー、その他の番組も、NHKらしいよいものを提供したい。

午後7時半からの番組は民放と同じような番組ではないかという指摘があったが、私たちは民放のよいところを学びはするが、さらにひと味違うものを制作したいと思う。いま放送している「ブラタモリ」は、相当に深く調べて、地域の文化や歴史などを、敷居を低くした形で紹介している。いろいろな方に見てもらいやすいように努力しているが、内容そのものは相当高度な情報で、こういうことを知っていただくと楽しいということを詰めて、お届けしたい。

来年度の番組編成は新鮮味を出すことかと思う。今までのNHKでは、大体同じ時間に同じような番組を放送してきた

が、59歳以下の現役世代の人たちでNHKの番組を見ている人は少なく、それで本当によいのかということだ。また、生活時間も大きく変化してきており、そういったことも踏まえて編成を変えた。午後7時半から9時の時間帯で、新たな一家団らんの形を構築できるのではないかとということも含め、親子で楽しめる時間帯を設けたいという編成局の強い要望もある。「クローズアップ現代」をリニューアルして午後10時台に移すことが、どういう変化を呼ぶのかも含め、チャレンジすることにした。編成を変更することは大変なことだが、思い切ってチャレンジしてみたいということだ。

- 「クローズアップ現代」の変更は、大きな挑戦だと思うが、私は妥当で意欲的な挑戦だと思う。今回考慮したことを、文章に記載したらどうか。変更した目的などの記載がないと、よかったかどうかの評価がしにくい。また、いろいろなドラマ番組があるが、民放と比較し、視聴率がどうなのかも知りたい。NHKらしい社会性を持ったドラマを放送するのだろうが、あまり暗いと、家族がチャンネルを変えてしまうことがある。ドラマに対する評価もしてもらえるとよいと思う。
- インターネットサービス実施計画について。若い世代のTV離れは今後加速するものと思われる。NHKにおいてもインターネットサービスを付随サービスとしてではなく、コンテンツの主要なアクセス方法と位置づけ、早急に体制を固める必要がある。また、インターネットコンテンツの作成においては、スマートフォン画面で視聴することも想定し、インターネットならではの双方向コミュニケーション、若い世代の感性に訴えかける番組の作成など、各局の若い世代の意見を積極的に取り入れることを期待したい。テレビ視聴者との不公平感が出ないように、受信料制度の抜本的な見直しについても早急に着手するべきだと思う。

#### <放送番組一般について>

##### (NHK側)

昨年12月に開かれた中央放送番組審議会で、委員から12月12日(土)と19日(土)に放送した超絶 凄(すご)ワザ!「地震に打ち勝て!究極の“揺れない住宅”対決」に対する意見をいただいた。1点目、番組では建物のいちばん上の部分に免震構造を用いて揺れを吸収する構造を紹介した。

それについて委員から「先行する研究や実験施設が存在しているのに、そのことに触れなかったのは科学技術のオリジナリティーを軽視するものだ」という意見があった。2点目に、地震の揺れをレールとローラーを使って縦の位置エネルギーに変換することで揺れを抑える技術について番組の中で「独自」と表現したが、委員から「その技術はすでに商品化されている」という指摘があった。この2点について、制作を担当した名古屋局とともに調査を行った。1点目について、番組で紹介した塔頂部免震機構という技術は、建設会社の技術研究所に実物としてすでに存在していた。番組制作者も取材で、その事実を認識していたが、出演者が「建設会社の技術と自分の技術は厳密に言えば違う」と主張したため、塔頂部免震機構でそれまで積み重ねられてきた研究の説明、先人の成果を省略したまま取り上げてしまった。塔頂部免震機構の技術については、これまで積み重ねてきた研究の成果をきちんと紹介し、そのうえで今回の出演者が発案したアイデアを紹介すべきだった。2点目について、番組で紹介した、ローラーと傾斜レールにより免震するアイデアを使った技術は、委員の指摘どおり、ショーウインドーの免震技術として、すでに商品化されていることが分かった。番組では当初、出演者が特許を持つ基底部にラグビーボール状の免震構造を設けたオリジナルの技術で挑んだが、重さなどの制限の中で実現出来なかったため、ローラーを使った構造に切り替えた。その際に特許や先例がないかをきちんと確認すべきだったが、出演者自身も既製品などの存在を知らなかったこともあり、そのままその技術を番組で取り上げた。ローラーとレールによる免震技術を採用するならば、既製品の免震技術を紹介し、そのうえでそれを5層それぞれに使用することが出演者のアイデアであると伝えるべきだった。

指摘いただいた委員に上記の結果を報告し、委員からは「NHKの番組は基本的に丁寧にデータの出所を表しているが、このたびの放送は丁寧さを欠いていた。科学は基本的に積み上げであり、過去を軽視してはならない」というメッセージをいただいた。さらに委員からは「巨人の肩に立ったから万有引力を発見できた」というニュートンのことばを教えていただいた。巨人、つまり先人たちの研究の積み重ねのうえに

自分の発見があるという意味の偉人の発言だ。「科学技術においてオリジナリティーを尊重することの重要性をきちんと踏まえ、今後の取材、番組制作に臨んでほしい」と激励もいただいた。

1月15日(金)にNHK内で放送倫理委員会を開催し、今回の「超絶 凄(すご)ワザ!」の放送を取り上げた。取材の経緯や放送内容について事実を周知したうえで、委員から指摘された科学技術の分野でのオリジナリティーを尊重する取材、番組制作のあり方を全放送局に徹底した。ディレクターや記者が番組を作るうえで基本にしている放送ガイドラインの中に科学技術の項目があり、今後はそこに科学技術分野でのオリジナリティー尊重に関しての内容を組み込むことにしている。委員からの指摘はごもっともなところがあり、改善していきたい。

- 適切な調査と判断だと思う。一方で、ほかの科学技術に関する番組ではかなり丁寧ないろいろなことを調べていると思うが、「超絶 凄(すご)ワザ!」は“ワザ”を取り上げる番組にしては、今回はずいぶん科学的なテーマだったと思う。番組の性格と制作する人たちの間にずれがあったとも感じる。
- 委員の指摘に早急に適切な対応を取ったことは評価したい。
- 「超絶 凄(すご)ワザ!」について、ついこの間「クローズアップ現代」であれだけの問題があったにもかかわらず、丁寧さを欠いた番組を作ってしまったことは、本当に反省しているのかと思った。速やかに調査し説明してはもらったが、番組を作るには、それなりのことを考えてほしい。「クローズアップ現代」問題が大きな基本となっており、その報告書からはみ出さないような番組作りをお願いしたい。
- 「超絶 凄(すご)ワザ!」の問題に関して。「クローズアップ現代」問題はNHKの職員が事実を知っていたにもかかわらず、事実と違う報道をしたということが問題だが、「超絶 凄(すご)ワザ!」はNHKに悪意があったわけではないと思う。調査が不十分だったことはあるだろうが、「クローズアップ現代」問題とは異質ではないかと思う。
- 全く異質の問題だが、番組作りにおいて、きちんと調査を行うことの大切さを「ク

ローズアップ現代」問題から学んだはずだ。後になって経緯を説明されても、たまたまここにいる私たちが知るだけの話であり、一般の視聴者には分からない。そういったことを心に留めておいていただきたい。

(NHK側)

「超絶 凄(すご)ワザ!」については、科学技術で「独自」や「独自のアイデア」ということばづかいをする際の厳密さに欠けていた。通常の間では、職人たちのワザの競い合いがテーマで、そういうことに踏み込むことはないが、今回のようにアイデアや科学技術に踏み込んだ場合は、これまで以上にしっかり調べたうえで放送する。名古屋局だけではなく、番組を作る現場に知らせ、脇を締めたい。

- 「超絶 凄(すご)ワザ!」問題に早く対応したことはよいと思うが、なぜそうなったのか、それを受けた改善策がない。おそらく同じ番組を科学・環境番組部が制作していれば違う番組になっていたのではないかという気がする。先例がないかをなぜ確認しなかったのか、なぜきちんと研究の成果やアイデアについて紹介しなかったのか、という原因や理由が分析されていないため、ほかの委員のようにもやもやした感覚が残ってしまうのではないか。その点をよく分析したうえで改善策を立てないと、単にガイドラインにオリジナリティー尊重の内容を組み込んだだけでは、実際の改善にはならないのではないかと思う。その点は前向きに検討していただければと思う。

(NHK側)

検討したい。科学番組の制作経験者が制作していたにもかかわらず、このようなことになってしまった。

- 「超絶 凄(すご)ワザ!」のような番組で科学技術を取り上げてほしいという希望を持っている。分野をクロスする番組を制作することこそがNHKの役目だと思う。一見バラエティー番組に見えても、その奥に科学技術のおもしろさが隠れているような番組だ。この件で番組スタッフがやる気をなくすようなことにならないようにしてもらいたい。

(NHK側)

制作現場では、またチャレンジすると言っている。その際は十分に気をつけたい。

- 1月9日(土)のNHKスペシャル シリーズ激動の世界 第1回「テロと難民～EU共同体の分断～」(総合 後9:10～9:59)、1月10日(日)の第2回「大国復活の野望～ロシア・プーチンの賭け～」(総合 後9:15～10:04)、1月16日(土)の第3回「揺れる“超大国”～アメリカはどこへ～」は、大変興味深く視聴し、NHKの取材力と分析力について大いに感心した。第1回「テロと難民～EU共同体の分断～」では、大規模な難民を受け入れた域内で高まるナショナリズムをどう考えるのかについてだったが、難民を受け入れるべきではないと主張するグループに対して、「その考え方は間違っている」とはっきり自分の意見を言った若い夫婦を見て、日本との違いにすごいと思ったと同時に、日本ではどうなのかと感じた。今回のシリーズでは、ヨーロッパ、ロシア、アメリカでの課題を取り上げていたが、3つのテーマとも日本と私たちの生活に関係のあることだ。3回シリーズで終わるのではなく、4回目として日本を分析する番組を制作してほしい。
- NHKスペシャル シリーズ激動の世界 第3回「揺れる“超大国”～アメリカはどこへ～」は、当時なぜシリアが化学兵器を使ったことを分かっていながらアメリカがシリアを攻撃しなかったのか、私がかねてから思っていた疑問に答えてくれた。また、アメリカの苦悩や、テロを防ぐために、民主主義の価値を世界に広めるための新しい取り組みについての話も紹介されて見応えがあった。大越健介キャスターは「ニュースウオッチ9」を担当したあと、しっかりと国際ジャーナリストとしての地位を固めつつある。世界を回って日本の立場を守りつつ論評できる大型解説者になっていくのかという印象を持った。
- 1月17日(日)のNHKスペシャル「震度7 何が生死を分けたのか～埋もれたデータ 21年目の真実～」は、NHKにしかできないもので、6,000人以上の生死についてのデータを再分析していた。通電した場所から火災が起きたことは過去に言われていたのかもしれないが、因果関係論は今後の防災にとっても重要なデータだった。こういった重要なデータは、防災に生かせる形で展開してほしい。
- NHKスペシャル「震度7 何が生死を分けたのか～埋もれたデータ 21年目の真実～」はNHKでなければできない分析をしていた。通電による火災だけではなく、交通渋滞の問題も指摘していた。こういった分析結果が今後の対策に生かされれば意義深いことだと思う。すばらしい番組だった。
- 12月25日(金)の「となりのシムラ#3」(総合 後10:00～10:43)は、放送を大変楽しみにしていた。どこにでもありそうな日常の中高年男性を志村けんさんが

ナチュラルに演じていた。まるで友人から「うちのお父さんがね」と話を聞いているような感覚で親近感があった。大笑いするよりもクスッと笑える内容で、家族で何回も見ている。「大川家の人々」というコントにあった「写真」というエピソードでは、母親が娘に撮らせた父親の写真を、父親が知らないところで実は遺影に使用おうとしていたという毒のあるものだったが、父親のピュアな優しい心も感じる内容で、おもしろく、心がホッとする。

- 「となりのシムラ#3」、12月24日(木)、25日(金)の「フルタ家の不思議なテレビ」(総合 後10:55~11:20)、12月29日(火)の「LIFE! 2015 超豪華ゲストSP」(総合 後10:15~10:59)は、年末のざわざわした空気の中で、気軽に見られておもしろかった。「NHKスペシャル シリーズ激動の世界」のようにじっくり考えるのではなく、その場で笑える楽しい番組だった。
- 「クローズアップ現代」は毎回よいと思うが、1月13日(水)の「小さな島の大きな決断~地方創生の現場から~」は、新潟県粟島浦村で地方創生をどう立ち上げるか、具体的にある女性を中心に生き生きと描いており、単なる解説番組ではなくよかった。
- 「クローズアップ現代」は再放送をよく視聴していた。今回、ほかのニュース番組も主要な方が交代するというので、「クローズアップ現代+ (プラス)」では誰がキャスターとなるのかは知らないが、ある意味ではチャンスだと思う。
- これから18歳が選挙権を持つようになり、彼らが社会問題等を考える時間も欲しいと思う。「視点・論点」は総合テレビの朝4時台と昼間にEテレで再放送があるので視聴したい人は再放送で見ることが可能だ。「時論公論」も中身のある番組だと常々思っているが、深夜0時からの放送だ。昼間の時間帯に再放送はあるのか。もしも再放送がなければ検討していただければと思う。

(NHK側)

「視点・論点」はある程度普遍的なテーマについて専門家が解説する番組だが、「時論公論」は毎日のニュースなど時事問題を取り上げていることもあり、再放送は設けていない。内容をまとめたものをインターネットで見えていただくサービスは行っている。「NHKニュース7」なども再放送はしておらず、時事問題を扱う番組の再放送はなかなか難しいのが実情だ。放送を補完する意味で、インターネットを使ったサー

ビスがさらに積極的に進み、例えば「時論公論」を見逃したとき、あるいはもっと早く見たいときにもインターネットで早く見ることができるようなサービスも今後可能になるときも来ると思う。検討課題として受け止めさせていただきたい。

- 私はNHKのマニアックにおもしろい番組が大好きだ。幅広い方に興味を持ってもらうために薄く広くなってしまうことをお願いしたい。「名曲アルバム＋（プラス）」を偶然見たが、「名曲アルバム」はきれいな景色とともに、曲の成り立ちを説明する番組で大変よいが、「名曲アルバム＋（プラス）」も大変おもしろかった。1月11日(月)の名曲アルバム＋（プラス）「『運命交響曲』ベートーベン作曲」（総合 前 9:50～9:55）では、ベートーベンの「運命交響曲」のモチーフをグラフィックでひたすら見せており、そのグラフィックを見ると「運命交響曲」がどのように構成されているのかが感覚的に分かる。短いがとても深く、「なにこれは？ おもしろい！」と思わせる番組だった。若い世代の視聴率の話があったが、若い世代は「なにこれは」というものが見たいと思うし、そういう部分をこれからも深めてほしい。

（NHK側）

「名曲アルバム＋（プラス）」は大変参考になるご意見を頂いた。若い世代に関心を持ってもらえるような手法をいろいろ考えたい。

- 12月23日(水)の「考えるカラス～科学の考え方～」は、大変おもしろかった。子ども向けの理科の実験番組で、実験自体もおもしろかったが、なぜそういう実験結果が出るのかについて「ここから先は自分で考えよう」と言って答えを教えない演出になっていた。今の子ども向けの教材は微に入り細にわたりで教えすぎると常々思っていたが、こういう番組作りがあるのかと非常におもしろかった。あの答えはいつかどこかで教えてくれるものなのかということが気になったが、とてもすばらしい番組だった。
- 「SWITCHインタビュー 達人達（たち）」はいつも注目している。1月9日(土)の「日野原重明×篠田桃紅～オーバー100歳 驚異の力～」は、104歳の日野原さんと103歳の篠田さんの組み合わせで、参考になる、生きたことばを紡いで話すことができる人選で、いくつかのことばが心に残った。
- 1月16日(土)の戦後史証言プロジェクト 日本人は何をめざしてきたのか

未来への選択 第6回「障害者福祉～共に暮らせる社会を求めて～」(Eテレ 後11:00～17日(日)前0:30)は、障害者福祉の歴史はどう展開するのかわかったが、歴史的な流れを分かりやすく追いかけて、生き生きとした素材、登場人物を使い、ある意味でエンターテインメントとしても十分に通用する骨太な企画だった。ぜひ学校などでも見てもらいたい番組だった。

- 「スーパープレゼンテーション」は、世界にはすごい人がいると毎回思われる。内容についていけないこともあるが、触発されている。世界の最先端がどこにあるのかわかる、よい企画だと思う。
- 「ニュース シブ5時」のアナウンサーの不祥事があった。アナウンサーが不祥事を起こすと、見ているほうに不信感が生まれる。人選でどう対応できるのかもじっくり考えていただきたいと思う。

(NHK側)

何年か前に別のアナウンサーが不祥事を起こした。特にアナウンサーはNHKの顔として放送番組を提供しており、その不祥事はNHKにとってもダメージが大きい。以前に不祥事があったにもかかわらず、また大きな不祥事を起こしたことについて、アナウンス室にも徹底した対策をとるように求めている。以前の問題からいろいろな対策を取っていたが、その対策に実効性があまりなかったのではないかと、強い反省の念にとらわれている。NHKにとって難しい、重い課題を突きつけられていると思う。NHKの組織に起因する構造的な問題もありはしないかと、いろいろ議論しているところだ。

- 人選もあるとは思いますが、職員のインテグリティや倫理観の問題もあると思う。多くの職員がおり、全員の規律は分からないだろうが、組織風土の問題として考えたほうがよいのではないかと。
- 東京オリンピック・パラリンピックに向け、スポーツ番組の強化の話があったが、オリンピック・パラリンピックはスポーツと文化の祭典とうたわれている。これから国内で20万もの文化プロジェクトを政府が行っていくなかで、文化の部分にももっと力を入れ、取り上げてほしい。

(NHK側)

オリンピック・パラリンピックは文化の祭典でもあり、NHKも2020年に合わせたさまざまな文化活動を行っていく。組織委員会が行う公式な活動も含め、積極的に取り上げていきたい。

- 地方のことを多く取り上げることはすばらしいことだ。私は地方をよく訪れるが、朝テレビをつけ、ニュースを見ると全国のニュースから地方のニュースに切り替わる。同時にニューススタジオのセットの雰囲気、照明の雰囲気もガラッと変わる。そのためだと思うが、時折、地方局のアナウンサーがとても疲れて見えることがある。例えば照明をもう少し明るくすればクオリティーが保てるのではないかと常々思う。

(NHK側)

早速取り組みたい。照明を少し変える、スタジオの色合いを少し変えるだけでも雰囲気はずいぶん違う。「あさイチ」を開始するとき、照明をかなり明るくしてもらったことがある。民放と比べると暗く、灰色っぽいNHKのイメージがなくなるように努めたい。

地方のニュースのセットは東京に比べると見劣りするところがあるのも確かだが、予算も限られているため思うに任せないところもある。すべてを同じようにというわけにはいかないが、努力していきたい。

- 安倍首相が裏千家、表千家の初釜に出席するというニュースがあった。昔から時の首相のそういった行事についてニュースとして取り上げているが、本当に必要なのかと感じる。そういうニーズもあるのかもしれないが、ほかに伝えるべき必要なニュースがあると感じた。
- 来年度の番組編成について大幅に変更したことで、成果を出し、多くの方にNHKの番組を親しく見てもらい、評価してもらえれば幸いだ。

NHK編成局  
番組審議会事務局

## 平成27年12月NHK中央放送番組審議会

12月のNHK中央放送番組審議会は、21日(月)、NHK放送センターにおいて、13人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「クローズアップ現代」に関するBPO勧告について説明があり、議事に入った。「平成28年度国内放送番組編集の基本計画(案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、中央放送番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。

続いて、フランケンシュタインの誘惑 科学史 闇の事件簿「放射能 マリーが愛した光線」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、1月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

### (出席委員)

- |      |  |
|------|--|
| 委員長  | 北城恪太郎 (日本アイ・ビー・エム(株)相談役)                           |
| 副委員長 | 小林いずみ (前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官)                      |
| 委員   | 秋池 玲子 (ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター) |
|      | 大野 博人 (朝日新聞社役員待遇論説主幹)                              |
|      | 大日向雅美 (恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授)                         |
|      | 鎌田 實 (諏訪中央病院名誉院長)                                  |
|      | 倉重 篤郎 (毎日新聞社論説室専門編集委員)                             |
|      | 佐野真理子 (主婦連合会参与)                                    |
|      | 龍井 葉二 (連合総合生活開発研究所客員研究員)                           |
|      | 永田 紗戀 (書家/花咲く書道 Studio Saren. Nagata 主宰)           |
|      | 比嘉 政浩 (全国農業協同組合中央会専務理事)                            |
|      | 増田 雅己 (読売新聞東京本社取締役論説委員長)                           |
|      | 和田 章 (東京工業大学名誉教授)                                  |

### (主な発言)

<平成28年度国内放送番組編集の基本計画(案)について～諮問～>

- メリハリもあり、よくできていると思う。「編集の重点事項」の1に災害報道を持ってきたことは、視聴者に対しNHKの決意を物語るものとしても、優先順位としてもよいと思う。特に「原発事故後の対策」を入れたことを高く評価したい。番組審議会での意見が反映されたこと自体が、NHKの報道方針にとってそれなりの意味を持つことを期待したい。これは民放各社があまり対処できない分野だと思う。これまでも充実した放送をしてきているが、今後もこれまでに負けない報道をしていくことを望む。
  
- 今こそNHKで骨太な農業政策に関する番組作りをお願いしたい。TPP(環太平洋パートナーシップ協定)は、日本の農業に対する影響が大きい。TPPがなくても日本の農業は世代交代期であり、大きく変わらざるを得ないと思う。新しい農業政策ができないといけないタイミングだが、日本では農業政策をめぐる議論が多少不幸な状況にあり、両極端な議論が出ることもある。少し考えれば絶対に違うことが情報発信力のある方からも出て、議論が混乱することがあり、大変残念だ。NHKは常識というか、土俵を作る力を持っており本当に素晴らしいと思う。介護や認知症の問題、災害の問題など、NHKが本気で取り組むと、骨太な番組やそれ以外のエンターテインメント性のある番組でも、多くの人が常識を一段上げられる。土俵の中でいろいろな意見があったとしても一定の土俵を作るだけの力がある。その力を農業政策の分野で発揮するタイミングだと思う。
  
- 「平成28年度国内放送番組編集の基本計画(案)」について、各委員の意見を反映した内容になっているということで原案を可とし、答申したい。異議はないか。
  
- 異議なし。
  
- 原案を可とし、答申する。

また、総合テレビの放送番組の部門別編成比率で、報道番組「20%以上」としていたところを「35%以上」と大幅に増やしたことは多としたい。実態は例年50%程度であるのになぜ「35%以上」なのか、40%でも十分に自由度はあると思う。今後は推移を見て、実態として50%前後ならば「35%以上」はまだ控えめだと思う。今後の検討課題にしてほしい。

(NHK側)

ありがとうございました。中央放送番組審議会の答申をいただいたので、来月の経営委員会に「平成28年度国内放送番組編集の基本計画(案)」を提出させていただく。経営委員

会の議決を経た後に、来年度の具体的な番組編成を決定し、番組時刻表を含めた編成計画を次回、1月の審議会で報告させていただきます。

<フランケンシュタインの誘惑 科学史 闇の事件簿「放射能 マリーが愛した光線」  
(BSプレミアム 11月26日(木)放送)について>

- 楽しく視聴した。小さいころから科学とは縁があまりなく、興味もなく、全く別の世界で生きてきた。そんな私でも再現ドラマの部分とゲストである科学者から見た意見から、事実だけではなく科学者の心情までもが大変分かりやすく伝わった。ラジウムでやけどを負い喜ぶ気持ちは私には到底理解ができなかったが、ゲストから「なぜか」という知的欲求によるものであり、科学者にはそういう心理があると説明され、納得できた。「パンドラの箱も開けたい」とゲストの科学者が言ったコメントも心に残った。マリー・キュリーにとって科学は神聖なもので、放射能は子どもであったわけだが、その気持ちは理解できた。しかし、その事実と現実起きた被害を思うと、人間のはかなさ、愚かさなどいろいろな感情も同時に覚えた。現代で起きている状況と重ね、いろいろなことを考えるよい機会になる番組だった。
- 番組のタイトル「闇の事件簿」の事件とは4月19日のことだと思う。番組を紹介する文章で「(マリーの)科学への愛は次第にゆがんでいく」ということばを使っているが、制作側が言っている「ゆがみ」とは何を称していたのか。

(NHK側)

純粋な科学への愛はすばらしいものだが、自分の部下や研究所の研究員に被害が出ているにもかかわらず、マリーはラジウムの研究を優先した。自分の健康被害も含め、研究を続けたければほかの道があったのではないかという考えから、「愛がゆがんでいった」と表現した。

- ラジウム時計の労働災害はいちばんショッキングな場面だった。番組を通して見ると4月19日でマリーが変わったのかがよく分からなかった。つまり、夫が生きていたころから研究にのめり込んでおり、夫が亡くなった4月19日が転機となって社会性が薄れていったという解説に疑問を持った。パートナーの存在の有無に関係なく、社会性を失っていった可能性もありうる。そういう意味で「事件簿」とい

う場合のドラマのポイントが分かりにくかった。最初からすでに闇をはらんでいたわけであり、番組の構成がそうであるように最後は広島、長崎、福島とつながっている意味で大きな流れはそのとおりだと思うが、4月19日に焦点を当て、マリーの何が変わったのかだ。ある種、依存症的にのめり込んだ面もある。キーワードの捉え方は多様にあってもよかったという印象を持った。

(NHK側)

番組でも紹介しているが、夫のピエールは研究にのめりこむマリーと社会との間のバランスを取っていたパートナーだった。その夫が死ななかったらという気持ちも含めての仮説だ。

- マリーの若い頃もそうだが、よいことを行っていると思い、実は悪いことだったということがたくさんあることを忘れないでほしい。人間はよくないことをたくさん作っておき、それを放っておく。ノーベルが発明したダイナマイトが元で戦争はどんどん起きている。フランスのテロの乱射事件の銃器も過激派組織 I S = イスラミックステートが作ったわけではない。危険なものを作っては怖いと言っているが、危険なものを作ることをやめようと言ったほうがよいのではないか。

(NHK側)

これまで3本番組を制作しているが、科学者の興味、知的欲求としては純粋なものだったにもかかわらず、そこで発見したものを次の世代がどう使ったか、お金を出す人、政府がどう使ったかでゆがむ場合がある。私たちに出来ることは事実を知っておいてくださいというばかりだが、そういう危機感を委員の皆さんが持っているということは大変勉強になった。

- 科学者の思いでないところに発見や技術が使われることがあることに焦点を当てるのがよいと思う。
- おもしろかったし、これからも番組が続くのであれば期待したい。科学が持っている裏側のリスクを「フランケンシュタインの誘惑」ということばで一般の人にも分かりやすく見せることは大変大事なことだ。キュリー夫人については、みんな子どものころに伝記を読んでおり、立派な人であり命懸けで世界をよくしてきたことは分かっている。そのキュリー夫人が壁にぶつかり、多くの健康被害を出したこと

によって、今の世界がどうなったのかがもう少し分かりやすく紹介されていればよかったと思う。現代の病院ではレントゲン技師や医師たちがフィルムバッチを着けて1年間の放射線量を測っている。微量でも放射線を浴びることがよくないことを、キュリー夫人がラジウムと格闘したことから分かり、人類が克服してきた結果だ。そして福島の高線量被ばくの問題にもつながっている。マリーの娘夫婦や同僚にも健康被害が起きたことが少し触れられていたが、実際にどう大変な健康被害だったのかが分かれると「フランケンシュタインの誘惑」というタイトルに合うのではないかと思った。大変よい番組で、番組を通し、科学の持つリスクも分かった。4作目に期待したい。

#### (NHK側)

この番組を制作することになったときに「ラジウム温泉に入っても大丈夫なのか」と言う方がいた。そういった現在にも影響力のある事柄をどう番組の中に入れるのかは、制作過程で頭をだいぶ悩ませたところだ。ラジウムへの耐性が人によってかなり違い、キュリー夫人はそのような環境であったにもかかわらず64歳まで生き、耐性がかなり強い方だったと思う。キュリー夫人は再生不良性貧血で亡くなったが、娘夫婦は白血病で亡くなった。同じ環境にいても発病しなかった方もおり、そういったことを詳しく説明するよりは、全体の流れの中で説明した。今後どのようにそういった要素を入れたらよいのかは考えたい。

- 「闇の事件簿」として分かりやすくするにはどうすればよいのか。「長崎の鐘」を書いた永井隆博士は放射線科医で、人を助けようと格闘する中で放射線を浴び、慢性骨髄性白血病になったが、すべてを投げだし、被ばく者を助けていった。そういった話が伝わると、キュリー夫人と同じように、これからは誰も病気にははいけないということが番組でうまく伝わると思った。
- 偉人伝として改めて番組が構成されており、興味深く視聴した。マリーは原子が壊れることを発見し、原子が不変だという認識を180度変える見方をした。その思想を立証するためさまざまな金属からラジウムを発見するという鬼気迫る努力があり、初めてマリーの科学が成立した。その2つの大きなポイントがよく描かれていたと思う。その2つは発見の過程として大切な部分だと思うが、もう少し突っ込んだ表現をしてほしかった。ニュートンのリンゴが落ちることから万有引力を引き出したことと、マリーの原子が光ることから原子が変化していることを見いだし

たことは、物理学者の思想的な過程として比較的似ている。そういった思想こそ大きな発見に結びつくもので、その辺の説明がもっとあれば偉大な発見と雰囲気伝わったと思う。人類の発展に影響を与える部分と、結果的に人類をおとしめてしまう部分との科学の両義性について、「フランケンシュタインの誘惑」というタイトルで引き付けるのはよい試みだと思ふし、これからも続けてほしい。マリーが核時代の扉を開いたという映像があったが、効果的だったと思う。マリーの発見がすぐに広島に結び付くわけではないが、全く新しい世界をつくり出す大本を作った意味では、あの評価でよいと思う。画期的で、普通の人では出来ないことを発見したこと、そのことが人類の生存にとって大きな意味を持つという意味で、マリーは極めつきの対象だったと思う。これまでの3本の番組を超える極め付き素材を見つけ出すことは困難ではないだろうかと思ふが、今後はどんな計画なのか。「フランケンシュタイン」には怪奇ホラー映画的なイメージがあり、引きつけはよいと思ふが、番組の本質とうまくフィットしているのか若干の疑問がある。科学の発達でマイナスの面がないものは本当にあるのかどうなのか、そういうことも絡めれば長寿番組になる気がする。

- 最後まで楽しく視聴した。番組でも伝えているが、ラジウム発見は当時ポジティブなものとして社会に広まり、化粧品、コーヒーマーカー、産着などありとあらゆるものに使われた。当時大量に生産されたため、祖父や祖母が買った変なものとして家の中に放置されたまま、放射線を出し続けているものがそこら中にあり、フランスの放射性廃棄物管理庁などではそのころに生産されたものをいまだに探し続けている。今の時代もラジウム騒ぎは続いており、そういうところに問題を持っていてもよかったのかと思ふ。科学の場合の光と影はマリーだけに限らないが、単に科学者個人の話ではなく、そのときの社会や時代背景が大きく影響していると思ふ。マリーの時代も狂乱の1920年代といわれる大量消費社会がヨーロッパで登場する頃で、科学的発見の目新しさと、節度のない商業主義が結び付き、とんでもないことが起きてしまったのだと思ふ。ドラマ仕立てにすると分かりやすいためヒューマンストーリーとして組み立てたと思ふが、実際はもっと複雑で、マリー自身が危険性に敏感だったかということ以上に、圧倒的な消費社会の登場が背景にあったと思ふ。マリーの個人的な思い、夫を亡くしたこと、科学的発見への大変な執念などもあったと思ふが、もう少し広がりを持たせると、よりわれわれ自身につながる話として感じられたと思ふ。おもしろい番組であり、今後はそういうところも加味してくれればと思ふ。
- 学校で習ったり伝記で読んだキュリー夫人と全く異なった実情が示され、興味深く視聴した。科学への信奉が科学者としてのキュリー夫人と母としてのキュリー夫

人を分断し、危険と意識しながらもラジウムの青白い光を私の子どもたちと言っていたのが大変印象的であり、衝撃的でもあった。キュリー夫人が陥った「フランケンシュタインの誘惑」は現在の原子力開発にもいまだに通じているのではないか。それは原子力だけではなく、公害問題や現在の身の回りにあるいろいろな化学物質の開発全般に共通しているのではないかと感じた。現在の科学技術分野の中にある、暴走しやすい生産優先の科学に対し、監視、抑制する安全性の科学という分野、仕組みが出来ているのか。あるとすればどういう内容なのか、現在の社会とどうつながっているのかをもう少し見せてもらえると もっと幅が広がる。あの当時の話だけではなく、現実とつながっていることがさらに分かりやすくなり、科学に興味を持てるのではないか。

- 大変すばらしい番組で、吸い込まれるように視聴した。知らなかった一面、まさにパンドラの箱を開けたと思う。ないものねだりかもしれないが、1点気になったところがある。人類にとって偉大な業績を上げた人は、男女の差を超え、ある部分で狂気があると思う。その狂気を時代がいかに許してしまったのか、あるいは助長したのかという視点があればよかったと思う。時代の背景が紹介されず、むしろ「母」というところに焦点が当たりすぎていたのではないか。本当かどうか分からないが、同じノーベル賞を受賞した湯川秀樹さんは、第二次世界大戦があったことも知らなかったほどに研究に没頭したという話を聞いたことがある。男性であればそこまで没頭することが狂気と言われずに、偉業という面だけでたたえられる。マリーが母だったことで、2人の子どもは母がいなくて寂しいのは分かるが、そこにあまりにもフォーカスしすぎたことで、マリーの狂気がクローズアップされすぎたところがあるのではないか。1人の科学者として、偉大なるパートナーを失った悲しみがマリーを研究に異常なまでに駆り立てたところはあると思う。それが科学への愛だったと考え、時代が利用した面があったとしたら、母だけの面が強調されたことに、少ししこりのようなものを感じた。全体的にはすばらしい番組だったと思う。
- 大変興味深く視聴した。子どもの頃に読んだ伝記には書かれていないような話をいろいろ知ることもできた。番組の趣旨として、科学の持つ光と闇の両面を提示したいというねらいがよく分かった。番組の冒頭で「マリーにどんな闇があったのでしょうか」とコメントされ、要するにマリーが主役となるわけだが、そのマリーに放射能、原子力、原発まで含めた二面性を体現させる作り方は限界があったのかとも思う。マリーが放射能や放射線の危険性について、もっと明確に意思を表示すべきだったのではないかという見方もあるだろうが、それだけではないさまざまな事情によって放射線の被害が広がった。ラジウムガールの被害拡大の際、マリーは

なるべくラジウムから遠くへ離れなさいと言っている。マリーが被害者の声や懸念の声を圧殺するようなことをもしも行ったとしたら取り上げるべきだが、それが無いとすれば、マリーのことだけで科学者の社会的責任まで話を広げるのは難しいところがあったのではないか。さらに原爆、原発になると後世の科学者の社会的責任が問われるだろう。番組のねらい、趣旨には賛同できるが、1人の人間にスポットを当てその全部を表す方法は、これから番組を継続する際にどうこなしていくのかと気になった。

(NHK側)

最初の2本については、人物の歴史ではなく、ある事件、出来事に焦点を当てることにより意識して制作した。マリーは知名度も高いことから、人物伝に寄ってしまったというのは反省点だ。全体を通して、マリーの発見からつながってきた原子力と人間の関わりも描きたかったが、なるべくマリーがすべて悪いと言っているわけではないように配慮したつもりだ。事件自体に焦点をあて、何がそれを生み出したのか、それが今日の私たちにどう関係あるのかを中心に置くことは今後も大事にしたい。

- 未知のことが多くあり、興味深く視聴した。ピエールが生活を少し楽にするために特許を取得しようとしたが、マリーは皆で活用しようとして反対した。そこがきっかけとなりいろいろな人が利用できるようになったことがその後につながっていったかもしれず、そこを深く掘り下げてよかったのかと思う。マリーがドアを開く場面があったが、マリーだけがモラルが低かったわけではないと感じた。先端的な分野で研究者が1人か2人ということは恐らくなく、大勢の研究者がいる中でマリーとピエールがトップランナーだったのだと思う。遅かれ早かれ誰かが発見したと思うが、それをマリー1人がドアを開けた形にすることが、もやもやする気持ちにつながった気がする。なぜマリーがいち早く発見したのかということは明るい面になるのかもしれないが、掘り下げてよかったのかもしれない。そこが整理されれば知る喜びだけではなく、学んで自分たちの生活、自分の人生を考えるとところにつながった気がする。

(NHK側)

時間の制約があるため番組では出し切れなかったが、マリーの研究室はラジウムを素手で触ってでも、とにかく早く研究を進めようとしていた。同じ研究室では危ないからとい

うことでラジウムを鉛の箱に入れ、そこから離れるように研究していた人たちもいる。マリーの研究室は特にその辺の感度が甘かった前提を知ったうえで番組を制作した。それに先駆けたX線の研究も含め、放射線障害についてはだいぶ研究が進みつつあったと思う。マリーがなぜ8トンの中から0.1グラムのラジウムを発見することにたどりついたのかは、根気よく行ったこととマリーにしかないひらめきがあったということかと思う。納得のいく説明が難しく簡略化されたところもあるかと思う。これまで制作した3本の番組ともに、天才的な科学者がなぜ何かを成し遂げたのかというのは最も難しいところで、「天才だから」となってしまう。それをかみ砕くのは大変難しい。今後番組を続けられるとしたら、そこは大きな課題だと思う。

- 興味深く視聴した。マリーがドアを開いたということだが、マリーは負の部分に無頓着ではあったが、ラジウムを負の目的で使ったわけではないと思う。マリーがドアを開けたという表現には少し違和感があった。マリーが負の部分にフォーカスしていればもっとうまくコントロールする仕組みができたかもしれない。マリーがあえてドアを開けたことではないという感想を持った。その辺りは、もう少し考えてもらえればもっとよかったと思う。

(NHK側)

原子が変化することに気づけたのはマリーだったからだ。  
のちの原子力、原爆もマリーとは関係ないと言ってよいぐらいだが、その説明は不十分だったと反省している。

- 大変興味深い番組だと思った。しかし、番組のタイトルについては、視聴者に見てもらえるものなのか疑問だ。「フランケンシュタイン」と出さなくても「科学史の光と闇」でもよい気がした。ラジウムを発見したことよりも、原子核が変化することを発見したことに価値があったと思うが、科学を知らない人にはその価値がどれぐらいなのか、よく分からなかったのではないか。ノーベル賞の受賞理由もそこだと思う。その辺について、もう少し分かりやすく説明してもらえればよかったと思う。原子核が変化することが、のちにどう原子爆弾に結びつくのか。ネズミの近くにラジウムを置くと死ぬと実験で分かっているようなものを、なぜ美容クリームに入れるとよいと考えたのか。健康によいという発想になったのか、飛躍しすぎていてよく分からなかった。科学者はパンドラの箱を開けたい、それで問題が起きる

としても知の探究をしたいというゲストの発言はよかったと思う。科学者がそういう思いで研究をしているところもある。しかし、科学者が、研究した結果が社会に問題を起こすことを理解していたのか。科学者にとっては単なる知の探究だったが、他人がその成果を利用することで問題になったのかもしれない。「科学の光と闇」というときに研究者の光と闇なのか、成果を利用する人に光と闇があるのかがよく分からなかった。大変おもしろい番組であり、これからも続けて行ってほしい。視聴率はどれくらいだったのか。

(NHK側)

BSプレミアムなので地上波よりは数字が低いですが、1本目が0.5%、2本目が0.8%、今回の番組は1.2%だった。

- この内容ならばもっと多くの人に見てもらったほうがよいと思う。番組を制作している側はシリーズのつもりでも、数か月に1本しか放送されないものを視聴者はシリーズだとは思わない。よい番組であり、もっと多くの人に見てもらえるように、タイトルなども考えて行ってほしい。

(NHK側)

これからも番組を続けたいという意欲だけはあるので、皆さんの意見を十分に生かしていきたい。大勢の方からホームページを通じてメールを頂いた。30代、40代の女性が多く視聴してくれたという手応えがある。どうもありがとうございました。

<放送番組一般について>

- 12月12日(土)と19日(土)の超絶 凄(すご)ワザ!「地震に打ち勝て!究極の“揺れない住宅”対決」では、2つの制震に関する技術が紹介されていた。真ん中にエレベーターの入ったシャフトをつくり、いちばん上に仕組みを置き、ビルをぶら下げるという技術は、ある建築家や建設会社などが開発したもので、15年ほど前に論文も執筆されているが、番組の出演者はこの技術に関わりがない。番組で紹介されたこの技術を使ったビルを揺る映像は当時の実験のものだが、実際の開発者には何の連絡もなく使用されており、あたかも出演者が開発したかのように番組で紹介されており大変な問題だ。一方の、緩やかな斜面をつくり、その上で振り

子の原理で免震を行う技術も、ずいぶん前に商品化されているものだ。科学の世界でオリジナリティー、先駆性は大変重要なことなのに、番組で紹介していた技術はそのオリジナリティーを無視したものだ。今回の番組でNHKは大きな失態をしたと思う。科学番組をおもしろおかしくすることで視聴率を取りたいと考えるから起きることだ。もっと真剣に取り組んでほしい。人のまねをすることがいかに簡単か、音楽でも、小説でも同じことだ。仕組みをまねするぐらいは許されるかもしれないが、まねならまねをしたと言うべきだ。

- NHKで、出演者の側にオリジナリティーがあったのかどうか別途検証をしても良かったほうがよいのではないか。
- 15年前に開発したものと同一技術であることは間違いなく、NHKの科学番組担当者がそんないいかげんな番組制作をされていてよいのかと聞きたい。

(NHK側)

いま答えられる範囲でお答えしたい。ビルをぶら下げるという技術について番組では「建築業界でも研究が進む近未来の建物。しかし技術的に難しく、いまだ一般の住宅で実現したことはない」とコメントしている。番組を制作した名古屋放送局に確認したところ、この免震技術を開発した建設会社には取材したが、研究開発にあたられた人には連絡していなかった。もう一方の坂になったレール上を振り子のように建物を移動させる免震技術は、美術品のショーケースで商品化されていることを出演者も制作担当者も把握していなかった。

- 知らなかったでは済まされず、知識のない担当者が科学の番組を制作してはいけないのではないか。

(NHK側)

作者がどういう経緯で取材を進め、今回の放送に至ったのか、さらに聞き取りを行って、報告したいと思う。取材が追い切れずに放送してしまったということで、大変申し訳ありません。

- 研究論文を執筆する際には、いちばん最後に関係する論文や引用文献を記し、そういう人たちに敬意を払って一歩進めるものだし、それが科学の礼儀だ。今回の番組制作のやり方は関係者を軽視しており、出演者2人で全部開発したというように

紹介することはやめてほしかった。

- 事実関係を確認し、委員が指摘したことが行われたのか、どういう検証をしたのか、よく調査し結果を報告してほしい。調べた結果に問題があれば、訂正をしてもらうなり、おわびをしたらよいと思う。
- 「国内放送番組編集の基本計画」の中に、科学番組でも、音楽でも、小説でも、番組の作り方でもよいが、オリジナリティーを大切にすると入れてほしいと思うぐらいに問題は大きい。第三者に放送内容の確認を取るなどをしてもらわないと危険性がある。
- 科学番組は監修する方によく確認したほうがよいと思う。リスクがあるのは確かなことだ。NHKには調査と報告をお願いする。
- 「超絶 凄（すご）ワザ！」の件は胸が痛む思いで聞いた。私も同じような思いをしたことがある。NHKはよい媒体で、信頼しているものだけに、委員の発言には、きちんとした対応をしてほしいと思う。

(NHK側)

委員が指摘された点はまだ事実関係が分からないため調べさせていただくが、NHKとして真実の追究は大きな役割だ。番組として具現化するうえで成果が上がるものもあれば、なかなかうまくいかないものもあるのが現実だろうと思う。そういう中でわれわれは自分たちの力の限りを尽くし、真実を追究すべきであり、ここにいる者も、職員もすべてがそのように考え、実行していると思う。誤りがあってはならないし、BPOから大変厳しい指摘も受けている。組織の問題、個人の問題、さまざまな要素が複雑に絡まりあった問題だが、そうしたことがないようにこれからも努力をしていく。

- 11月21日(土)のNHKスペシャル「東日本大震災「追跡 原発事故のゴミ」は、科学、技術、産業技術などの問題を社会的なコンテキストに置くとどういことが起きるのかという興味深い内容で、印象に残る場面が多かった。5年間原発事故のゴミを預かっていた農家が、やっとどこかにゴミが持っていかれることになってほっとしたというのではなく、「持っていかれる先の人のことを考えると心が痛む」とコメントしていた。栃木県の町長が「福島県で何とかしてほしい。不幸にな

る人の数をいちばん減らせる方法がよい」とコメントしていた。原発の問題は特にそうだが、解決は単に合理的に見いだせば済むという問題ではなく、社会が深く関わっており、困難な側面を持っていることがよく分かる番組だった。「NHKスペシャル」ではCGを多用し、大変巧みな作りで驚かされることも多いが、今回は作り自体が素朴であったものの、よく取材された内容で役に立ったと思う。あれから5年を間もなく迎えるが、大きな事故であるにもかかわらず、空間的、時間的な広がりや語り語られることが少なくなりがちだ。引き続き力を入れてほしい。

- 認知症と並んでNHKが最近熱心に取り上げているのが介護の問題だ。12月6日(日)のNHKスペシャル 調査報告 介護危機「急増“無届け介護ハウス”」は、大変よくまとめられている番組だった。良心的な無届け介護ハウスを運営している名古屋の事業者は、行政と規則の柔軟な運用を求める交渉もしているが、本当に善意から運営しているのだろうかとの疑問が湧いた。事業者の経歴や、どういうきっかけや思いで介護ハウスを始めたのかなどの紹介がなかったため、そう思うのかもしれない。よい番組だっただけに、欲を言えばその辺を伝えてほしかった。
- 12月20日(日)のNHKスペシャル 新・映像の世紀「第3集 時代は独裁者を求めた」(総合 後 9:00~10:13)を見た。同じ時間帯に民放で話題のドラマが放送されていたが、私の周囲では、「新・映像の世紀」に軍配の上がる声がたくさんあった。すばらしい番組だったと思う。
- NHKスペシャル 新・映像の世紀「第3集 時代は独裁者を求めた」はとてもよい番組だった。ヒトラーの歴史などはよく紹介されるが、映像でしかわからない訴えがあった。特に番組の最後で、解放された収容所と収容されていた人たちのやせ細った様子や、収容所の事実を認識するために見学に来たドイツ人が「こんなことが起きているとは知らなかった」と言うと、元収容者たちが「いいえ、あなたたちは知っていた」と言い返したというコメントが印象的だった。われわれは映像でしか分からない。できれば若い世代にも見てもらいたい番組だった。大変よかった。
- 11月23日(月)に「朝からサラメシ!スペシャル」(総合 前 8:15~9:00)を見た。サラリーマンが昼にどういふごはんを食べているかを追っていたが、たまたま勤労感謝の日で、いろいろな働き方をしている人たちがさまざまな愛情のあるお弁当を食べていることが紹介されよいと思った。
- 12月14日(月)の「NHK認知症キャンペーン わたしが伝えたいこと~認知症の人からのメッセージ」(総合 後 10:00~10:50、後 10:55~11:20)はとても印象

的だった。井ノ原快彦さんや作家の重松清さんなどが出て、認知症の方々と話す内容だったが、希望が持てる番組にまとまっていたと思う。人と社会に関わることがいかに大切か、家に閉じこもるのではなく外に出ることを強く訴えていた。つい数日前に認知症関係の事件があった。この番組で深刻な状況に置かれている方々が元気をもらえるのかは分からないが、そういうことも考え、さらに番組を続けてほしい。高齢化社会の中で私たちが認知症の方々をどう受け止めるかだと思う。今回の番組では若年性アルツハイマーの方が多かったが、若い世代ともっと高齢の方々ではいろいろと立場が違うし、番組の作り方も変わると思うが、一つのあり方として今回の番組はとてもよくまとまっていたと感じる。重松さんが今後、明るい認知症に関する本を執筆してくれるのではないかと、そしてそのドラマも制作できるのではないかと期待を膨らませている。ぜひ検討してほしい。

- 「NHK認知症キャンペーン わたしが伝えたいこと～認知症の人からのメッセージ」は、大変よい番組だったと思う。認知症の分野では次々と新しい研究成果が出ている。認知症を防ぐためにどうしたらよいのかは関心事であり、今後も継続して取り組んでほしい。
- 「NHK認知症キャンペーン わたしが伝えたいこと～認知症の人からのメッセージ」を見て、NHKならではの番組だと感じた。認知症の方々がわいわいがやがやと自由に話していて誘導されていない感じで、ユニークな作り方だった。ディレクターやプロデューサーたちがある方向を意識し話題を持っていくようなところに放送の限界があると思っているが、この番組は自由な感じで、出たところ勝負のような感じだった。この明るさが大変大事だと思った。重松さんは認知症のデイサービスで一緒にごはん作りをするなどしていたが、女性のゲストは必要だったのか疑問を持った。よい番組だったので、コメントを差し挟む感性を持っている人を選んだほうがよかったと思った。認知症キャンペーンは、ぜひ続けてほしい。
- 「クローズアップ現代」で12月9日(水)の「“移住1%戦略”は地方を救えるか」、11月11日(水)の「“座りすぎ”が病気を生む!？」は大変よい番組で「クローズアップ現代」ならではの内容だった。BPOの問題が出たときに私は「やらせに近いのではないかと」と厳しい意見を言った。「クローズアップ現代」がこの春から番組がなくなるのではないかとといううわさもあるが、こういう時期にやめてはいけないのではないかとと思う。よい番組は、反省することをきちんと反省し、こういう時期だからこそよい番組に生まれ変わっている姿を視聴者に見せることが大事だ。やめない方向で議論をしてほしい。

- 新しい可能性を感じたのが「週刊 ニュース深読み」だ。最初はニュース解説番組という位置づけで見ていたが、最近のマタニティーハラスメントの問題、介護の問題などでは、自然な対論の番組になっていた。視聴者からのいろいろな反応もリアルに示されている。問題提起は解説委員が行うが、議論自体を見ている限りシナリオはなく自然な形で発展しており、続編が期待される作りになっている。最初から「討論番組」と銘打ってしまうとあのような議論にはならないと思う。結論を無理に引き出すよりは、可能性があると感じた。12月5日(土)の「市民は何ができるのか? パリ同時テロから考える」では、「ホーム・グロウン・テロリスト」と呼ばれる人たちも含め、どういう人がテロリストになってしまうのか、そこには偏見の問題が背景にあるという大変大事な視点で議論をしていたが、一方でそういう人たちを利用している背後勢力があることも事実だ。1回の番組ではともかくとしても、一つのテーマを継続し、深読みを1回で終わらせない手法を考えてもらえたらと期待している。
  
- 子どもがまだ小さいので家ではほとんどEテレがついている状態だ。子どもに最近テレビで何がいちばん楽しいかと聞いてみたところ、「超能力ファミリー サンダーマン シーズン2」という海外ドラマが楽しいそうだ。1日に3回繰り返し見ることもあり、大変楽しそうに視聴している。子どもの友達も多くが視聴しており、結構人気があると思った。大人と一緒に見ても楽しめる番組なので、これからもこういった海外ドラマを放送してくれるとうれしい。
  
- 11月22日(日)の「岸恵子という生き方～女優として 作家として 母として～」(BSプレミアム 後0:00～0:59)は、岸さんが女優業に専念したことでフランスに置いてきた娘との間に確執があったものの、最後に和解することがドキュメンタリータッチでさりげなく描かれていてよかった。
  
- ラジオ番組に関して知人から聞いた話だが、消費税の軽減税率の適用が生鮮食品になるのか、加工食品もかともめていた際、自民党と公明党の話ばかりで、あたかも2党の宣伝をしているかのように聞こえたとのことだ。ほかの党の意見も紹介するなど、工夫してほしいと感じる。

NHK編成局  
番組審議会事務局

## 平成27年11月NHK中央放送番組審議会

11月のNHK中央放送番組審議会は、16日(月)、NHK放送センターにおいて、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「クローズアップ現代」などに関するBPO意見について説明があり議事に入った。続いて、放送番組の種別および種別ごとの放送時間(平成27年4月分～9月分)、平成28年度国内放送番組編集の基本計画(案)について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、12月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長 北城恪太郎(日本アイ・ビー・エム(株)相談役)  
委員 大野 博人(朝日新聞社役員待遇論説主幹)  
大日向雅美(恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授)  
佐野真理子(主婦連合会参与)  
龍井 葉二(連合総合生活開発研究所客員研究員)  
永田 紗戀(書家/花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰)  
仲道 郁代(ピアニスト)  
比嘉 政浩(全国農業協同組合中央会専務理事)  
増田 雅己(読売新聞東京本社取締役論説委員長)  
和田 章(東京工業大学名誉教授)

### (主な発言)

<放送番組の種別および種別ごとの放送時間について

(平成27年4月分～9月分) >

- 「平成27年度国内放送番組編集の基本計画」に定めた部門比率は、総合テレビで「報道番組は20%以上」となっているが、実績は約50%だ。教養番組が20%以上、教育番組が10%以上、娯楽番組が20%以上と、ほかの部門は実績と近い数字になっているにもかかわらず、報道番組を20%以上に設定するのは、目標設定として違和感がある。平成28年度については見直してほしい。

(NHK側)

検討させていただく。

- おおむね、当初の目標とした番組編成がされていると思う。今後も引き続き目標に合わせ、よい番組を作ってもらいたい。

<平成28年度国内放送番組編集の基本計画(案)について～予備審議～>

- NHKにとって、今年はBPOから意見を提示された重大な年であり、その意見を踏まえた編集方針が必要ではないかと思う。「編集の基本方針」、または最後のところに「BPOの意見を反映させた内容にする」と書き込むことを検討してもらいたい。

東日本大震災について「編集の基本方針」にも、「編集の重点事項」にも、きちんと記載されているが、自然災害としてだけ位置づけているように読める。東日本大震災の復興が遅れている理由は原発事故が大きな要因となっており、「原発事故の問題についても継続的に報道する」と明記してほしい。

- 今までも「地域」というキーワードが議論の対象になってきた。地域局からの発信や地域発ドラマ制作だけではなく、地域再生、雇用、働く場も全部含めた意味だと思う。ここ数年、地域がなくなるというような課題もあるなかで、これまでと同じような位置づけでよいのだろうか。11月15日(日)のNHKスペシャル シリーズ認知症革命 第2回「最後まで、その人らしく」などは典型的な例を紹介した番組だったと思う。NHKでは問題の指摘だけではなく、それに立ち向かい何とか止めようとする動きについてもかなり取り上げている。そういった深刻な状況認識に対し立ち向かう姿勢を打ち出す明るいメッセージをどこかに盛り込んでくれたらと思う。

- メディアが社会をいじめている面が最近あると思う。NHKは理屈にのっとった報道を心がけ、あげつらうような伝え方はやめたほうがよいと思う。原発事故の問題も、関係者は前の世代が作った原発の事故対応に一生懸命に取り組んでいる。そういったことを伝える優しい気持ちが放送局にも必要ではないかと思う。また、平和な日本をつくるために、本丸に迫るような平和主義を掲げる番組を作ってほしい。弱い人をつつき回すような報道はしないでほしい。「人の不幸は蜜の味」と言うように、人の不幸について取り上げると視聴率は上がるかもしれないが、NHKだけ

はそういう取り上げ方をしないようにしっかりと取り組んでほしい。視聴率を気にせず、政府も気にせずに、本当に平和な日本や世界をつくるためにどうすればよいのかということに取り組んでほしい。

- 国内では爆発的に外国の方が増えているが、東京オリンピック・パラリンピックに向け、この流れがさらに加速すると思う。例えば災害が起こった際など、放送を使って何を外国の方たちに伝えるべきかを考える必要があると思う。併せて外国の方々どう共生していくのか、幅広い年齢層に向けてどう伝えていくかも考える必要がある。

日本では、東京オリンピック・パラリンピックに向けたメディアアートが進んでいるが、それらとスポーツ番組を組み合わせることで生まれるおもしろさや細心さがあり、それらを海外の人が見れば、日本のすごさを感じてもらえると思う。そういった取り組みに向けた準備もどんどん進めていってほしい。いろいろな国のテレビ番組を見ていると、番組からその国の状況や文化を推し量れる。NHKには日本を誇ることのできるような番組作りをしていってほしい。何ごとも深く広く追究し、深い感動や知性を伝える番組を放送することで、日本人の間にも豊かな文化や教育への興味、人を思いやる気持ちが広がるといふ、よい循環が起こればよいと思う。

- 基本的な枠組みはよいと思う。1年たって基本計画が実行できたかどうかの評価をしていると思うが、何をもちて達成されたかと評価しているのか。ものによっては定量的には評価できず、定性的な評価になるなど、いろいろな評価があると思うが、国民から見て分かりやすい評価について検討してもらえたらどうかと思う。

(NHK側)

定量的な判断基準の一つは視聴率だと思うが、一つの物差し、バロメーターとして大事なことだろうと思う。そして視聴率だけで評価するのではなく、いろいろな要素をかみ合わせ、判断すべきだろうと思う。よい番組かどうかはアンケート調査やマーケティング等を実施し、十分に分析する必要がある。例えばクラシックの番組は視聴率としては低いかもしれないが、NHKならではの番組でもある。そういったことも合わせて考えていきたい。

具体的な評価としては、放送の質についてアンケート調査を行い、10指標を用いて波ごとに評価し、視聴率や接触者率についても分析した結果を、四半期ごとにこの中央放送番

組審議会でもご説明している。「国内放送番組編集の基本計画」はある意味抽象的なものであるが、具体的に番組が視聴者にどう評価されているのかについては四半期ごとにご報告している。

- 「国内放送番組編集の基本計画」の中で、この分野については放送番組の視聴者へのアンケート調査で何点以上を目指す、という指標が欲しい。視聴率は低いがごく少数の人に大変高く評価されている番組もよしと判断すればよいと思う。「国内放送番組編集の基本計画」に記載していることと、番組ごとの公平性や迅速性などについて評価が結びつかず、翌年「国内放送番組編集の基本計画」を直そうにもどこを直すべきなのかが分からない。P D C Aとまでは言わないが、立てた計画の結果を評価する仕組みも入れたらどうか。

(NHK側)

「国内放送番組編集の基本計画」と併せ、来年度の具体的な番組改定の議論も進めており、時刻表という形で来年1月ぐらいにご説明できると思う。「国内放送番組編集の基本計画」の趣旨を十分に考慮し、具体的にどういう番組にするのかという形で時刻表に落としとしていき、その時刻表に基づいて放送した番組がどのように受け止められているのかは一つ一つブレークダウンしながら評価していく。

- 個々のテーマごとに2つか3つ指標を作ればよいと思う。指標があれば評価が分かりやすい。

放送番組の部門別編成比率の指標で、総合テレビの報道番組を新年度に35%以上と見直したのは大きな進歩かもしれないが、実態は50%前後であり、せめて40%以上としたほうがよいのではないか。

(NHK側)

放送番組の部門別編成比率は、総合テレビの教養番組と教育番組は免許条件となっており、それぞれ20%以上、10%以上と決まっている。それ以外については調和原則に基づき、4つの分野の番組がうまく放送できていればよいという考え方だ。教養番組20%、教育番組10%、報道番組35%、娯楽番組20%を足すと85%となり、残りは15%だ。合計を100%にしてしまうと、そのときどきの社会状況などに

合わせて編成を自由に変更するというNHKとしての自主自律、裁量の部分が狭まってしまふことにつながると考えている。残り15%分について、そのときの事情に応じ、NHKの自主自律の裁量権の下で自主的に判断したいという意味合いも込め、この数字とした。

○ 私が知っている限り、実態は報道番組が50%前後だ。それはNHKの方針で50%となったのだと思う。100%にしろとは言いつもりはない。報道番組を40%にしたとしても、足せば90%だ。今回変更したことは評価したいが、総合テレビでは、娯楽番組よりも報道番組が2倍ぐらいを目指すのは適切な方針だと思う。

○ 部門別編成比率については、今の割合がキープされていけば問題はないのかと思う。

NHKには、視聴率で余計な競争をしようとしてくだらない番組を作つてほしくない。上の世代の人は、NHKではない番組が映っていると、なぜNHKを見ないのかとチャンネルを替えるぐらいだった。そういう世代がいた時代はよいが、近年はそうでもなくなっており、しっかり取り組んでほしい。

○ 委員から出された意見を踏まえ、NHKでどう修正するかを検討してほしい。

○ 「クローズアップ現代」の問題を踏まえ「改革」の姿勢を示すことは重要だと考えるので、それが基本方針に謳(うた)われていることは良いと思う。一方、編集の重点事項、各波の編集方針の書きぶりで、「挑戦」は感じられるが、「改革」については焦点がはっきりしていないよう感じられる。「改革」を考えている部分をもう少しはっきり伝えてはどうだろうか。

編集の重点事項「7. 日本を世界に、発信を強化」については国内放送と国際放送の連携強化は分かるが、国際共同制作がいかにして日本の発信になるのかが外部の者にはよく分からない。もう少し分かりやすく書いてはどうだろうか。

#### <放送番組一般について>

○ 「クローズアップ現代」に関するBPOの意見書は大変重要だと思う。報道もされているが、総務大臣の厳重注意、自民党の呼び出しも含め、かなり厳しい批判がされた。残念ながら総務大臣などから、真摯(しんし)に受け止めるというコメントはなく、大変由々しき問題だ。つまり、同じことが起こる可能性があることにな

り、絶対に止めなければいけないし、NHKだけの問題でもないと思う。BPOの意見書の最後のところで、「放送に携わる者自身が干渉や圧力に対する毅然とした姿勢と矜持を堅持できなければ、放送の自由も自律も浸食され、やがては失われる。これは歴史の教訓でもある。放送に携わる者は、そのことを常に意識して行動すべきであることをあらためて指摘しておきたい」と明示されており、その姿勢を貫くことが大事だ。その点についての見解をお聞きしたい。

(NHK側)

BPOのその部分の意見については、NHKの当該の番組に関するのではなく、BPOが独立した立場で意見を述べたと理解している。NHKとしてはコメントをする立場にないと考えている。NHKは憲法で保障された表現の自由の下で放送法にのっとって何人からも干渉されず、規律されることなく、事実に基づいて公平公正、不偏不党の立場で放送する姿勢にはいささかも変わりがない。

- 放送の姿勢は当然で、今回のようなことが起こった際に毅然(きぜん)とした対応をしてほしいということだ。
- 今回のBPOの意見は詳細で、すばらしいものだと思う。ところが、NHKからのコメントはあまりにもお粗末だ。ほんの数行で、NHKの調査結果がおおむね認められたと思う、というのは違うのではないか。やらせの部分にしてもBPOからの意見には「(NHKの)ガイドラインにいう『いわゆる「やらせ」』の概念は視聴者の一般的な感覚とは距離があり、本来ならもっと深刻な問題を演出や編集の不適切さにおい小化することになってはいないかとの疑問を持たざるを得ない」とまで書いてあるのに、NHKからのコメントでは、BPOからの意見を引用して「『やらせ』があったとは言い難い」などと書かれており、あまりにもお粗末だと思った。どんな問題があり、どこまで掘り下げるべきかを、NHKが出したコメント以外にもBPOの意見に対し発言すべきだったのではないか。今回のコメントは残念に思った。
- 私も同感だ。NHKは4月の報告書で「放送ガイドライン」の定義にある「やらせ」はなかったと報告した。それについてBPOが疑問を提示したわけであり、NHKはその指摘に真っ正面から向き合い、答えるべきだろうと思う。「放送ガイドライン」の「やらせ」の部分の見直しなどを検討する考えはないのか。

(NHK側)

BPOが指摘しているように、視聴者にどういう情報が伝わるのかが最も重要なことだ。現実とわれわれが伝えているものに隔たりがあってはならないとBPOが強く指摘していることは重く受け止めている。「放送ガイドライン」の原点に立ち返り、事実に基づいて正確に放送し、視聴者の信頼に応えることが何よりも重要だ。

取材から制作、放送までに何があったのかという事実関係、特に、週刊誌報道で「やらせ」だと指摘された、インタビュー部分でA氏とB氏の間で役の入れ替えがあったとは考え難いとのBPOの意見は、われわれの調査結果と同様であるという意味で、われわれの調査結果は大筋で認められたと考えている。

- 「クローズアップ現代」問題の検証番組に放送総局長が出演し、再発防止策についてもコメントしており、真摯(しんし)な態度でよかったと思う。しかし、隠し撮りではないのに隠し撮りのように見せたり、その場所が、ブローカーの活動拠点ではないのにそのように見せたことについて、視聴者は「やらせ」だと判断するのではないかと思う。NHKが考える「やらせ」の概念が一般とずれているとすれば、事実と違うことをつくり上げ、放送することが「やらせ」であると定義を変更したほうがよいのではないか。視聴者が感じていることとNHKが考えていることがずれてしまうこと自体が好ましくないと思う。事実をもっと端的に認めたいうえで、再発防止策についてコメントをしたほうが説得力があったと感じた。

(NHK側)

BPOは今回の意見の中で、「やらせ」の定義を具体的に示してはならず、意見を公表した会見でも「やらせ」という単語の概念は多義的だと指摘している。今回のBPOの意見を丹念に読むと、「やらせ」かどうかにこだわる以上に、NHKの「放送ガイドライン」で定められたとおり、きちんと事実に基づいて取材し、放送していれば重大な放送倫理違反は起きなかったという論旨構成だった。視聴者から「やらせ」だと指摘を受けるような番組を放送することは、もちろんあってはならないことであり、「放送ガイドライン」を順守するこ

とによってそのことを実現することがわれわれの責任であると考えている。今回の指摘を受け止め、正確に徹底した事実の把握をするという「放送ガイドライン」に掲げてある部分について、放送に携わる者すべてに徹底したい。12月には全国の拠点局で再発防止策も含めた勉強会を再度開催し、今後は視聴者の期待に反する放送を繰り返さないと、全員で確認したい。

- BPOは意見のなかで「NHKの放送ガイドラインの『やらせ』の概念については視聴者の一般感覚と距離がある」と明確に指摘している。これは視聴者の感覚とずれているということだ。それなのにNHKの定義では「やらせ」ではないと言うこと自体が視聴者から見ると否定的であり、言い訳に聞こえる。現状がそうであれば、何をもって「やらせ」とするかについては見直したほうがよいと思う。一般視聴者の感覚とずれがあるままNHKが意見を言い続けること自体が、正確な報道をしていることに対する疑問を呈しかねない。再度検討してほしい。
- どんな番組でもシナリオがあって作っていると思う。われわれのような素人が番組に出演し、番組の筋書きに沿って「ここではこう発言してほしい」と言われることは何に当たるのか悩ましいと思った。長時間インタビューを受け、要点だけをピックアップすると、場合によっては趣旨が違ってしまうこともあると思う。この問題については、難しい面が多々あると思う。どんな番組でも筋書きがあると思うし、ディレクターが話をおもしろくしようとするのは、いくら消そうと思っても発生するのではないかという感じがする。

(NHK側)

ある種のシナリオに沿って、演技とまではいかないまでも、インタビューに答えてもらったり、さまざまなシーンを撮影することは、これまでもなかったとは言えないことだ。今回の問題は、それが極大化したことだと思う。「クローズアップ現代」についてのBPOの指摘はそのとおりであり、番組の趣旨そのものは間違っていないと思うが、すべての構成要素に問題があったことは確かだ。そのことについて真摯(しんし)に受け止める。この問題に限らず、ほかの番組についても類例がないのかという問題もある。BPOから組織的な問題についても指摘を受けた。NHKはとかく縦割り組織と言われることが多いが、それぞれの組織が切さたく磨し、よいも

のをつくる形になっていけばそれも一つのやり方だ。今回のように危機管理事案となると、そういう部分が悪い形で出てきてしまうこともある。そういったことも含め、ご指摘をいただいたところを一つ一つ直し、失われた信頼を回復していきたい。

- 今回は2つの指摘があった。1つは放送の内容に関してで、それはすでにNHKから検証報告が出されている。もう1つは放送事業者が問題を是正しようとしている過程で政府が介入したことだ。BPOはそこを問題視しており、放送法が保障する自律という問題をどう考えるのか、それに対しNHKがどういう姿勢を示すのかという2つ目の問題がある。前者は十分かどうかという議論がいろいろあるが、放送内容に関しては検証されたと思うし、今後とも十二分に努力が払われると思う。2つ目の問題、放送事業者が是正しようとしているところに、個々の番組に対し政府が介入することが、放送法から見てどうなのかということもBPOの意見書から重く読み取った。
- BPOが問題を指摘しているとおおり、正確な放送を行っていけば、総務省からの発言もなかったと思う。NHKが総務省の言ったことはおかしいと言えるかという点、番組の内容そのものに問題があった場合、番組への介入とまでは言えないのではないかと思う。そういう番組を作ってもらっては困るというのは視聴者も同様だと思う。だがそういったことが拡大していくとなると心配なことではある。
- 11月3日(火)にNHKスペシャル「明治神宮 不思議の森～100年の大実験～」(総合 前9:05～9:54)の再放送を見た。明治時代の人々が、100年先の森がどうなるかを考え、壮大な実験を行い、森を見守っていた。現代の森林学者は、森を育てるには、近くの森の構成を考える必要があることや、ある種類だけを植えても森はうまく育たないと言っていたが、明治の時代にそういったことを考慮し、取り組み続けたことはすごいことだ。その様子を映像で見られて、大変興味深かった。
- 「NHKスペシャル アジア巨大遺跡」は11月7日(土)の第3集「地下に眠る皇帝の野望～中国 始皇帝陵と兵馬俑～」、11月8日(日)の第4集「縄文 奇跡の大集落～1万年 持続の秘密～」を見た。知らなかったことが多く、知的好奇心を満たしてくれるすばらしい番組だった。
- 「NHKスペシャル シリーズ認知症革命」が2回放送されたが、いずれもすばらしい切り口でよかったと思う。認知症はこれから国民全体の問題になると思う。

11月14日(土)の第1回「ついにわかった！ 予防への道」では原因をきちんと究明し、11月15日(日)の第2回「最後まで、その人らしく」では認知症の方を地域で支え合うという内容で、支え合う仕組みとして富士宮市の取り組みが紹介されていたが、オランダからも視察が来るほどにすばらしい取り組みだと知った。私は地域でNPO活動をしており、その醍醐味(だいごみ)と大変さを実感しているが、富士宮市の場合も大変なプロセスを経て、成功したのだと思う。キーパーソンがいて、行政と地域の住民が一体となった結集であり、ほかの市で導入を検討するときどういうハードルがあるのか、どういう仕組みが必要なのかなどを掘り下げて伝えてくれればありがたい。

- 認知症問題の裏にあるテーマは認知症対策から地域再生そのもので、地域再生とは人のつながりの再生だ。ケアを行うための集会所のような場所をつくることはいろいろなところで試みられている。自治体の一職員の熱意で動いたところもあるし、NHKスペシャル シリーズ認知症革命 第2回「最後まで、その人らしく」のように市民ボランティアからの広がり、病院のようなもともとある施設からの広がりなど、いろいろな可能性があり、富士宮市は一つの例だ。ほころびはあちらこちらで出ており、地域局にとどめずに発信して行ってほしい。東京から、国から発信するよりは地域同士で発信し合うような環境をNHKの全国ネットワークを通じて作ってほしい。被災地の復興も今の文脈で言えば地域再生そのものだ。被災地の復興だけではないところに日本は来ていると思う。

(NHK側)

地域再生の話について。現在「NHK地域づくりアーカイブス」というサイトを10月からネット上に公開している。「農林水産・食」、「環境・エネルギー」、「共生経済・観光」、「コミュニティ・商店街」、「教育・子ども・若者」、「医療・介護」、「福祉・生活支援」、「災害復興・防災」などの分野でこれまでNHKが取材してきた地域でのさまざまな取り組みについて、ニュースや番組の映像をご覧いただくことができる。ある取り組みについて、ほかの自治体が視察に行く際「まず『NHK地域づくりアーカイブス』を見てから来てください」といった利用が増えつつある。現在は100ぐらいの自治体の取り組みを見ることが可能だ。

- NHKスペシャル シリーズ認知症革命 第1回「ついにわかった！ 予防への道」で原因をきちんと究明したうえで、第2回「最後まで、その人らしく」を見た

が、海外の事例が紹介されていて参考になることが多く、大変よい番組だった。第1回「ついにわかった！予防への道」では認知症をどう予防するかについて、発症を防ぐ運動や食生活などを紹介し、「手軽に取り組めそうだから頑張ってみよう」と思えるような工夫がところどころに見られ、よくまとまっていたと思う。第2回「最後まで、その人らしく」では、重い認知症の方でも自分の気持ちをきちんと文字にすることができて、「物忘れをしてしまうことがつらい」、「認知症になってしまって悲しい」などといった思いや気持ちを持っていることを分かりやすく取り上げていて衝撃を受けた。私たちがこれから何をすべきなのかについても考えさせられた。富士宮市の例もうまく伝えていた。認知症の問題は身近で、自分たちのこととして行動していかなければならず、自分はちょうどその年齢でありこれから何をすべきか、もっとじっくり考えようと思った。アメリカではガイドラインを改正し、補助金を出す条件として薬を減らし、本人中心のケアをするというすばらしいことを考えているようだ。日本もどうやってケアをしていくのかを考えなければいけない。お金も人も含め、いろいろなものが必要だ。それには富士宮市のように住民が、私たちが頑張らなければいけないと思う。番組を見て「頑張らなさい」と言われているような気がした。これからも分かりやすくいろいろな角度から認知症を取り上げる番組を続けてくれれば、日本もよい方向に行くのかという希望が持てた。これからもよい番組を作ってほしい。

(NHK側)

「NHKスペシャル シリーズ認知症革命」を大変褒めていただき、ありがとうございます。日本では子どもが育ち上がり、1人住まいの高齢者が多数いる。MCI（軽度認知障害）の方々に、歩くことを推奨することができれば、認知症を発症する確率が下げられるかもしれない。認知症を発症した方へのケアも大事だが、予防からスタートする取り組みをどうやって国民運動的に実施していくかが大事だ。例えばラジオ体操と同じような取り組みが必要かと思う。

- ラジオ体操について、夏休みは子どもたちも集まるが、普段はほとんどが高齢者で、神社などに集合してラジオ体操を行っている。しかし朝方に地震が発生すると番組が放送されず、何もせずに帰宅するそう。放送がないときはテープを流さないのかと聞いたら「テープではなく、NHKのラジオを聞きながらやるのがいい」ということだった。何かあった時にはラジオ第1と第2を使い分けてうまくできないものだろうか。

(NHK側)

昔、私もテープを流しながらラジオ体操をしていたことがあるが、テープだと義務的になり、興味が湧かない。高齢者が集まりラジオ体操を行うだけでも一つのコミュニティであり、大変大事なことだ。NHKの「ラジオ体操」も毎日の放送のほかに年に1回「1000万人ラジオ体操・みんなの体操祭」を実施しているが、そういったことを盛んにすればよいと思う。

- 震度3程度の地震であれば、放送を休止しないような工夫をしてほしい。

(NHK側)

11月14日(土)は鹿児島県西方沖でやや強い地震が発生し、津波注意報が発令されたため休止せざるを得なかった。「ラジオ体操」はテレビの「連続テレビ小説」のような位置づけで、なるべく放送するという方針だが、緊急報道の際は休止することもある。ご理解をいただければと思う。

- 認知症はこれからの社会で大きな課題だ。研究成果も次々と出てくることが予想される。新しい成果についてはまた紹介してほしい。今の「ラジオ体操」に何か付加すると認知症の予防になるかもしれない。そういった展開の形もよいと思う。
- 11月5日(木)の「新天地に挑んだ日本人～日本・ブラジル120年～」(総合 後10:00～10:49)は、農民写真家の大原治雄さん、ブラジルで芸術家になった大竹富江さんが取り上げられていたが、そういう人がいたのかと大変興味深かった。大原さんが撮影した写真のきれいさには驚いた。大竹さんを紹介するパートでは、日本人の移民の中で勝ち組と負け組に分かれた凄惨な争いや、日本人コミュニティに対する反発もあるなか、ブラジルの芸術家の輪の中に飛び込んで大成するという筋立てだったが、そのつながりがよく分からなかった。ブラジル社会に飛び込むというのがキーワードで何度か出てきたが、どうやって飛び込んだのか、なぜ大竹さんがそう考えたのか、移民で行った人がホスト社会に統合されていくのはどういふことなのか分からなかった。最後のほうで、日本人は教育熱心だというような話があったが、移民の問題とどうかかわるのかが有機的につながっていない印象を受けた。このグローバル時代においては人はあちこちに動くようになり、移民や難民など大変な問題が起きているなか、移民の問題を取り上げたことはタイムリーだった

と思う。新天地に挑戦した日本人という視点で描かれていたが、昔イギリスの専門家から「『移民』問題と言ってはいけない。『移民』への挑戦と受け止めなければいけない」と言われたことがある。移民という問題は行った人だけではなく、受け入れる側にとっても大きな挑戦だと思う。今日的なコンテキストで過去の日本人がどのようにブラジルに渡り、その世界に溶け込んでいったかという問題を描くのであれば、受け入れた側がどういう社会であったのか、どのように日本人を受け止めたのかが大事だったのではないかと思う。その辺についても、もう少し掘り下げてもらえればよかったと思う。

(NHK側)

「新天地に挑んだ日本人～日本・ブラジル120年～」では、取材が深く到達しなかったところもあり、どのようにブラジルが日本人の移民を受け入れたかを取り上げきれなかったと思う。第二次世界大戦の後の話では勝ち組、負け組の間で争いが起き、そのことでブラジルの国会では日本人の移民を国民とするのをやめようではないかという議決が行われた。結果は半々だったが、議長から「どこの国だからという差別なく日本人を同じように認めよう」という決定があった。そこで話が終わり、大竹さんの話に移ったが、その展開の仕方が関係があやふやなままだったため、余計に混乱したのかと思う。議長の決断に対して、ブラジルの懐の深さのようなものを感じ取っていただこうと思い紹介したが、取材が100%うまくいっておらず、もっとしっかり取り上げられたのではないかという指摘はあるかもしれない。

- 「新天地に挑んだ日本人～日本・ブラジル120年～」で紹介された日本人たちについて、日本にいる日系2世、3世の人たちの間で、どのように共有されているのかと思った。移民を受け入れる側の問題もあるが、もう一つ問題があると思う。共生と言っても、結局は当事者同士であり、在日の日系人はその歴史をよく知らない。どういう若者、同世代が対話できるのかと考えると、継続し、展望をもっと広げた形で取り上げてほしい。
- 連続テレビ小説「あさが来た」を毎日楽しく見ている。前作の「まれ」とのギャップがあり、雰囲気も違ってしばらく慣れるのに時間がかかったが、主人公あさの勢いのある感じやAKB48の主題歌が毎朝のリズムに乗って大変楽しい。「花子とアン」も好きだったが、違う感じだ。子どもと一緒に見ているが、子どもが出

演者たちの独特な話し方をまねしたり、家族でいろいろな会話も生まれている。これからも期待している。

- 連続テレビ小説「あさが来た」の視聴率はどれぐらいなのか。

(NHK側)

関東地区の世帯視聴率で最高が24.8%だ。

- 連続テレビ小説「おしん」は50%を超えていた。その時代とは違うが、24%は高いと思う。大河ドラマ「花燃ゆ」の視聴率は回復したのか。

(NHK側)

2桁は維持している。

- 11月15日(日)の「未来への絆」からはおもしろくなってきたと思う。ただ、おもしろくなってきても、一度見なくなった人は戻ってこないかもしれない。

- 連続テレビ小説「あさが来た」は大好きで、毎回見ている。主人公のモデルとなった広岡浅子は、仕事を一生懸命に頑張るあまり夫の世話ができず、「めかけ」に4人の子どもを産ませている。当時としては珍しくないことではあるが、このことをドラマでどう取り上げるのかが心配だ。女性が一生懸命に活躍することが求められている時代であり、その一方で仕事を頑張ると家庭や夫の世話ができないというなかで、あの時代では当たり前のことだが、「めかけ」を作ることが現代の視聴者、しかも朝のさわやかな時間帯に、どう受け入れられるように作るのがか。今日の放送が大変意味深な終わり方だったため、今後のことを心配している。

(NHK側)

ドラマはフィクションで、登場人物の名前も変えており、史実と同じではない。朝の番組であり不快感をもたらさないように、十分に配慮して作っていききたい。

- NHKを含むテレビや新聞などで、小型ジェット機「MR J」の報道について気になったことがある。「YS-11」から半世紀ぶりの国産旅客機ということだからかなり大きく報道されたが、このグローバル時代に“国産”とはどういう意味なのかあまり分からないままだった。エンジン自体はアメリカ製で、部品の7割が外国製品で、作った日本の会社も株の30%以上を外国人が所有している。今の時代に

大きなプロジェクトはグローバルな次元で行われており、“国産”ということばに違和感があった。そういった複雑なバックグラウンドについて伝える報道がもっとあってもよかったのではないか。もっと複雑で陰影の深い話だと思う。

(NHK側)

日本は「YS-11」以降、50～60年のブランクがあった。その間にアメリカの「ボーイング」などで日本が主要な部分をたくさん作り、そういうところから技術を培ってきて、今回、設計から組み立てまで日本で行った。エンジンは外国製のものしかない。現代はグローバルなコンビネーションで作っているため、どの日本の産物を取ってみても、純粋に日本だけというものはない。設計を行い、組み立てたところが日本であり、それを国産だと最終的に言っている。

- 半世紀ぶりの国産と言うと、どういうイメージになるのだろうかということだ。実際のもっと複雑でややこしいリアリティを正確に報道するためには、もっと説明したほうがよいのではないかと思った。

(NHK側)

委員のご指摘はわれわれも感じていることだ。「YS-11」の失敗は部品の供給、サービス体制など、飛行機そのものの問題だけではなく、飛行機という特別なものをメンテナンスし、運用するノウハウがなく、うまくいかなかったという指摘がある。われわれのニュースの中でもそういうことを伝えた。実際にそういうことができるのはアメリカとヨーロッパ、小型機はブラジル、カナダと限られた国しかなく、その中に参入するという意味でいささか晴れがましい気持ちもあり、NHKに限らず、新聞も、テレビも、そういう取り上げ方をしたのではないかと思う。その辺について、もう少しきちんと伝えておけば委員が指摘する疑問はなかったかもしれない。目で見える飛行機だけではなく、安全に飛ばすためのさまざまなノウハウの蓄積がないとできないという意味で、技術的に難しいチャレンジだ。だからこそ、感動を込めて、こうした報道となったと思う。

「YS-11」はあまり売れなかった。飛行機は寿命が長

く、パーツなど、いろいろなものを作り続けなければならない、コストの高い部品を供給し続けることができず生産をやめてしまった。「MR J」がどこまで売り上げを伸ばせるかだと思う。

- 「放送番組モニター報告」でグラフを出すときに、評価5と評価4を合わせて90%としているが、数字を指数化し、評価5は5点、評価4は4点とすると93点のように点数で表現することができる。グラフも出したほうがよいが、評価5が多く90%なのか、評価4が多く90%なのかは指数化すると差がはっきりと見える。指数化し、横に記載したらどうだろうか。

(NHK側)

検討させていただく。

NHK編成局  
番組審議会事務局

## 平成27年10月NHK中央放送番組審議会

10月のNHK中央放送番組審議会は、19日(月)、NHK放送センターにおいて、12人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」(27年度第2四半期・7～9月)について説明があった。続いて、浦沢直樹の漫勉「さいとう・たかを」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、11月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	北城恪太郎 (日本アイ・ビー・エム(株)相談役)
副委員長	小林いずみ (前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官)
委員	秋池 玲子 (ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター)
	大野 博人 (朝日新聞社役員待遇論説主幹)
	大日向雅美 (恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授)
	鎌田 實 (諏訪中央病院名誉院長)
	倉重 篤郎 (毎日新聞社論説室専門編集委員)
	佐野真理子 (主婦連合会参与)
	東儀 秀樹 (雅楽師)
	永田 紗戀 (書家/花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰)
	増田 雅己 (読売新聞東京本社取締役論説委員長)
	谷口 肇 (前全国農業協同組合中央会専務理事)

### (主な発言)

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」

(27年度第2四半期・7～9月)について＞

- 7～9月で波の接触者率は4～6月と比較すれば回復基調にある。BSプレミアムは7.0と、かなり高い満足度を達成していることも成果ではないかと思う。一方で、ドラマについては視聴率が昨年7～9月に比べるとかなり下がっているので課題があるのかという感じがする。

引き続き視聴者から高い評価を得るような番組制作をお願いしたい。総じて回復

傾向にある、ないしは改善しつつあるということで結構だと思う。「クローズアップ現代」については過去にも議論したが、内容の作り方に問題があるということで「クローズアップ現代」ないしはNHKの報道の信ぴょう性について疑念を呈するような放送があったのは残念だ。しかし、よい番組でもあり、これから改善することを期待している。

<浦沢直樹の漫勉「さいとう・たかを」(Eテレ 9月25日(金)放送)について>

- 大変興味深く視聴した。この番組は通常のドキュメンタリーとしてだけではなく、誰かと冷静に見ている普通の雰囲気が大変よかったと思う。一般的なナレーションが入ったドキュメンタリーであれば、さいとうさんの中にある何か大切な感覚をのぞけなかったのかもしれないと思った。定点カメラの映像に映し出される、さいとうさんの何気ないひと言やしぐさを見て、「ゴルゴ13」の作者という印象とは違う親しみを感じた。浦沢さんとの対談形式だったことでさらに親近感を増したと思う。私たちが当たり前に見ていた車の音の表現一つをとっても、浦沢さんの解説を聞きながら見ると、こだわりがあって生まれたことが分かった。また、たばこを吸いながら下描きなしに主人公の目を入れる姿には貫禄を感じた。ソファで仮眠を取りながらひたむきに机に向かう姿を見て背筋を正す思いがした。日常の短い時間の中で、真っ白い紙から「ゴルゴ13」が生まれ、命を宿すところがファンタジックに感じた。読者を楽しませたいという思いや「監督が自分で、役者がゴルゴだ」という心に残るコメントもたくさんあり、大変幸せな気持ちで見終わった。
- 小さいころ親から「漫画なんか読まずに勉強しなさい」と言われていたため、大きくなるにつれだんだん漫画が読めなくなっていたが、その中でも「ゴルゴ13」は割と好きな漫画でときどき読んでいた。その「ゴルゴ13」がどのように描かれているのかと興味を持ちながら視聴した。日ごろ見ることができない漫画の世界を堪能することができ、よくまとまった番組だと思った。「ゴルゴ13」が出来上がる過程の職人芸のような作業には思わず見とれた。さいとうさんと浦沢さんの会話にも仕事人としての息吹が感じられ共感が持てた。さいとうさんの「時代、時代の解釈で善悪も、何もかもが変わっていく。『ゴルゴ13』が47年間、今日まで続いているのはその時代の善悪、解釈で描けなかったからだと思う」とのことばに共感を覚えた。番組を見て、さいとうさんにさらに興味が湧いた。さいとうさんはなぜそのようなキャラクターを漫画で描こうと思ったのか、ゴルゴという極めて特異な人物を生み出すまでの背景、理由、考えの過程が紹介されたらさらにより番組になったのではないかと感じた。

(NHK側)

「漫画ばかり読んでいないで勉強しなさい」と浦沢さんが小さい頃にお母さんから言われていたことから、「漫勉」というタイトルにした。さいとうさんの背景については現場でも最後まで議論したが、番組の時間の問題もあって入れられなかった。やはり入れたほうが番組に深みが出ると、改めて感じた。

- 2人とも大好きな漫画家で、大変興味深く視聴した。浦沢さんを選んだことが大正解だと思う。手塚治虫さんや石ノ森章太郎さんが生きていたとしても、世界をリードする重鎮と世代が違っていても、技術、感性でさいとうさんと横に並べる、今を生きている人は浦沢さんしかいないだろうと思う。視聴者の気が付かないところまで、浦沢さんの目線だからこそ示してくれる点がたくさんあり、それがマニアックな人たちも大喜びできるし、漫画のことをあまり知らない人でも強く興味を引くよい演出となっていた。何気なく2人が会話していることのどこをとっても聞き逃したくない内容だった。普通のナレーションで構成する番組では得られない臨場感があり、そこに一緒に居合わせて話を聞いていて、気持ちがよくなっていくような感覚を覚えた。これからも浦沢さんがズバズバと話し込んで、どんどん漫画界の重鎮の姿を引き出してほしいという期待が膨らみ、大好きな番組となった。
- 私自身は漫画とは縁遠い人間で、漫画を買って読んだがことがない。私のような積極的関心のない視聴者にどうしたら「漫勉」のような番組に接触してもらえるのが課題ではないかと思う。実際こういう番組があることを知らなかった。世界でも有名な「漫画」の創作世界が作者によって違うという説明を聞き、その世界を見られることが貴重だと再認識した。さいとうさんについては全く知らなかったが、プロダクションのスタッフとの連携で生産性の高い劇画が創出される過程は勉強になった。9月24日(木)に「これが最後の『これでいいのだ!』～赤塚不二夫 最後のマンガ～」(BSプレミアム 後10:00～10:59)も見たが、脳科学者、映画雑誌編集者、劇作家、小説家など、さまざまな分野の出演者が登場し、赤塚漫画を解説しており、その価値の高さが積極的関心のない私にもよく分かった。そういった第三者の解説を交えると光と影、よいところと悪いところも表れてきて、すばらしさがさらに膨れあがり、楽しみも含め伝わるのではないかと感じた。
- おもしろいと思いながら最後まで見た。さいとうさん自身が「自分は映画でいうと監督みたいなものだ」とコメントし、共同で漫画を作るという考えがほとんどな

い時代にプロダクションを立ち上げチームで漫画を制作することを始め、脚本家が台本を持ってくることもあり、ネームを考えるのに時間の大半を注ぐとの説明があった。47年間も「ゴルゴ13」が人気を維持し続けていることの秘密、時代の相対的な善悪などに左右されない普遍的なものを捉えていること理由は、ひょっとしたらプロダクションという方式にかなりあるのではないかと思う。さいとうさんが言っているように、それぞれが得意な分野を持った人たちを集めて創作することに「ゴルゴ13」の秘密があったら、そこがもっと大事だったような気がする。下描きなしでさいとうさん自身が描く場面は、プロやマニアは感心するかもしれないが、そうでない立場から見ると、おもしろかったが、見終わって疑問が増えたところもあった。番組の主題はペン先一つで創作する瞬間をカメラで捉えることにあるということだが、主人公が生み出されているところを映像で見せることは貴重だと思う。それは「ゴルゴ13」の47年間の成功とは別の側面であるような気もした。焦点がやや分かりにくかったというのが正直な感想だ。

(NHK側)

身につまされるコメントを頂いた。編集する上でも何を選択し、どう描くかはいつも悩むところだ。ご指摘どおりのところもある。今後の参考にさせていただきたい。

- 私は漫画ファンではなく、「ゴルゴ13」も名前を知っている程度だった。自ら選択して視聴することはなかった番組だと思うが、今回見てよかったというのが率直な感想だ。浦沢さんとさいとうさんの静かな語りで落ち着いて見ることができた。最近では静かに語る番組が少なく、そこは何よりも評価したい。浦沢さんのさいとうさんに対する尊敬の念も静かな語りの中に十二分に伝わってきた。漫画があれほど緻密な設計のもとに作られることも、漫画のことを知らない私には漫画を見直す大きなチャンスとなった。さいとうさんは若いころに日本画を修行されたということで、武士の後れ毛を描く様子にそこまで出るのかと感心した。日本の漫画文化が世界に評価される裏にはそれだけ緻密で高い文化性があることを再認識する機会になったことを感謝したい。さいとうさんが記号でプロットを書き、途中で若いスタッフがその紙を取りにくる場面があったが、スタッフたちがどういう苦勞で「ゴルゴ13」を最終的に仕上げているのか、その姿が少しでも紹介されていればなおよかったと思う。そうすれば、さいとうさんのプロットのすごさとそれを受け継ぐプロダクションのメンバーへのいたわりも伝わり、47年間も続けてこられた背後には、メンバーの力をまとめるさいとうさんの力もあったということが、筆の力だけではなく、より伝わったと思う。私が見ることのなかった世界を見せてもらい、うれしかった。

- 大変興味深く視聴した。私は漫画が大好きで、社会人になってからも漫画を連載している青年向け雑誌はほとんど買って読んでいた。そのため漫画に関心がない人が見るのとは違った感想になるかもしれない。さいとうさんが手塚治虫さんの作品を見て、紙で映画ができるのかと思って劇画というジャンルを確立されていくというところは、なるほどと思った。最近の漫画事情に思いをはせると、電車の中でもかつて私が読んでいたような漫画雑誌を読んでいる人はとても少なくなった。新聞も同じだが、紙文化が衰えてきている。一方でアニメが隆盛で、民放の深夜の時間帯にはアニメがたくさん放送されている。アニメの中には漫画を原作としているものもあるが、最近はゲームから誕生したアニメ、原作がないオリジナルのアニメが多くあり、その中には出来がかなりよいものもある。時間の都合もあるとは思うが、漫画とアニメを巡る状況について、さいとうさんがどのように感じているのかというところも少し取り上げてもらえればよかったと思う。
  
- 日本の漫画は世界に冠たるソフトとして大変人気が高い。日本のアニメと漫画が世界の人の心をつかむ本当のところはいったい何なのか、それは日本人の中にあるものであり、それが世界にも共通するものだと思う。そういった趣旨から、浦沢さんを起用し日本の漫画のよさや内容を突き詰めていくような番組を意識したと思う。だが今回の番組からはその趣旨が伝わってこない印象を受けた。個人的にはさいとうさんの漫画はあまり好みではなく、なぜ「ゴルゴ13」という一つの個性で何十年も漫画が続いているのか分からないぐらいだ。2人とも世界に通じるようなストーリーを描いているところが共通しているが、「ゴルゴ13」と浦沢さんの漫画が世界にどれだけ受け入れられているのかが知りたかった。受け入れられているならば、日本の漫画の普遍性を解明する手がかりになると思う。漫画家同士の語り合いで楽屋落ち的なおもしろさもあると思うが、浦沢さんにとってさいとうさんが大先輩であるにしても、さいとうさんの話をひっくり返すような突っ込みがあればもっと深みが出てよかったと思う。

(NHK側)

漫画文化が世界に受け入れられ、世界の人々の心をつかんでいるところを解き明かしたいと私たちも思っている。漫画家それぞれで創作形態が全く違うため、一人一人を見つめ、なぜこの漫画が世界の若者の心をつかんでいるのかと思いつながら編集、取材をすることが大変大切なことだと改めて思わされた。

- おもしろく視聴した。さいとうさんが手塚治虫さんの漫画を見て触発されたと言っていたが、手塚さんをテーマにしたNHKのほかの番組では、時代の変化とともにさいとうさんたちが描く劇画が人気となって壁にぶつかり、その影響で「ブラック・ジャック」が生まれたのではないかということだった。お互いが触発し合い、つながっていくことによって世界の先頭を走る漫画文化が創られたと、もう一押しできたらもっとおもしろかったのではないか。劇画がほかの漫画のジャンルと違うところはシナリオ、ストーリーがどう描かれているかで、そこがもの足りなかった。分業制の中で脚本家がいる、脚本家が勝手に書いてきたものを絵コンテと主人公のゴルゴだけをさいとうさんが描き、あとはチームでできているとすれば残念だ。脚本家とさいとうさんがテーマについて議論するような場面があればよかったと思う。監督だと言っているとすれば、映画監督はおそらくシナリオに対してもっと突っ込んだ議論をするはずで、そういった場面がなかったのは劇画をテーマにしている割には弱かったのではないかと思った。
  
- 45分の短い番組の中でさいとうさんの人生、劇画の成長の過程も含め、コンパクトによくまとまっているという印象を受けた。一流のプロが一流のプロを見ることによって無駄のない、ツボを押さえた作りになっていたと感じた。番組の企画がよかったのではないか。海外で日本に興味がある外国人に会うと、若い世代で「日本に行ったことはないが、漫画で日本を好きになった」という人が多い。そういう意味でさいとうさんが劇画を確立したこと、またある種の工房で重みのあるものを大量に作り出すシステムを確立していった価値を改めて感じることもできたのもおもしろかった。ゴルゴの目線の先に車があるのかないのかで絵に重みが出るということまで指摘し、スタッフの若い人を励ましていることも含め、自分で新しいものをどんどん創造するクリエイター人生についても考えさせられた。漫画の好き嫌いにかかわらず、興味を持てると思った。また、番組の演出もおもしろかった。鉛筆で描いているときはそれほど目を引くものではないのに、みるみるペン先から表情が現れ人間が生み出されていく創造のおもしろさが映像でよく表現されていたと思う。漫画のようにコマ割で映像を組み立てる演出もおもしろいと思った。課題があるとすれば、全体を見せようとする中でいろいろな要素が入っていて大変おもしろいのだが、どれかを深掘りする方法もあるかもしれないと思った。この番組シリーズの何回かの組み合わせの中で濃淡を付ける作り方も考えているかもしれないが、そういった方法もあるかもしれないと思った。
  
- 定点カメラを使ったアプローチがおもしろかった。定点カメラでゴルゴの顔ができていくのを見ながら「運慶は木を使って仏像をつくるのではなく、中にある仏像を掘り出す」というのを思い出した。紙の中からゴルゴを見つけ出しているような

感じを受けた。その映像を見ながら浦沢さんと二人で話しているのも、共通の視点に立って漫画を見るというおもしろいアプローチだと思った。私は劇画と漫画の違いはタッチの違いかと思っていたが、劇画は紙の上に映画をつくることだと言っていて、なるほどと思った。私も「ゴルゴ13」は昔から読んでおり、チームで制作していて脚本家が別にいることは分かっていたが、ゴルゴの普遍性を誰が主導して作っているのかが、いまひとつはつきりしなかった。ゴルゴの普遍性は漫画を描いているさいとうさんのこだわりなのか、脚本家のこだわりなのか、共同で作っているものなのか、「ゴルゴ13」だからこそ、そのところはもっと知りたいと感じた。

- 大変興味深く視聴した。劇画というのは漫画を描きながらそこにストーリーを持たせ映画を作るという色彩があることを初めて知った。「ゴルゴ13」は単行本になっているシリーズもので2番目ぐらいに発行部数が多いそうだが、それだけ売れる漫画ということは物語もおもしろいと思うし、画面の作り方も大変よく、なるほどこのように描いているのかとよく分かった。気になったのはそのストーリーを誰が作っているのかだ。さいとうさんはゴルゴと自分の関係について、「よく言うことを聞いてくれる役者と監督のつもり」だと言っているが、原作を書いている人がいて初めて役者と監督だと思う。作家がさいとうさんなのか、別の人物と議論しながらストーリーを作っているのか、そこがよく分からなかった。スタッフと一緒に作っているようだが、その役割がよく見えなかった。そこを伝えてくれると、もっとおもしろかったと思う。画面の作り方は大変うまく区切ってあり、二人が対話をしている画面と絵を描いているところを分けつつ、キーワードや重要な情報を下に表示していたのは印象に残ってよかったと思う。視聴率はどれぐらいだったのか。漫画の世界を取り上げた番組で若い世代に見てもらいNHKに関心を持ってもらうということも一つの目的だったと思う。NHKで積極的に番組をPRしていたようにも見受けられなかったが、次回のシリーズの際にはもっと番組をPRしてもよいと思う。

(NHK側)

Eテレの夜11時の放送で、関東地区の視聴率は2.2%だった。今年度同時時間帯で2%を超えた番組はない。また視聴者層は男性50代に加え、若い世代にもよく見られ、漫画に興味のある方が見てくれたという実感を持っている。委員からの意見はセカンドシーズンに生かしたいと思う。ありがとうございました。

- 一劇画家のドキュメンタリーにとどまらず、一つの分野、ジャンルと共同制作モデルを切り開いた苦闘のプロセスに迫ったものとして普遍的な意味合いを持つ番組に仕上がったと思う。同業の後輩が仕事部屋を訪ね、ドキュメンタリーを見ながら対話をするという進め方も成功していて、自然でくつろいだ会話を生み出していた。制作過程、細部の手法についても興味深かったが、かつてのゴルゴファンの人としてはあのキャラクターが生み出された経緯、あるいは劇画というジャンルにたどりつくまでの苦闘と模索の時代について、もっと深入りしてほしかった。

#### <放送番組一般について>

- 9月20日(日)のNHKスペシャル「老衰死 穏やかな最期を迎えるには」は印象に残った。樹木希林さんのナレーションで穏やかな気持ちで見ることができ、よい人選だったと思う。番組を見て、8月30日(日)のNHKスペシャル 老人漂流社会「親子共倒れを防げ」を思い出した。2つの番組とも身につまされる思いで、高齢化社会の深刻な問題を扱っており、底辺がつながっていると感じた。「老衰死 穏やかな最期を迎えるには」は、死のテーマという重たいものだったが、改めて死ぬとは何だろう、どう迎えたならよいのかとつくづく感じさせられた。老衰死で亡くなる人のほとんどが苦しみも悲しみもなく息を引き取ることが、科学的データに基づき指摘されているということに驚いた。また、海外の終末期ケアの専門家が「死は敗北ではない。安らかに死ねないことが敗北だ」と語っていたのも衝撃的だった。穏やかに最期を迎えるためには医療、年金、介護の3つが必要だ。社会保障の充実、整備が求められていると痛感した。これからも高齢化社会の問題点を深く追究するような番組を作ってほしいと思う。
- NHKスペシャル「老衰死 穏やかな最期を迎えるには」は、老後、特に老衰死の重要な問題を指摘してくれた。NHKでなければできないよい番組だったと思う。今後はこういった取り組みを行う予定なのか。

#### (NHK側)

高齢化社会の問題は折に触れ「NHKスペシャル」やそのほかの番組でも伝えていく。例えば、認知症社会についてのキャンペーンを総合テレビで取り組んでいるが、11月14日(土)と15日(日)に「NHKスペシャル シリーズ認知症革命」を、12月には介護に仕組みをどう維持していくかなどをテーマに放送する予定だ。今後ともぜひ視聴していただ

きたい。

- 10月18日(日)のNHKスペシャル アジア巨大遺跡 第2集「黄金の仏塔 祈りの都～ミャンマーバガン遺跡～」を見た。番組自体は興味深く、おもしろかった。番組の導入部分で、ヤンゴンから車で10時間かかって行き、いかにも秘境であるような印象を与えていたが、実際には飛行機で1時間のところだ。現実とかい離しているのではないか、秘境をクローズアップしようとしているのかという意図性を感じた。見ている人たちに誤解を与えるようなことは避けたほうがよいのではないかと思った。

(NHK側)

NHKスペシャル アジア巨大遺跡 第2集「黄金の仏塔 祈りの都～ミャンマーバガン遺跡～」について。バガンにはもともと王都があり、位置的にもそれほど奥地ではなく、秘境性を強調する意図はない。取材班がマイクロバス等で現地に行っており、その取材過程をナレーション化した。

- 9月21日(月)の「天使のアンゲル」(総合 後6:10～6:40)を見た。小学生に「いのちってどんなもの？」と聞いていたが、子どもの視点でもいのちは「いちばん大切なもの」というのは何となく想像がつくが、「神様が少しの間時間を貸してくれたのがいのち」、「必ず死と対面するもの」、「いのちを失ったら元に戻れないと言いながら人を傷つけることがある」と考えている小学生が紹介されていて、私たちが忘れてしまったものをうまく取り上げていて素晴らしい番組だと思った。

(NHK側)

「天使のアンゲル」は、総合テレビで親子で視聴できる番組として開発し、今回が3回目の放送だった。ちょうどお彼岸が放送日で、番組ではお墓参りで子どもたちが手を合わせ、何をお祈りするのかという身近なことから入った。亡くなったおじいちゃん、おばあちゃんに子どもたちが何をお願いしているのか、ふだん見えにくいことでも改めて聞いてみると見えてくる、そういった子どもながらに考える視点を今後とも視聴者にお伝えしていきたい。

- 10月8日(木)の「Dr. MITSUYA～世界初のエイズ治療薬を発見した男～」(総合 後10:00～10:49)を見た。満屋裕明さんはその世界で大変高名な方で、

興味を持って見た。エイズ治療薬の発見に至る経緯、苦労エピソード、満屋さんの人柄等が出ていて、大変よかったと思う。今までテレビの取材を断られていたということで「今回はディレクターの口車に乗せられた」と満屋さんがコメントしていたが、どういう風取材に応じてもらったのかを教えてほしい。一方で、放送のタイミングが気になった。ちょうどノーベル賞ウィークで、少なからぬ視聴者が今年のノーベル賞は満屋さんが受賞するのではと思ったかもしれないし、番組を見た人の中には今年とれなくて残念だったと思った人も多かったかもしれない。それがねらいだったのかはよく分からないが、タイミングはもう少しずらしてもよかったのかと思う。どのような考えで放送のタイミングを決めたのかを聞きたい。

(NHK側)

聞いているレベルでは満屋さんも、そろそろ自分で取り組まれてきたことを、お世話になった方も含め、どういうプロセスの中で成し遂げてきたのかを、改めてテレビで伝えてもよいと考えたタイミングだったようだ。長期間にわたっていろいろな人間が取材のアプローチをしてきた中で、たまたま満屋さんがよいと感じるタイミングだったということかと思う。担当したディレクターが信頼を勝ち得ることができるタイプの人材であったことは事実だ。放送のタイミングについてはいろいろあると思うが、制作した側としてはノーベル賞をとっていただきたいという期待があったのは本音だ。編成とも相談し、このタイミングで放送した。「満屋さんも受賞に値する」と伝えてもよいと思った。

○ 私も「Dr. MITSUYA～世界初のエイズ治療薬を発見した男～」を見たが、大変よい番組だった。エイズがなぜ感染するのが分からないときに研究に取り組み、家族を持ち、自分が取り組むべきかどうかと悩みながら、医者としての使命感で研究に取り組み、世界初のエイズ治療薬を見つけたとのことで、大変興味深かった。NIH（米国立衛生研究所）に所属していなければ、いろいろな人からの情報を得られず、開発できなかっただろうということで、研究者一人の思いだけではなく、いろいろな人との交流の中で研究が進むこともよく分かった。ノーベル賞を受賞していればタイムリーだったとは思いますが、受賞しなくとも大変よい番組を放送してくれたと思う。大変感銘を受けた。

○ 9月23日(水)の歴史秘話ヒストリア「きっと会える！大好きな人に～渋谷とハチ公 真実の物語～」を見た。私は「歴史秘話ヒストリア」が好きだが、動物が主

人公の番組は珍しいと思う。内容も泣けた。渋谷のハチ公にあのような物語があったとは知らなかった。珍しく家族で一緒に見て、自らの愛犬と比べ、あれこれと会話になった。もっと詳しく知りたくなり、番組を見たあと図書館でハチ公の文献を調べたほどだ。このように私の興味をかき立てるテレビの力とともに、昭和7年10月8日の「朝日新聞」の記事で忠犬が誕生したという事実から、まさに日本史を作ったメディアの力を「歴史秘話ヒストリア」から感じた。

- 10月5日(月)のクローズアップ現代「ニッポン女性は“やせすぎ”！？～“健康で美しい”そのコツは～」を見た。これまで何となく言われてきたことを科学的にきちんとした視点で伝えてくれていた。スペインのファッション界ではBMIの数値が18未満のモデルを起用しないという話を伝えていたが、そういうことを取り上げてもらえれば日本のファッション界も、何か対策を講じるきっかけになる。そういう視点ではかなりよかったと思う。
- 10月7日(水)のクローズアップ現代「生出演・大村智さんが語るノーベル賞受賞秘話」は受賞が決まった2日後の放送だったが、NHKだからこそその番組だった。大村さんを追いかけて取材した過去の映像が紹介され、これまで大村さんが組みまれてきたことをよく理解しているNHKのすごさが分かった。「クローズアップ現代」は大事な番組であり、かつてのように信頼される番組にするためには、ニュース性や忘れられていることを長期取材し放送するような視点も大事だが、日本中が注目していることを、いちばん熱い時期にある切り口で放送することも大事なことでないかと思う。

(NHK側)

大村さんについては1994年、番組が始まって2年ぐらいの「クローズアップ現代」で取り上げている。微生物から薬をつくるのは難しいことだが、大村さんは当時から熱心に取り組まれていてその世界では知られている方だ。こうした苦労も含め、今回番組化した。そういった展開もうまくできたと思う。ニュートリノの研究についても、「クローズアップ現代」で二度三度と取り上げている。番組内できちんと情報が蓄積されてきたことで、スピーディーに放送ができたと思う。

- 日本代表の大活躍でラグビーが注目されているとき、10月5日(月)のプロフェッショナル 仕事の流儀「アンコール エディ・ジョーンズ」を見たが、こういう時期にパッとアンコール放送できることがすごいと感じた。10月11日

(日)の為末大が読み解く！勝利へのセオリー「エディー・ジョーンズ ラグビー日本代表ヘッドコーチ」(BS1 後1:00~1:44)も再放送だったが、ヘッドコーチのジョーンズさんが「日本人とは何か」という哲学的なことを考えながら、どうやって日本人選手を指導してきたのかを掘り下げて伝えていて、日本代表が強くなった理由が分かった。ラグビーのワールドカップを生中継してもらうことも大事だが、その舞台裏で行われていたことが常に記録されていて、それをいちばん熱い時期に放送できるNHKはすごいと感じた。

- ラグビーが大好きで、「ラグビー ワールドカップ2015」をかじりついて見た。関連するNHKの放送はおおむね満足できるものだった。エディー・ジョーンズさんを中心にした強さの秘訣(けつ)についてのドキュメンタリータッチのフォロー番組もタイミングよく放送され、同時進行して見ることができ、ラグビーの一連の放送を意義深く見ることができた。ライブの試合の放送は「日本対南アフリカ」戦と「日本対アメリカ」戦がNHKで、「日本対スコットランド」と「日本対サモア」は日本テレビでライブ放送し、NHKは録画だった。NHKに全部ライブを放送してほしかった。

(NHK側)

放映権交渉は大会の何年前に行われている。日本テレビとお互いに話し合う中で放送計画が決まった。2019年のラグビーワールドカップの放映権は、これから交渉を始めるところだが、日本戦だけではなくほかの国の試合もあり、試合の間隔が空いて長期間に及ぶ。日本の成績がこれだけよいとほかの放送局も興味を持っていると思う。いろいろと検討していきたい。

- Eテレは「浦沢直樹の漫勉」もそうだが、すばらしい番組、NHKならではの番組が多いと思う。例えば「日曜美術館」、「100分de名著」、「ららら♪クラシック」など、学校現場で教養教育が年々おろそかにされる傾向がある中でそういった番組をしっかりと放送し続けることは、日本の文化を若い人たちに伝えるNHKならではのことだと思う。今後とも注力してほしいと思う。
- 「すくすく子育て」は、「母親から教師から」や「おかあさんの勉強室」から続く長寿番組だ。近年は特に子育て世代から、かつて以上によく見られていて、お母さんたちが集まる場や子育て支援の現場に行くとき必ず「すくすく子育て」のことが話題になる。5月9日(土)に「育児疲れ」を放送した際は大変大きな反響が寄せら

れ、子育てに奮闘しているお母さんたちのつらさにNHKがそこまで焦点を当ててくれたのかという声が番組にも寄せられたそうだ。子育て支援は国やいろいろな自治体でも取り組んでいるが、NHKが継続して番組を放送し続けていることは大変ありがたいことだと思う。

(NHK側)

若いお母さん方は情報過多の中で、実は逆に情報過疎になっている現状がある。お母さん方の一つの支えとなるような番組を今後も目指したい。スマートフォンが普及し、自分の子育ての様子を動画で撮って投稿し、それを基に悩みを共有することも広がっている。今後ともそういう視点で頑張っていきたい。

- 「SWITCHインタビュー 達人達(たち)」はいつも興味深い。最近では10月10日(土)の「畠山重篤×宮崎学」を見たが、自然と人間社会との関わり方について海から見た視点と山から見た視点が紹介された。1人ずつ聞いてもある程度のところまでは話が聞けると思うが、達人が聞くと一歩踏み込んだ見立てが出てきてよいと思う。達人をいかに人選するかが勝負どころかと思うが、どのように人選しているのかを聞きたい。

(NHK側)

「SWITCHインタビュー 達人達(たち)」の人選について、どんな組み合わせにするかによっておもしろさはまるで違う。いくつかの組み合わせをスタッフが考え、それを片方に当て、あの人と話してみたいとして決めることがある。こちらが想定した組み合わせと違い、この人ならば話したいということもある。実際に対談してみないと分からないところもあるが、これからも魅力的な人選に努力したい。

- 9月23日(水)のBS1スペシャル「戦争とプロパガンダ～アメリカの映像戦略～」(BS1 後 8:00～9:48:30)を見た。むくろの山や至近距離での銃撃戦など、戦争の悲惨な現実の映像に驚くばかりで、時を感じなかった。今までテレビでこのような壮絶な内容を見たことがない。最近では過激派組織IS＝イスラミックステートが動画で許し難い映像を配信しているが、それでも戦争の現実はそこから伺い知ることができる。アメリカのフィルムとはいえ、日本も国民に対し、映像をまさに兵器としてプロパガンダに利用してきたのは同じだと思う。敵性を誇張し、憎しみ

をエスカレートさせ、戦争に対する批判は消えていき、究極の殺りくをとことんまで行う、そんな過程が見える番組内容だった。膨大なフィルムの中には番組で紹介できないものも数多くあったのではないかと推察する。今回の番組のように日本にも深い反省点があったことを踏まえつつ、警鐘を鳴らし続けてほしいと思う。

(NHK側)

BS1スペシャル「戦争とプロパガンダ～アメリカの映像戦略～」は、8月7日(金)に放送したNHKスペシャル「憎しみはこうして激化した～戦争とプロパガンダ～」(総合 後10:00～10:49)の完全版だ。2年がかりでアメリカの海兵隊の映像を情報請求し、その中から出てきたものを紹介した。アメリカはさまざまな目的で映像を使っていた。長い時間が経過しているが、映像で戦争の記憶を確認することができてよかったという視聴者からの反響を多くいただいた。

- NHKスペシャル「憎しみはこうして激化した～戦争とプロパガンダ～」を見た。映像はすべて事実だが、事実をどのように放送するかで使われ方がずいぶん違う。それだけNHKの役割は重要だと感じた。
- 「イッピン」が好きで、よく見ている。地域の伝統的な工芸品、職人が一生懸命に作っているものを取り上げる番組だ。楽しい番組ではあるものの気になるのが、職人の技を科学的に解明し、さまざまな技を明らかにしすぎていることだ。それが職人にとってよいことなのかと疑問に感じる。大企業のように知財の専門家、法律の専門家がいて、隠すべきものは隠すというような対応ができない方々を相手にしており、競争力を失わせることになると気の毒だと思う。その辺りを配慮ができればと思う。

(NHK側)

職人の皆さんには番組を見て、改めて自分の仕事がかうだったのかと喜んでいただいている。職人芸の技などが分かったとしても、一朝一夕に模倣できるものではないだろうと思う。繊細な部分でここだけは伝えてほしくないと言っているところには触れずに伝えている。職人の皆さんの了解の中で放送している。今後とも気をつけて取材をしていきたい。

- さまつなこともかもしれないが、ニュースの原稿について不思議に思っていること

があるのでお尋ねしたい。9月27日(日)に安倍首相と韓国のパク・クネ大統領がニューヨークの国連本部で立ち話をしたというニュースがあった。その場でメモを取っていなかったので不正確な部分もあるかもしれないが、アナウンサーが「首脳会議を楽しみにしていると話しかけ、首脳会議での再会を楽しみにしているという考えを伝えました」と言っていた。「かくかくしかじかと述べ、かくかくしかじかであるとの考えを伝えた」という文体をときどき使っているような気がするが、何か理由があるのだろうか。引用部分とその後の「～であるとの考えを明らかにした」の部分が多少違う場合もあるが、まじめに聞いていると滑稽な感じがする。伝統のようなものがあるのか。

(NHK側)

伝統があるわけではない。「政治家のこの発言は実はこういうことを言っている」という意味であり、これは直接的には言っていないがそういうことを意味しているということだ。日ごろ政治家を取材している中で、「～と述べたが、こういう考え方を示したものだ」という原稿を出すことが政治部ではよくある。ただ、いま指摘いただいた「首脳会議を楽しみにしていると話しかけ、首脳会議での再会を楽しみにしているという考えを伝えました」という原稿は、仮にそう書いてあるとすると、書いてはいけない一つの代表例だと思う。「～と述べました」だけで切ると何となくもの足りないところがあり、つい付け加えてしまうという癖があると思う。そのものズバリで言っているものは「～と述べました」でよいと指導をしている。確かめて事実であれば注意したい。

- 先月、関東で大きな地震があった際に地震の報道があったが、結果的にそれほど大きな被害ではなかったにもかかわらず、30分、40分と報道が続いた。常総市で河川の氾濫が起きていたときで、エレベーターに40分閉じ込められた学生を追いかける映像まであり、本当に必要だったのかと思った。前にも番組審議会と同じようなコメントがあったが、その辺りは改善されていないのかという印象を受けた。

(NHK側)

9月12日(土)に調布市で震度5弱の地震が起き、マグニチュードは小さかったが、首都直下型の地震で、首都圏、東京都内の住宅密集地での震度5弱ということで緊急報道を行った。「被害のない地震で放送をいつまでやっているのか」

という指摘をときどき受けるが、被害がないと分かるまでには結構時間がかかる。阪神・淡路大震災の際も、地震が起こった当初は被害そのものがすぐに入ってこなかった。今回も正常にいろいろなものが動き、けが人もない、被害が大きくないことを確認するところまで放送した。実際の被害と放送時間の長さがなかなかマッチしない部分もあり、結果的に長すぎたのではないかという指摘を受けることもままあるが、その辺はバランスを取って適切な放送時間を考え、放送していきたい。常総市で鬼怒川が決壊し、水害が起こったのは9月10日(木)で、調布市で地震があった9月12日(土)は水害の被害を伝えている状況だった。緊急度で調布市の地震を割り込んで伝えた。

- 地震報道について、初動で放送に入るのはよく分かるが、被害がないということを40分も放送し続けるのはどうかと思う。その間に放送できない番組がたくさんあり、その辺のバランスも考えてほしい。

NHK編成局  
番組審議会事務局

## 平成27年9月NHK中央放送番組審議会

9月のNHK中央放送番組審議会は、14日(月)、NHK放送センターにおいて、13人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、平成27年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、平成28年度の番組改定とあわせて意見の交換を行った。続いて、NHKスペシャル「きのこ雲の下で何が起きていたのか」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、10月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	北城恪太郎 (日本アイ・ビー・エム (株) 相談役)
副委員長	小林いずみ (前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官)
委員	有森 裕子 (元マラソンランナー)
	大野 博人 (朝日新聞社役員待遇論説主幹)
	大日向雅美 (恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授)
	倉重 篤郎 (毎日新聞社論説室専門編集委員)
	佐野真理子 (主婦連合会参与)
	龍井 葉二 (連合総合生活開発研究所客員研究員)
	東儀 秀樹 (雅楽師)
	永田 紗戀 (書家/花咲く書道 Studio Saren. Nagata 主宰)
	増田 雅己 (読売新聞東京本社取締役論説委員長)
	谷口 肇 (前 全国農業協同組合中央会専務理事)
	和田 章 (東京工業大学名誉教授)

### (主な発言)

<平成27年度後半期の国内放送番組の編成について>

- 「サンダーバード ARE GO」は人気があるのか。視聴率はどのくらいなのか。

(NHK側)

夏休み期間中に夕方6時過ぎから放送し、リアルタイムの世帯視聴率が3～4%程度、録画再生の世帯視聴率が1～2%で、録画して視聴した人の割合が多かった。また、リアルタイムでご覧になったのは50代以上の方が昔を思い出してということで多かったが、若い世代にも見ていただけたらと思っているので、今後もプロモーションを行っていきたい。

- 私は50代で、「サンダーバード」をリアルタイムで視聴しており、大好きだった。大人になってからDVDの全集を手に入れて見たが、昔のものが大変新しく感じた。子どもにとってもそのようで、喜んで見ていた。新シリーズを飛びつくように録画して見たが、がっかりした。昔のシリーズは、まじめに取り組んでいるのが格好よく、イギリスらしい品のある番組で、ことばづかいも、調度品も大人がうなるような作品だった。新シリーズは今風の若者ことばが出てきて、品を落としてしまっているし、画像もCGで適当に処理されている感じだった。昔のシリーズも並行して放送し、新シリーズと見比べることでいろいろな考えも触発できるのではないか。ぜひ同時に昔のシリーズも放送してほしい。

(NHK側)

私も昔のシリーズを小さいころに見ていたが、自分の全く知らない世界で、そこからさらに想像力を働かせたものだ。そういった大変よい思い出の中で新しいシリーズを見ると、思ったほどでもないという印象を持たれる部分はあるかもしれない。今回は3Dで新たな映像に取り組んでいる。今のご意見も伺いながら放送していきたい。50年前の放送は夏の特集で何本かセレクションで放送した。そちらも見ていただいている。随時特集も考えたいと思う。

<NHKスペシャル「きのご雲の下で何が起きていたのか」

(総合 8月6日(木)放送) について>

- 忘れられない番組となった。私は戦争を知らない世代だが、証言を基にした写真の動画化により、声と色と空気をリアルに感じる事ができた。やけどがもたらす痛みを疑似体験したかのようで、苦しくもなった。また、写真が動き出したときには鳥肌が立った。全ての証言が70年前のことなのにセリフの再現も生々しく、そ

の記憶がその方たちをどれだけ苦しめてきたのかが伝わってきて、忘れられない、目に見えない苦しみまで感じる事ができた。赤ちゃんを抱いた女性の再現、死を待つ人々のうずくまる声、熱傷についての分析、それがどれだけ痛いものかという感覚、皮膚をぶら下げて歩く人々、モノクロの写真が赤く染まったときにその場にいるような、その奥に立つ煙の感じもリアルで、胸が締めつけられた。証言者のことばで心に残ったものが2つある。「私はどうして助かったのか、生きているのが申し訳ない。でも生かされている。こうやって伝えるためなのか」ということばと、被爆した体を見せながら「こういう体で70年頑張ってきたんだ」ということばだ。どちらのことばも大変胸が詰まった。生のことばがいずれ消えたとしても、この番組のように語り続けていかなければならないし、知らない私たちも子どもたちに伝えていかなければならないと強く思った。番組を視聴してからずっと胸がざわざわしているというか、心に残ったよい番組だったと思う。

- 番組として、作品として、とても優れたものだったと実感している。写真に写っていた方々の特定は番組の制作前からすでに出来ていたのだろうか。1枚の写真から写っている本人を特定すること自体が一つのドラマだと思ったので、その経過が分かることもっとよかった。また、あの写真は「ライフ」誌に載ったことがきっかけで広まり、今も展示されているという、それ自体がほんろうされたドラマを持っている。番組でも少し触れてはいたが、もう少し光を当ててもよかったという感想だ。全体の印象はよい番組だったと思う。

(NHK側)

丁寧に見ていただいてありがとうございました。写真に写っていた2人を特定するプロセスについて。坪井直さんと河内光子さんは私たちが取材を始める前から写真に写っていることも含めて自ら証言を伝える活動をされていて、広島では知られている方々だ。私たちが、2人を特定したわけではない。坪井さんが自分だと分かった経緯は、あの現場で坪井さんと出会っていた友人や坪井さんのご家族が、展示されている写真を見て気が付いたことなど複数の証言に裏づけられ、坪井さんが写っていたと証明されている形だ。河内さんは番組でも紹介していた通り、珍しいセーラー服の襟の形からだ。河内さん自身は、被爆したことで生まれてくる子どもに何か影響があるのではと言われていた当時、被爆者であることをずっと黙っていた時期があった。しかし、写真にお父さんが写っていることもあって家族にすすめられて名乗り出たそう

だ。名乗り出たことで一気に脚光を浴びたわけだが、本人が名乗り出たくなかった時間が長かったということも重い事実である。そのことを河内さんの同級生で名乗り出ていない方に託し、番組でも伝えた。

「ライフ」誌への掲載で広まったという写真のドラマだが、あの写真は戦後の混乱の中、闇市で売られていたそうだ。アメリカ兵向けなどに亡くなった人々の写真なども含め観光写真のように売られていたことがあったという。こういった話も裏づけが取れたら伝える方法はあったかもしれない。今回は被爆者の証言をなるべく多く伝えることを中心にしたかったので、確実に裏が取れなかった部分については伝えなかった。

- とても熱のこもった番組だと思った。1枚の写真の持つインパクトは大変大きいものだが、その写真に注目し、そこからできる限り意味を読み取ろうとする番組作りもよく、うまくできていると思った。番組の中で「もう少し早く公開されていれば核兵器の開発競争にもインパクトをもたらしたのでないか」というのは説得力のある内容だった。私も判断を迷うところだが、スチール写真を動かすことが、ドキュメントとしてよいのか悪いのか、その境目について考えさせられた。俳優を使ってフィクションとして再現ドラマを制作するというにはあると思う。実際に撮られた写真、たとえば赤ちゃんを抱いた女の子を動かす、亡くなりかけている人たちのうめき声を入れる、証言をもとにけが人を運ぶ軍のトラックに少女がすがりつく、兵隊が怒鳴って追い返し、少女が火の燃えさかるほうに走っていく、そういったことを再現ドラマではなく、写真の延長のように描いていた。映像技術が進むほど、事実とそこから先の想像との境目が難しくなるのかと思った。批判というわけではないが、問題意識としてどのように考え、判断したのかを聞かせてほしい。
- とてもよい番組だったと思う。たった2枚の写真を基に改めて核兵器の悲惨さ、すべてを奪う戦争の悲惨さを示した番組として心に残った。生存者の証言を基に構成され大変説得力があり、最先端の映像技術にも驚いた。兄弟を抱いたシーンや、そこにいた人々のことばも再現していて、戦争を経験していない私たちやもっと若い人たちにとって衝撃的だったのでないかと思う。被爆による皮膚障害についてもきちんと解説され、色もつけ、大変説得力があった。こういったよい番組を見ると欲が出てきてしまうものだが、写真の中で御幸橋の上にいる多くの人たちが若い学生だったとのことだったが、その学生たちがどうなったのかももう少し深掘りしてほしい。また、証言者のことばに「命の選別が行われていた」というのがあった

が、そのあたりももう少し掘り下げてほしかった。女の子がトラックに乗ろうとしたら女と子どもは乗せないと言われるシーンがあった。写真からではなく、証言から作った映像だったが、印象的で心に残った。一方で、何もないところからどこまで映像を作るのかは判断が難しいと思った。

(NHK側)

写真を動かすことが、まず道義的によいのかと悩んだ。あえてやらなければと思ったのは、戦争を知らない若い世代が多い中で、写真1枚だけよりも、証言する方がいる中で動かすことでより多くのことが伝わることにかけようと思い、そちらを選択した。企画をしていたころにアメリカのスティーブン・スピルバーグ監督、「アバター」という3D映画を作ったジェームズ・キャメロン監督が広島を映画化しようと言っているという話が耳に入ってきた。スピルバーグ監督は誠実に作るだろうとは思ったが、被爆者の監修に基づかない限り映像が独り歩きし、フィクションでありながらそれが実際の広島だとエンターテインメントのように表現されてしまうのではないか、その前に私たちがやらなければいけないことがあるという気がした。番組はハリウッドの映画に比べれば不完全な映像化だったかもしれないが、被爆者が実際にこうだったと言えるところまでは精いっぱい取り組もうと今回踏み切った。声についても証言者があの場で聞いたということば以外は入れていない。「お母さん」「水」「う～」といううめき声も証言者から裏づけを頂いたうえで、役者に再現してもらってつけた。実際の写真と作る映像との境目は私たちも悩んだ。特に女の子が爆心地に向かって走っていく場面は、坪井さんが「今も忘れられない。あのことを思い出すたびに泣けてしまう」とおっしゃる場面で、これは難しくても映像化しなければいけないという気がした。それ以外にも写真がない周辺の状態、川の中のご遺体のシーンなど、今証言してくれる方が「忘れたい」とおっしゃることを何とか映像化しようとした。オリジナルの写真を随所に入れることで写真と映像の違いが分かるように気をつけた。動いた映像を見た被

爆者がどうおっしゃるかに応じ、動きも変えようと決めていたが、坪井さんに見ていただいた際に、「写真の中の人たちは、あの瞬間確かにこうやって生きていた」ということばをもらった。完全ではないが、写真を動かして映像化することは必要だったと思えた。

当時橋の上にはいた若い学生たちのその後は分からなかった。事実として広島の当時の女学生や、行方不明者の両親などに取材することはできたと思うが、今回はそこまでやりきれなかった。写真の中に後ろ姿の丸坊主の男の子が写っているが、「これは自分の息子だ」と思い続けて亡くなった方がいる。その方の姪が、おばあさんから「あの子は自分の息子だ。あなたのおじさんだ」と言われ続けて、それを引き継ぎ今でも証拠を探しているという事実がある。そういう思いで写真を見ている方が大勢いると今回よく分かった。これから引き続き取材をしていかなければいけないこともたくさんあると思った。

- あの地獄の映像化というテーマだと思う。あの地獄についての証言や文学作品はあまたあるが、それらに触れて感じるどころがある。投下直後しばらくたった写真があれしかなかったところから、映像で何とかうまく再現できないかという試みは高い志として高く評価したい。再現された映像は、冷静に証言に即して作られており、ぎりぎりの線でよいのではないかと思った。どの範囲で止めるかは大変難しい判断だと思う。もう少し時間軸を回し1時間後や2時間後どうだったのかまで作ってみたくなる気持ちを抑え込んで、明確な証言に基づいて映像化したのだと思う。爆心地に向かって走り去る女の子の話は印象に残り、被爆者の証言を基にこの程度映像化することは問題ないと思った。

写真が2枚しか残っていないということだが、当時は写真技術を持っている人は少なく、あれだけの被災の後に撮影などできるはずがないと思う。中国新聞のカメラマンは、被災しながらも道具はあったのもっと撮影できたが、倫理観から踏みとどまったということだった。それ以外の写真は70年たっても出てこないのだから存在しなかったと思うが、手がかりはあの2枚の写真しかなく、なぜそれ以外の記録がないのか説明と取材がもう少しあればよかったと思う。

- インパクトがあり、心に残るものがたくさんあった。漫画「はだしのゲン」を全

巻読んだ覚えがあるが、写真2枚だけで漫画の絵が浮かぶほどだった。たった2枚の写真でも今の技術からいろいろなことが分かり、感情も含め表現されるものなのかと率直に驚いた。動かない写真からも証言者のことばから気持ちの激しさがとても伝わったと感じた。女の子が赤ちゃんを抱いているシーンは、写真がものを言うというよりは、証言者の「何度もこう言っていた」ということばとともに映像が流れたほうがよりリアルだったと感じた。車に女の子が乗せてもらえなかったシーンは、写真はなく、想像、証言から映像化したということだが、目撃していた坪井さんの「本当に忘れられない」という締めつけられるようなことばによって、作られた映像とは分かっているが大変リアルに伝わってきた。証言者の「なぜ生き残ったのだろう」ということばも、質問ではなく感情が表れていて、一人一人のことばが心に残った。戦争について想像もつかず、ゲームの戦闘シーンなどに引き込まれるような若い世代は、映像が動かないと興味を引かれないというところに時代による違いが出てきていると感じた。

- 写真に写り込んでいる人物、事象を追跡、分析し、その瞬間にきのこ雲の下、爆心地の近くで何が起きていたのかを浮かび上がらせる手法はよかったのではないかと思う。映像技術を使って写真を動かし、色を付けることはインパクトがあり効果的だったと思う。その映像も2回、3回繰り返し見ていると当然インパクトは薄れ、むしろ証言されている方の表情、ことばの中身が心に残る印象を持った。生存者の体験をどうやって後世に引き継いでいくのか、映像技術の威力を知るとともに、そういう課題について改めて考えさせられた番組だった。

(NHK側)

原爆投下3時間後の写真は2枚しかないが、松重美人カメラマンはその日ほかに3枚撮影している。原爆投下直後、自身も被爆し、爆心地を行ったり来たりし、市電が倒れているところでシャッターを押そうとしたが真っ黒焦げのご遺体が自分を見ているようで押せなかったと日記に残している。撮影しようと思った松重さんにとってもつらい状況だったことからあとは想像するしかないが、当時は軍隊の許可を得た人間しかカメラを持てなかった状況で、記録が残りづらかったことはあるかと思う。隠されている写真があれば探したいと思うが、今のところは投下3時間後の写真は2枚しかないということまでしかたどり着けなかった。

女の子が赤ちゃんを抱いている場面は、声までつけなくてもよいのではないかという意見を視聴者からも頂いている。

モーションキャプチャーという技術では、役者の体に動きを記録する端子をつけてもらい、スタジオで演じてもらうのだが、女の子役を演じた役者にあの場を目撃した河内さんに会いにってもらい、体験を聞き、動きや広島弁の「起きてや」というイントネーションも教えてもらった。その後河内さんに完成した映像を見ていただいたが、「これは違う。こんな声ではなかった」とおっしゃったら番組で取り上げるのをやめるつもりだったが、了解を頂いたので出すことにした。若い世代からの番組への反響も心配だったが、「怖かった、しかし、今まででいちばん衝撃的だった」という感想がモニター報告で多く寄せられた。また「画面に出ているものよりも体験した人はもっとすごいものを見ているに違いないと思うと、本人が出てきて証言してくれているのを聞いて、私たちも覚悟をして見ないといけないと思いました」という感想もいただいた。証言が届くことが番組のいちばん大事な点だったが、若い世代にも届いたとモニター報告から分かり、ありがたく思った。

- 家族や知人に見てもらおうと思うぐらいに感動し、深く記憶に残るものとなった。アメリカが検閲没収し、調査した証拠の中に壊滅地帯のいろいろな写真、データなどがあるのかと思うにつけ、それが何とか手に入れば白日の下にさらせるのと思う。また新たな「NHKスペシャル」を制作してほしい。プロデューサーの長い経験の中で制作された、しっかりした番組だったと感動した。
- 写真を動かすことについて、証言者が動かした映像を見て「この感じだった」と言っており、すべて問題ないと思う。受け取る人は自分の受け取りやすいものを心に刻めばよい。「私は写真がよい。動かす必要はない」という人は動かしているところは自分の中から取り払って、写真だけを胸に焼き付け、誰かに伝える。動いているためにリアルさや何かを感じ伝えるという人はそれをモチーフにすればよい。証言だけが心に残るというのもある。全部大正解なモチーフがパレットにちりばめられていたと思う。写真を動かしたとしても、うそではないという証言が取れているならばうそにはならないと思う。どこを切っても大正解な、伝えるべきドキュメントになっていたと思う。

(NHK側)

広島平和記念資料館は原爆投下から70年に合わせ、アメ

リカ公文書館にある広島の写真、映像を徹底的に調査し私たちもその情報を共有したが、当日の写真、映像は新たに見つからなかった。もしかしたらどこかにあるのかもしれないので、ずっと探し続けなければいけないと思う。「核兵器はなぜなくなるのか」、「世界で戦争はなぜ繰り返されているのか」という問いは解決されていないのが現実だと思う。広島局では営々とそういう番組を作り続けてきて、8月6日が終わると来年は何をしようかとすぐに企画を考えていて、今も71年に向けてスタッフが走り始めている状況だ。ある種の使命というか、特に広島局を経験した人間の使命をみんなが強く感じている。

- アメリカは資料の提供を拒んでいるのか。

(NHK側)

機密扱いとなっているものもあると思うが、公開された見られるものはほとんど調べた状況だそう。何が隠されているか分からないので、アメリカの判断で公開されていないものはあるかと思う。そしてそれがどこにあるのかも分からない状況だ。

- 見応えのあるよい番組だったと思う。70年という時間がたったからできた分析と映像だった。戦争が何だったのか、原爆がどういうインパクトを与えたのか、全く想像がつかないような若い世代に伝える意味では、新しい手法を使うことはよいと思う。今だから写真を動かすようなことが可能で、以前は出来なかったことだ。文字であろうが、映像であろうが表現という意味では同じだと思う。写真も手を加えようと思えばできるわけだが、どれだけ事実在即しているかの検証がきちんとできているかが問題だと思う。それがきちんと押さえられている限り、写真から映像を作成し、動かすことは大きな問題がないのではないかと考える。
- 「NHKスペシャル」では長崎の被爆関連の番組や、いろいろな番組が放送された。写真をただ見るよりも、そこに写っている人がそのときの状況を証言したインパクトは大きく、今回の番組を見て被爆した人の本当の痛み、皮膚がはがれる痛みを自らも感じた。単に映像があるだけではなく、映像に基づく証言があり、それをより分かりやすく示しており、インパクトのある番組だったと思う。なぜアメリカで7年間写真が公開されなかったのかについては、もう少し掘り下げてもらえたら

背景がよく分かったのかと思う。番組としてはよくできており、感心した。

(NHK側)

70年目にできた番組ということで映像技術もだが、証言する方が遺言という思いを込めて今回取材に応じて下さった気がする。坪井さんには20年以上お世話になったが、私も坪井さんの負われた傷は見たことがなかった。それを「今回は見せなければいけないと思った」と思うほど、坪井さんたち被爆者は今自分たちが体験したことが事実であることを伝えなければいけないという思いを持っている。70年だから終わるわけではなく、71年以降のほうが責任はもっと重く、私たちは強い使命感を持って伝えなければいけないと思う。

アメリカでの写真公開については情報がなく、アメリカの戦争証言者も高齢化が進んでおり情報が少ない。90歳の編集者が「ライフ」誌で唯一当時を知っている方だった。戦争の大事な話を伝えられるかどうかは世界的にもぎりぎりのところに来ていると感じた。今回、日本社会を担っている番組審議会委員の皆様番組を見ていただいて、直接感想を聞いたことは大変ありがたかった。頂いた助言をスタッフにも伝え、71年以降もしっかり番組を作り続けたいと思う。

<放送番組一般について>

- 安全保障関連法案をめぐる国民の関心が大変高く、NHKも国会中継を多く放送している。衆議院で法案採決がされた7月15日(水)の特別委員会をなぜ放送しなかったのか。何人かの友人から「なぜあの日は国会中継がなかったのか」という質問があった。審議はずっと続いており、すべての国会中継を放送できわけではないと思う。NHKはどう判断し、あの日は国会中継を放送しなかったのか。

(NHK側)

国会の委員会の中継は、国民的な関心の高い重要案件を扱う質疑であるかどうかに加え、政治的な公平性の観点から各会派が一致し、委員会の開催に合意することなども、私どもが中継する際の判断の原則としている。7月15日(水)の特別委員会は、各会派がそろって委員会の質疑に応じることが

決まったのが当日朝に開かれた委員会直前の理事会だった。委員会は午前9時から始まるが、理事会は8時40分から開催された。中継に向けた準備が間に合わないことが最も大きな理由だが、そうしたことも含め総合的に判断した。国会の中継を放送する場合、非常時の災害中継とは違って、中継用のカメラ、マイクを複数設置する、音声のチェック、映像のチェックをすることがどうしても必要だ。途中で映像、音声等が中断することは国会中継という性格上どうしても避けなければならない、最低でも2時間程度の準備時間を常に確保している。また、委員会質疑の途中からの中継は政治的な公平性を担保できないことから原則として行っていない。そういう次第で7月15日(水)の国会中継は放送を見送った。

- 7月15日(水)の国会中継をなぜ放送しなかったのかという説明はよく分かった。番組をどのような判断で放送しているかは質問がなければ毎回積極的には伝えていないと思う。今回の件についてはいろいろな人から聞かれており、なぜ放送しなかったのか伝えたほうが、わざと放送しなかったわけではないことが分かると思う。
- なぜ国会中継を放送しなかったのかについては、私も何度もいろいろな方から聞かれ、不思議だと思っていたが、説明を聞いて理由が分かった。一般にも情報提供をきちんすべきではないかと感じた。

(NHK側)

国会中継について補足したい。衆議院の委員会採決の締めくくり総括質疑は中継していないが、その後の採決そのものは正午過ぎから30分にわたって中継し採決部分は全部伝えている。安保法制で衆議院の委員会では116時間あまり審議を行っているが、そのうちおよそ43時間中継をしている。参議院の委員会では先ほど午後5時までの審議を入れると90時間あまり審議をしているが、そのうちのおよそ53時間中継している。できる限り与野党の意見を中継で聞いていただく姿勢で臨んでいる。

- 安保法案関連のデモが各地で行われているが、NHKでの取り上げ方について、ネット上で批判のこともたくさん出ている。NHKが中立的な放送を心がけるこ

とはよく承知しているが、これはどうだろうかと思った放送があった。最初に国会を取り巻くデモがあったときに、NHKは民主党の岡田克也代表、共産党の志位和夫委員長、野党の党首だけを映しており、党首の選挙演説のようにしか見えなかった。民放の番組を見ると、集まっている人たちを大勢映していた。党首が何を言っているのかはもちろん知りたいが、どういう人たちがどういう行動をしているのかも同時に知りたかった。ここ数日のニュースではNHKも取り上げているが、いちばん話題となったときのニュースの取り上げ方に若干の違和感を覚えた。

(NHK側)

安保法案のデモの取り上げ方について。大規模なデモが行われ、野党の党首それぞれがそろい踏みのような形で反対意見を述べた。それに合わせ、与党側の賛成の意見も伝えた。またデモの参加者の規模、声なども取り上げている。そのときではないが、今回のデモに一般の中高年の女性の方々が参加していることも企画で取り上げた。今回のデモは多様な人たちが参加している側面があることも事実で、そういうことも含め、きちんと取り上げている。一方で反対ばかり取り上げているという意見もある。きちんとバランスを取って多様な意見を伝えていく。

- デモの話ではバランスを取らなければいけないなど、いろいろな問題があると思うが、もう少し大きな視野で見てほしい。街頭に人が出ることは日本だけの問題ではなく、ここ数年世界中の民主主義国で起きていることだ。しばしば言われることだが、代表制民主主義、議会制民主主義が一種の挑戦を受けている時代になっている。誰も議会制民主主義を否定はしないが、何か欠けているものがあるからそういうことが起きている。そういう問題意識で作られた番組もあったのかもしれないが、単に賛成と反対でバランスを取るのではなく、デモとは何かということを考えさせる番組があるとよいと思う。
- 過去に対する検証と、それをどう捉えるのかという報道については大変力を入れていて、NHKはすばらしいと思う。安保法制について、現在をどう捉えるのかについては、NHKはより精力的に番組を作り、報道したほうが国民のためになるという印象を持っている。デモについてもバランスだけではなく、「なぜ」の部分をもう少し取り上げてほしい。60年安保とは全く違う状況だと思う。60年安保の分析を含め「NHKスペシャル」で取り上げてほしい。

(NHK側)

委員からいただいたご意見は、民主主義における民意の問題かと思う。週末に行った世論調査の結果も伝える。デモに参加する人たちについても、問題を直接取り上げたわけではないが、9月9日(水)のクローズアップ現代「私たちは“内向き”ですか? ~変わり始めた若者たち~」で声を上げる若者たちを取り上げた。「ニュース シブ5時」では女性たちがデモに集まっている背景、声も取り上げた。そうした問題はこれからもきちんと取り上げていく。

- 8月は戦後70年関連の番組が多く、総じて質のよい番組が多かったと思う。8月2日(日)のNHKスペシャル「密室の戦争～発掘・日本人捕虜の肉声～」、8月7日(金)のNHKスペシャル「憎しみはこうして激化した～戦争とプロパガンダ～」(総合 後10:00～10:49)などはなかなか見応えがあると思った。その中で疑問だったのは8月15日(土)のNHKスペシャル 戦後70年 ニッポンの肖像－戦後70年を越えて－「日本人は何ができるのか」(総合 後9:15～10:44)だ。期待して見たが、女優2人がアフリカとパリへ行くという番組だった。これからの日本ができることを考えるのにそういうところへ連れていく意味がどの程度あったのかと感じた。起用したねらい等を説明してほしい。

(NHK側)

NHKスペシャル 戦後70年 ニッポンの肖像－戦後70年を越えて－「日本人は何ができるのか」は異色作に見えるたかもしれない。戦後生まれの世代が日本の人口の8割以上となり、戦争を知らない世代が大半の中で、世界の現実を知って日本人に何ができるのか、新しい世代が主役となって考えるという企画だった。映画出演をきっかけにアフリカに興味を持った石原さとみさん、国際結婚で民族や人種を考えることになった寺島しのぶさんにリポーターとして出演してもらった。若い世代に人気がある女優を起用することでその世代に見てほしいという意図だ。結果としては30代男性を中心によく見ていただいた。この夏10本程度戦争関連番組を放送したが、どの番組を見るかは人それぞれで、できるだけ多くの人に戦争を知るきっかけにしてもらいたいという一つの試みだった。

- 8月15日(土)前後の「NHKスペシャル」では、8月8日(土)「特攻～なぜ拡大したのか～」(総合 後10:00～10:50)、8月13日(木)の「女たちの太平洋戦争～従軍看護婦 激戦地の記録～」(総合 後10:00～10:49)など、よい番組を放送していた。NHKでしか制作できない、歴史をさまざまに検証した番組を放送しており大変よかったと思う。これからもよい番組を制作してほしいと思う。
- 8.15関連の番組は録画し、大体視聴したつもりだが、よいものが多かったと思う。広島と沖縄とシベリア抑留の3つのテーマが何本もあったと思う。8月11日(火)のNHKスペシャル アニメドキュメント「あの日、僕らは戦場で～少年兵の告白～」(総合 後7:30～8:43)は、少年兵の存在はうすうす知られていたが、あれだけしっかり取材し、証言を取っていたのは初めて見た。証言の中には本当に言えないこと、70年間ずっと言えなかったことがぼろりと出ていた。一緒に徴兵された少年が体を壊し、動けなくなったため、上司に結果的に殺されていたという証言もあり、恐らく事実だと思う。極限的な状況に置かれたときに何が起きていたのかをよく取材していたと思う。
- 8月10日(月)のBS1スペシャル「戦場の真心チムグクル～沖縄を救った日系人～」(BS1 後9:00～10:49)を見た。沖縄戦で、沖縄出身の日系人の米軍兵が、沖縄の方言で洞窟(ガマ)の中にいる民間人に語りかけ、自らの身体を賭しながら、殺されるに違いないと思った人たちを村ごと救い出した話取材しており、沖縄戦の一面を鋭く描いたものだと思った。沖縄出身の芸人が米軍兵を演じ、その時代を語っていた。通常芸人はあまり好まないが、今回は大変さっぱりしていてよく、印象に残った。
- 8月1日(土)のザ・プレミアム「玉音放送を作った男たち」(BSプレミアム 後7:30～8:59)を感銘深く見た。8月15日になるといつも玉音放送が流れるが、裏にはどういうドラマがあったのかがよく分かった。いちばん中心で動いていたのがNHKの会長だったことも知り、NHKとして誇るべき歴史があったのだろうと思った。
- 夏は歴史を扱う番組が多いが、その中で興味深く見たのは8月27(木)の戦後70年 プレミアムヒストリー「知られざる陸軍終戦工作 あなたは“弱気の勇気”がもてますか？」(BSプレミアム 後8:00～8:59)だ。太平洋戦争の際、強気の陸軍の中で、終戦工作という“弱気”の主張を何度も繰り返していた松谷誠陸軍大佐を描くというなかなかおもしろい視点で、最後まで興味を持って見た。しかし、見終わった後に考えると、周囲の強気の中で1人だけ弱気を吐く勇気をテーマにするのであれば、松谷という変わった軍人の生い立ち、思想、信条などをもう少し伝えたほう

がよかったのではと思った。番組の中で視聴者に向かって「あなたがもしも大きな組織のトップだとしたらどうするか」と問いかけ、組織運営のインプリケーションを込めながら番組を進行していた。であれば、なぜ弱気の主張を貫けたのか、どういう信条を持っていたのか、どういうイデオロギーの人なのかを知りたかった。また、戦争を始めるよりも終えるほうが難しいとよく言われるが、そちらのテーマを持たせるのであればそれもおもしろいテーマだとは思ふ。そうであれば、松谷が仕えた杉山元陸軍大臣が早く戦争をやめようということに共感を示しつつ踏み切れなかったことなどを中心に描いたほうが、焦点はもう少し合ったのかと思う。ストーリーとしてはおもしろく、興味深く見たが、焦点が2つの間で揺れているような感じがした。

- 寺田寅彦が昭和9年に書いた「天災と国防」という随筆では、日本が国と国の間で折衝が難しくなっていており、きな臭くなっていると書く一方で、それは人間が起こすことでありもっと防災に力を入れるべきでないかと書いている。戦後70年に関連する番組を放送するならば、もっと積極的に日本は世界に向けて軍縮を進めるべきだとNHKから発してほしい。戦争はいけないと言いながら安倍首相が進めようとしていることを適当に見過ごしているのは昭和9年に寺田寅彦が感じたことと全く同じだ。関東大震災が1923年、終戦が1945年で、東日本大震災から4年半、皆が強い国を目指しているところが当時と大変似ている。戦後70年関連の番組は民放も含め、雰囲気として戦争はよくないということを伝えているが、国会で行われていることに対し、中国が軍事力を備えるから日本もそうするのだということではなく、メディアも軍縮を唱えるべきだと言ってほしい。もっとダイレクトに戦争はいけないと言ってほしい。
- 7月20日(月)のっぽん紀行「心つなげ 走る鍛冶屋」(総合 後6:10~6:35)を見た。地域で仕事を通じ、貢献している方がいることをつくづく感じた。“移動鍛冶屋”が、人々の玄関まで出向き、鋤(すき)や包丁などを修理し、見事によみがえらせ、地域に暮らす方々に感謝されている姿を見て、鍛冶屋の実力を感じたとともに、映像からその状況がよく伝わってきた。移動鍛冶屋の車から流れていた唱歌「村の鍛冶屋」は「しばしも止まらずに槌(つち)打つ響き」という出だしだが、私も小さいころによく歌っていた。村の鍛冶屋を通じ、働くことのすばらしさ、尊さを訴える構成だったと思う。大規模化や効率化で地域の暮らしが変容する中で「がんばれ」と思わずエールを送りたくなるような番組だった。
- 8月21日(金)のドキュメント72時間「ニューヨーク コインランドリー劇場」(総合 後10:00~10:43)を見た。「ドキュメント72時間」は普通の人の顔が

見られ、好きな番組だが、初めての海外ロケということで注目して見た。世界50か国以上の人々が住んでいるニューヨークのクイーンズ地域のコインランドリーは、日本ではありえないぐらいの大きさだった。コインランドリーに集まった人種や国籍が異なる人たちを上手にインタビューしていた。深刻な生活問題を抱えている方も、さらりと答えながらも前向きに生活していることがよく分かり、好意を持てる姿勢に感動した。同性愛者も不法移民者も、それぞれが生きる姿勢をきちんと答えていた。コインランドリーは子どもたちの遊び場で、大人もそこにいれば何となくほっとする場所で、日本では考えられないような状況だった。疑問に思ったのは、アメリカと日本の事情の違いだ。コインランドリーに車やタクシーで行くことや、アパート住まいで洗濯機がないなど、日本人から見ると特殊だと思う。その辺りの事情が分かるとよかったかと思う。また、福島原発事故について逆に質問をしている女性もいて、印象深かった。興味深く、よい番組にまともだったと思う。

- 9月3日(木)の「L I F E！宇宙人総理 みんなで投票 生放送スペシャル」(総合 後 10:00～10:48)は視聴者が投票するナマ番組だったが、宇宙人総理がもっと差をつけて勝つと思っていたが、そうではなかった。票数、男女差、年齢配分なども教えてくれるとよかった。「L I F E！～人生に捧げるコント～」は夜10時の番組だが、投票すると言っている子どももいるし、「イカ大王体操第2」など、子ども向けでおもしろいと思うが、なぜ夜10時なのかと思う。事情を教えてください。

(NHK側)

「L I F E！宇宙人総理 みんなで投票 生放送スペシャル」は実際に双方向の投票を行った。結末も両方を事前に収録していたものを用意し、「NHK紅白歌合戦」で蓄積した投票結果を瞬時に読み取る方法で行った。あまり投票数がなければ不格好なため票数を出さないことにしていたが、結果かなりの票が集まり、得票数を出せばよかったと現場は反省していた。次回に生かしたい。「L I F E！～人生に捧げるコント～」は子どもから大人まで、親子や家族で見てほしいと思って制作している。子どもだけに見てほしいということではないため、今は夜10時からの時間帯で放送している。

- 9月13日(日)のNEXT 未来のために「“一回生” つんく♂ 絶望からの再出発」(総合 後 1:05～1:33.30)は、がんで声帯を摘出したつんく♂さんのドキュメントだったが、声の出せないつんく♂さんがパソコン上でインタビューを受けていた。シャ乱Qが活躍していたころ、私は青春真ただ中で、つんく♂さんの奇抜

なメイクと衣装が印象的だった。子育てでEテレをいちばん見ていたころにこの歌はよいと思ったら作曲はつんくみさんだったり、いろいろと変化をされているプロデューサー、アーティストだと思った。番組を見て家族の絆がつんくみさんを支えているとよく分かった。ことばがなくても身振り手振りで音楽をプロデュースされていて、ずっと見てきたファンとして勇気を与えられた。「食道発声法で少し話せるようになった」が、「ロックな感じがしないからテレビでそれはやらない」とパソコン上で答えていて、それを見て胸が詰まる思いもした。またつんくみさんの状況を放送してもらえるとうれしい。

- 「みんなのうた」はどういう基準で歌を選んでいるのか、全く分からない。昔はもっと子どもに受けやすい新しい歌だけではなく、幅広く歌が紹介されていたと思う。日本で明治以降に歌い継がれ、教科書にも載っている叙情歌はメロディーがよく、歌詞、日本語の大変美しいことばが四季折々に合わせ、折り込められている。だんだんことばが乱れている中で価値がとても高い表現方法だと思う。残念ながら小学校の音楽の教科書からは叙情歌が削除されつつあり、単に子どもが受け入れやすいという理由でポップスがたくさん入っているらしい。公的機関の人に聞いてみたが、叙情歌はことばが難しく、子どもには意味がよく分からないというのが理由らしいが、愚かな判断だと思う。私の子どもころには分からない難しいことばでも歌い、あるとき両親や祖父母が意味を教えてくれたときにとっても感動し、日本語のすごさに気づくことにつながっていった。そういう家庭のコミュニケーションまで削除されていくのかと思うと大変寂しく、残念だ。正統な昔からの番組に対して、変に現代風にアレンジしたものは望んでいない。歌唱力のある人が淡々と叙情歌を歌うものを紹介してほしい。日本の四季の美しさ、日本のことばの美しさ、日本の心のあり方のようなことを歌から広めてもらいたい。

(NHK側)

「みんなのうた」の叙情歌については真摯（しんし）に受け止め、検討したい。

- 「ららら♪クラシック」が好きでよく見ている。7月18日(土)の「ユーモアで YOU MOREクラシック 埼玉県越谷市公開収録」(1)では「ウィリアム・テル」序曲の中の「スイス軍の行進」と民放の時代劇「暴れん坊将軍」のテーマ曲がとても近いなど、クラシックをおもしろく分析していて、見応えがある番組だった。
- 7月18日(土)のザ・プレミアム 鈴木亮平“世界ミステリー遺産”に挑む!「ア

ドリア海縦断・7日間の大冒険」(前編)(BSプレミアム 後 7:30~8:59)はとてもおもしろかった。どんなに海外旅行へ行ける時代になったといっても、ああいうところに足を踏み入れることはなかなかできない。さすがNHKの取材力だと思った。番組全体はすばらしかったが、大変神秘的なサンタマリア教会に鈴木さんが入っていき、教会の説明を聞く際に腕組みをしていたのが残念だった。海外で、カトリック教会の中にカメラが入ることはなかなか難しいことで、よくNHKが入り込んでくれたと思うが、腕組みをして聞くことはありえない。そこだけは残念だった。

NHK編成局  
番組審議会事務局

## 平成27年7月NHK中央放送番組審議会

7月のNHK中央放送番組審議会は、13日(月)、NHK放送センターにおいて、14人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」(27年度第1四半期・4～6月)について説明があった。続いて、めざせ!2020年のオリンピック「トランポリン元世界王者がジュニア王者にライバル宣言!」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、8月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	北城恪太郎 (日本アイ・ビー・エム(株)相談役)
副委員長	小林いずみ (前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官)
委員	秋池 玲子 (ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター)
	有森 裕子 (元マラソンランナー)
	大野 博人 (朝日新聞社役員待遇論説主幹)
	大日向雅美 (恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授)
	鎌田 實 (諏訪中央病院名誉院長)
	倉重 篤郎 (毎日新聞社論説室専門編集委員)
	佐野真理子 (主婦連合会参与)
	龍井 葉二 (連合総合生活開発研究所客員研究員)
	永田 紗戀 (書家/花咲く書道 Studio Saren. Nagata 主宰)
	増田 雅己 (読売新聞東京本社取締役論説委員長)
	谷口 肇 (全国農業協同組合中央会専務理事)
	和田 章 (東京工業大学名誉教授)

### (主な発言)

<経営計画における「達成状況の評価・管理」

(27年度第1四半期・4～6月)について>

- 26年度第4四半期の報告より少し落ち込んでいる大きな理由が2つあり、クローズアップ現代「追跡“出家詐欺”」に関する問題と、大河ドラマ「花燃ゆ」の

評価がさらに下がっていることだとの説明があった。「クローズアップ現代」についてはいろいろと対策を立て、解決策が出てきていると思う。「大河ドラマ」は留意する必要があるとのことだが、留意してそのあと具体的に何か対策を行うのか。

(NHK側)

7月12日(日)の花燃ゆ(28)「泣かない女」を、われわれは新しいスタートと位置づけている。視聴率も12.4%で、前の週よりも2%ほど上がった。いろいろと手直しをしながら制作している。

現場とも議論をしている。対策として、脚本執筆体制を見直し、「泣かない女」の回から新しい体制での放送となっている。ストーリーについては、主人公と男たちの幕末との間に隔たりがあるように見えていたが、これからは主人公が長州藩の奥御殿に入り、主体的に社会を変えることに参加するストーリーになっていく。「泣かない女」の回は、今までより多くの女性に視聴していただいた。9月には明治維新以降の話となり、舞台も変わって脚本をもう一段階強化する。これまでは主人公周辺の人たちが死んでいくという話が多かったが、これからは新しい時代を作る側の人間になっていくストーリーとなる。さらに強化できるのではないかと見越している。

- 「泣かない女」の放送は今までよりもテンポがよくなり、少しよくなった気がした。

世帯視聴率が去年4～6月と比べるとかなり下がっており、FIFAワールドカップサッカーが影響しているということだが、本当にFIFAワールドカップサッカーだけの影響だろうか。ここに来てやや低下傾向があるのだろうか。どのように分析しているのか。

(NHK側)

FIFAワールドカップサッカーの影響だけではなく、全般的に低下傾向にあるのではないかと思う。もともとテレビ離れは全体的に進んでおり、民放も含め、低下傾向にある。NHKの低下傾向はより大きいのではないかと懸念している。今年度の番組改定で土曜日の夜間に力を入れ、一定の成果が出ているが、来年度の番組編成では全体的な視聴率の低下傾

向に対し、抜本的な手を打つことが必要ではないかと考え、検討を進めている。

- NHKの番組なので視聴率だけを追うことはないと思うが、低下傾向は気になる。今後の番組編成等で考えていってほしい。特に「クローズアップ現代」に関してはNHKの看板番組に対する信頼を失ったことは大変大きかったと思う。単に1人の記者の問題ではなく、組織として何人かが関与したにもかかわらず、事実ではない映像を流してしまった影響は大きいと思う。
- インターネットサービスについて。前期との比較は26年度の第4四半期との比較だと思うが、いずれも減少しているように見える。第1四半期はそういう傾向が毎年あるということなのか。対策があるのならば教えてほしい。また、前期との比較があるものとなないものがあるが、比較ができたほうがいろいろと見えてくることがあるのではないかと思う。

(NHK側)

波の4指標については前期との比較が可能だ。毎年の傾向を見ても、第1四半期が減少する傾向はこれまでは見られず、「クローズアップ現代」の問題が全体のイメージを下降させることに何らかの影響があったのではないかと考えている。インターネットサービスの質的指標の値は、今年3月、昨年度の第4四半期に試行的に行ったものと比較している。そのほかの数値で、特に実数のみ記載してあるものについては、ウェブのログ解析を本格的に導入したのが今年4月からであり、比較する数値がないものだ。インターネットサービスについては何回か調査を繰り返し、どのような挙動をするのかデータを蓄積しながら考えたいと思う。

- 今回の4～6月で数値が下がっているところで気になったのは総合テレビの映画・アニメだ。26年4～6月が2.5、27年1～3月が3.5だが、今回は1.5に下がっている。その理由と総合テレビにおける映画・アニメの位置づけを教えてください。

(NHK側)

アニメは4月から編成が一部変更になった。昨年度は土曜日の午前中に「アニメ 団地ともお」を編成しており、土曜

日の午前中の情報系番組に続いて視聴していただいていた。今年度からは深夜に時間帯を変更し、国際放送と連動した「アニメ 英国一家、日本を食べる」を編成しており、テイストもかなり変わった。そういったことが、ジャンル別の数値の変化に影響を与えているのではないかと考えている。総合テレビでは映画をあまり編成することがないので、アニメ番組の編成の変化が今回は影響したと考えている。アニメ全体については、Eテレで子ども向けのアニメを土曜日、日曜日の夕方などに編成しており、昨年度に比べると好調だ。4波の中でアニメ番組をどのように編成するのかは中長期でさらに考えていきたい。

- 特記事項の満足度は今年度だけではなく、経年が分かるように每期ごとの数字を記載してほしい。

(NHK側)

次回からそのようにしたい。

くめぎせ！2020年のオリンピック「トランポリン元世界王者がジュニア王者にライバル宣言！」  
(総合 6月16日(火)放送) について>

- 大変感動し最後は涙も出て、すてきな番組だと思った。先輩選手へ憧れの気持ちを抱くことやスポーツで戦うことはすばらしいと純粋に思った。憧れている伊藤正樹選手が、突然目の前に現れたときの海野大透選手の「こんにちは」という声と表情がとてもかわいらしかった。トランポリンのことを全く知らずに視聴したが、スーパーや映像の工夫で大変分かりやすかった。特にトランポリンのルールや、足がすくむような海野選手から見える世界を知ることができて、大変な競技だと思った。また2人の選手の足元の違いが素人の私にも分かりやすく伝わってきた。伊藤選手がライバルに極意を伝授することにより自分を高めていると感じ、「おれを倒すなら早めに」と言っていた伊藤選手のことを好きになった。2020年の東京オリンピックでのトランポリン競技が楽しみになった。
- この番組は、ときどき何かをしながら視聴するが、見ているうちにいつも引き込まれてしまい、おもしろいと思っている。先輩のオリンピック選手が技を伝授するところも興味深いが、それ以上に若い選手の心の成長の物語がテイストとして加

わっているのがおもしろい、よい点だと思う。今回も父親であるコーチの指導にうまく応えられなかった海野選手について、「大人の成長の階段を上った」というMCの北川悠仁さんのひと言があった。7月7日(火)の「フェンシング女子 姉妹でメダルに挑む！」では、ライバルになってしまった高校生姉妹の間に生じた心のわだかまりを、メダリストの三宅諒さんが解きほぐしていく過程が見応えがありよかった。これからも力を入れていってほしいと思う。

- 私もときどき視聴している。心というか、人間として変わっていくところが興味深いと思うが、今回はその辺りのドラマが不十分だったかと思う。足の形を変えることで一瞬にして正しい位置に着地できるようになったところに焦点が当たっていたが、それだけならばライバルも含め、誰でもある水準まで到達できるのではないかと思った。たぶんそういうことではないと思うが、そう受け止められてしまうところがあった。心持ちやチャレンジ精神など、心のひだの部分を丁寧にクローズアップしてくれたら、よりよい番組になったのではないかと思う。

(NHK側)

制作チームの中で議論しているのは心のドラマの部分だ。ひたむきな若者の姿に共感するという親世代や10代の視聴者の声も多い。技術的な話に傾けすぎず、スポーツファン以外にも共感してもらえる番組作りを目指すために心のドラマをもっと描き込めないかと思っている。そのトライアルが「フェンシング女子 姉妹でメダルに挑む！」の回で、フェンシングという競技の説明や2人の課題は短く紹介し、オリンピックの三宅選手が、2人の心の距離を縮めることがオリンピックに出るために必要だというところに絞り込んで番組を制作した。視聴者からの反応もそれまでとは若干違い、そうした心のドラマを大切にされた方向性で番組を制作していきたいと思う。

- 私も結構楽しんで視聴することができ、よく出来た番組だと思ったが、出来すぎではないかという気も一方で感じた。才能豊かな少年が壁にぶち当たり、コーチである父親の言うこともなかなか聞けない中、サプライズのようにオリンピックが登場し、欠点を指摘する。そうすると海野選手の技も急に改善され、素直に言うことを聞き、心の葛藤も解消されるという、ストーリーとしてどこか一貫している感じがした。ドキュメンタリーでは、いろいろ予測できない方向に向かうことがあると思うが、何となくスポーツドラマ風にきれいに仕上がっている感じがあった。見て

楽しむ立場からすると少々ぜいたくな指摘かもしれないが、そういう感想を持った。

- 私もときどきこの番組を見る機会があるが、大変分かりやすい、結末が何となく予想できる番組だ。もともと能力の高い選手にオリンピックが指導を行えば、さらに能力が高まるだろうと想像がつくようなところはある。逆に、日が当たっていない選手に何かを気づかせ、そこから次にどうなるだろうというストーリーのほうがドキュメンタリー的だと思う。

伊藤選手が訪れた際に海野選手の表情が変わったのを見て、伊藤選手のような立場にいる人間に「自分たちの存在は後輩選手にとって大変大事で、自分たちも頑張らないといけない」という教えにもなると思った。一般の人からすると「能力のある人はそういう人に教えてもらえていい」とひねくれてしまう人もいるかもしれない。

技術がある程度高い選手には指導者がいる。伊藤選手が海野選手の欠点を見つけ指導してしまうと、それまで教えてきた指導者の立場がなくなってしまう危険性がある。この番組を継続していくのならば、もともとの指導者の引き出しを見せたうえで、それも考慮しながらオリンピックがその選手のどこの部分に接すればよいのか、番組でどういう役割をするのかをはっきりさせて制作していってくれば、これから先もずっと一緒にいる指導者の立場をつぶさなくてすむと思う。オリンピック出場経験者が1日だけ指導に行くということはよくあるが、1日しか行かないのにそこでいろいろなことを言うとその人のことを信じてしまい、残る指導者が困る現状はある。そういった面からも、もともとの指導者の関わり方、どういった指導をしてきたのかということ伝えてうえで、現場をサプライズで訪ねるオリンピックに何ができるのかという方向性も必要だと感じた。

(NHK側)

番組の本質的なところを見ていただいたと思う。ドキュメンタリーとはいうものの、応援歌にもしたいという思いもある。オリンピックの先輩からの本気の指導は短いときで3時間程度だが、才能のある若い選手は短時間でも急激に変わると感じている。そういう意味でこういうドキュメンタリーもありうると思う。気持ちよく見てもらうために、編集の過程で若い選手の葛藤やオリンピックでさえも伝えるということの難しさのような等身大の部分落とし、犠牲にしているかもしれない気が付いた。何とかそういうところうまく練り込み、リアルな姿を意識して制作したいと思った。

今の指導者とオリンピックの関係のところは、指導にあた

るオリンピックのほうが大変気を遣っている。そこは番組の設計上、申し訳ないと思っている。オリンピックやパラリンピックを目指す若いアスリートとその指導者は、緊張感の大変高い日々を送っているというのがディレクターたちから聞く実感だ。あまり番組の都合になってはいけないという部分の折り合いと、どういう指導であれば若い選手たちや指導にあたった方たちにとっても納得がいき身になるものなのか、もっと本気で精査しないと番組がリアルではなくなっていくリスクがあると感じていた。具体的にどうしていくのかという回答はないが、意識していきたいと思う。

- ドラマの部分とドキュメントの部分が両方あった。ドキュメントだけではなかなか見てくれないので、短い時間でドラマも作らないといけないのだろう。メイクドラマと事実と即した部分が必ずどこかでかち合うと思うが、今回はメイクドラマを意識しすぎた感じがした。オリンピックが若い選手と対面し、技術指導をすることは偶然ではなく、NHKの番組の作りとしてあらかじめある骨格だ。毎回筋立てを視聴者に知ってもらい、NHKが舞台をセットし、その中でのオリンピックと若い選手とのやりとりを見せるという形にしてはどうだろうか。事実として語らしめるほうがリアルに伝わる面もあると思う。

バランスが大切な番組だと感じた。メインMCとコメンテーターは素人の北川さんと玄人のオリンピックだ。素人に対し、玄人が自分の経験も踏まえた適切な解説があればよいと思うが、今回のケースはそれが見られなかった。スタジオゲストの人選も番組の価値を決める1つのポイントになるという印象だ。

- 大変おもしろかったが、初めから構想があって出会わせたいというのが見え見えで、なぜ海野選手なのか、なぜ伊藤選手なのかと思った。その世界ではそれぞれがきら星の存在であり、両者を会わせようというのがNHK側にあったのだろうと思うが、ずっとこういうスタイルでいくと一歩間違えるとやらせとも言われかねない。東京オリンピックまでずっと放送が続くとすると、海野選手というきら星で可能性のある人が1回挫折して、どのようにはい上がろうとしているのか、また海野選手自身が伊藤選手と会いたいということで会えるようにセッティングするなど、挫折した若者にNHKが協力することで、克服していく姿が見られる回がたまにあると、新鮮な感じで視聴できるのではないかという気がした。

- 伊藤選手のことばが素人にも分かりやすかった。一流の人は誰にでも分かることばで自分が成し遂げたことを伝えられ、すばらしいと思った。たとえば「底を感じ

る」ということばはトランポリンを体験したことの無い人間でもなるほどと感じるところがあった。一流の極めた人から学ぶことは大変おもしろいと思った。

「究極のワザは伝授されるのか」と繰り返しコメントされ、結果的に何かが伝授されたのだと思うが、その割に教える側である伊藤選手の、「教えようか」、「教えなくておこうか」という逡(しゅん)巡や葛藤する部分が映し出されていなかった。そこにあまりフォーカスするとほかの部分がおもしろいのもったいない気がした。

この番組を初めて見たが、多少不安に思うことがあった。たまたまNHKが伊藤選手を海野選手に会わせたことによって今後の競技の結果に影響を及ぼすことがあるのではないかと、海野選手が開眼し、伊藤選手がポジションを失うことなどにつながってしまうのではないかと思った。プロが見ればそういうことではないかもしれないが、出会いそのものに自然さがないとすると、競技の結果に影響を及ぼすことをしてしまってよいのだろうかと感じた。

#### (NHK側)

今年度後半はもちろん、来年度にこの番組がどうなるかはまだ決まっていない。実際に番組での指導の後により成績を収める選手もいるが、それがこの番組での指導のおかげということでもなく、これまでの指導との融合かと思う。オリンピック側で「私が指導に行ってもよいのか」という中には、指摘をいただいたような理由もある。番組の構造を今の舞台設定でよいのかという議論を先週からスタートさせたところだ。一番大きな宿題でもあり、考えていかないといけないと思う。答えがすぐには出ない根幹の部分なのでじっくり考えたいと思う。

- 2人の青年がとても爽やかで、楽しく見た。コーチがお父さんだからよいが、他人だったらどうなのだろうと思った。手の内を全部示してよいのだろうかと思う。競技は競争で、極意は秘密ではないかと思う。「底を感じる」というのが、競技者にとって極意だとしたら、それをテレビで放送してしまうことはどうなのだろうか。伊藤選手は教えたくなかったが、NHKがカメラを持って取材しているために教えざるをえないなどの問題がいろいろあったのではないかと感じた。NHKではなく、別の局だったと思うが、競歩の指導者の極意を追っていた番組があり、その監督独自の極意をテレビで放送していた。オリンピックの後だったらよいが、オリンピックの前に放送してほかの国の人がまねをしたらどうするのだろうかと思人ながらひやひやしたことがある。

- オリンピックを目指す先輩が後輩に一肌脱ごうという設定で、会話もスポーツマンらしく爽やかな番組というのが第一印象だ。出演する選手をどうやって選んだのかが気になった。たくさんの中高生たちがオリンピックを目指している中で、選ばれなかった人たちに与える影響と、海野選手がテレビに出たことで将来がどうなるのかというところが大変気になり、登場する選手を1人に絞ることがよいのかと疑問を感じた。ライバルとは何だろうと思った。現役の選手が2020年に一緒にオリンピックに出るかもしれない後輩にいろいろ教えることが実際にあるのだろうかと思った。元陸上選手の朝原宣治さんが時々おっしゃっていたことはアスリートの本音ではないかと思う。その辺りが作り込んだ番組という印象が残った。爽やかな部分があったにもかかわらず、もやもやしたものが残ってしまっていて残念だった。
  
- どうやって選手が選ばれるのかは、選ばれなかった人が圧倒的に多いため気になる。「めざせ！2020年のオリンピック」でないと駄目なのだろうか。15歳なのでリオデジャネイロオリンピックに出られないこともないと思う。「めざせ！オリンピック」でもよいのではないか。2020年と言われると選ばれた選手も違う負担を抱えるのでないかという懸念がある。この手の番組がいくつかあるが、必ず2020年が念頭に置かれていて、現場のアスリートは負担に思っていると聞いたことがある。

(NHK側)

若い選手、主人公をどう選ぶのかについて言えば、国内、国際大会で実績を残している選手で、例えば海野選手はジュニアの大会で成績を残しており、客観的に納得してもらえるように選んでいる。2020年でなければ駄目なのかという指摘があった。来年夏にリオデジャネイロオリンピックがあり、世代的には高校生の年代が代表候補であり、実際に代表合宿に呼ばれていることもある。番組の中で、2020年について強調しすぎなのか、それが本当に正しいのかについては、番組に求められるものと、実際に戦っているアスリートの思いをどういうところで着地させるかが大事だと思う。特に年が明けるとリオデジャネイロオリンピック・パラリンピックイヤーになるが、そういう中でどう取り組んでいくかだと思う。番組の中で2020年の東京オリンピックについて連呼するのをやめようというような議論も始めているが、東京オリンピックに向けて盛り上げたいという思いはある。リオデジャ

ネイロオリンピックで結果を出し、経験を積んでという思いを持つ若手選手がほとんどなので、そういう思いからずれないように向き合わないといけないと思う。

- 一般的に見ている人からすると、素朴に楽しんで見られる番組だと思う。一流の人の影響を受けることはいろいろな分野であると思う。スポーツだけではなく、書道でも、経営の話でも何でもあると思う。もしも松下幸之助に会ったら経営者はドキッとすると思うし、そうやって社会は元気を出し、動いているのであまり深刻に考えないでよいのではないかと思う。
- おもしろく番組を視聴した。短い時間なので、本人、当事者の心の葛藤のところまで描き出すのは難しいのではないかと思う。今回も海野選手がなかなかよい成績が出せない現状をどの程度深刻に考えているのかが分からなかったが、それが今どきの若い世代なのかと思った。海野選手がアスリートだったからというよりは、最近の若い世代はちょっとしたことでスイッチが入って真剣になるという変化がおもしろかった。海野選手が本気になったことは技術的な指導にあったのか、オリンピックから得た何か別のものでスイッチが入ったのかは番組を見ただけでは分からなかった。海野選手の変化をうまく捉えていたという意味でおもしろかった。アスリートだけに共通することではなく、若い世代が物事を真剣に捉える1つの例としておもしろい番組だったと思う。
- 率直に大変おもしろかった。現役の伊藤選手が出演したことのリスクはあると思う。伊藤選手の心の葛藤、的確なアドバイスはおもしろかったが、海野選手が本当に自分のライバルになるという設定がよいのかどうかだ。現役のオリンピックでなくても的確なアドバイスをできる人はおり、そのほうが無理はないかもしれないと思った。海野選手が父親のコーチの意見を聞かないということだったが、私も父親なので本当によく分かった。だいたい息子は父親の意見を聞かないもので、他人からの意見に意味があると思う。そういう意味でもおもしろかった。若い世代を取り上げ、番組を放送することは本人の大きな刺激になっていると思う。どの選手を選ぶかは大変難しいだろうが、NHKの見識で選べばそれでよいのではないかと思う。

(NHK側)

身が引き締まる思いだ。これまでディレクターとしてアテネや北京オリンピックの現場で取材し、番組を制作してきた。競技本番の前に、技や極意についてどの程度放送してよいのかについては、海外からも映像が見られる時代で、そういう

難しさもありながら、技や極意をとことん伝えたいという取材者としての思いもある。その中で心のドラマやリアルな若者の変化が視聴者の心に伝わるように工夫していきたくと思った。ありがとうございました。

#### <放送番組一般について>

- 6月21日(日)のNHKスペシャル 戦後70年ニッポンの肖像—世界の中で—「第3回“平和国家”の試練と模索」を見た。ひと言でいうとバランスの取れた内容だったと思うが、いくつか踏み込んでほしかった点もあった。日本は金だけ出して汗をかかないと批判を浴びたという湾岸戦争時のトラウマの位置づけが紹介されていた。実際にそう批判したアメリカのアーミテージ元 국무副長官も証言しており、それはそのとおりだったが、一方で国際社会とアメリカを日本はどう区別していたのか、そこはもう少し踏み込んでほしかった。私は当時現場におり、金だけ出して汗をかかないとアメリカから言われていたのは知っていたが、世界中がそう言っている印象は全くなかった。日本にとってアメリカとは何か、国際社会とは何かということにももう少し踏み込んでほしかった。ゲストの慶應義塾大学の中山俊宏教授は「イラク戦争について日本はまだちゃんとした検証をしていない。問題ではないか」という重要な指摘をしており、そのとおりだと思う。日本はブッシュ政権のイラクへの武力行使に対し、先頭に立って支持すると言った国で、戦闘が終了した後とはいえ、自衛隊も派遣した。戦争に積極的であれ、消極的であれ、間接的であれ、直接的であれ、コミットしたことはどういうことだったのか、日本は公式な検証をしていない。中山教授から紹介があったが、イギリスではブレア氏が呼び出され、問いただされているが、日本ではない。イラク戦争は戦闘が終わったとはいえ、その後10万人以上の市民が命を落としている戦争で、今問題になっている過激派組織ISもイラク戦争による混乱が源の1つとなって出てきた現象だ。大量破壊兵器が実際に見つけられないまま、大義名分をなくした戦争を支持したことがどういうことだったのかは、冷戦後の日本の外交を考えるうえで重要な意味を持つと思う。それを検証していないことをどう考えればよいのか、もう少し踏み込んでほしかった。また、ラムズフェルド元アメリカ国防長官がカメラの前に出てきたことは大変意味があることで驚いた。しかし、あまりにもコメントが短く、イラクへの攻撃はよかったということに終始し、それで終わってしまっていた。深刻な災いをもたらした戦争の責任者がカメラの前に出てきており、もっとしっかり追及してもよかったのではないかと思う。アメリカまで行き取材しており、きちんとインタビューを行っているのではないかと思う。インタビューした内容があり、ほかで活

用できるならばそうしてほしい。番組全体を見て、深い取材をしているという印象を持ったし、視点もバランスが取れていて、目配りも利いていたと思う。1回ではなく、2回に分けてもらえればもっと有意義な内容になったという気がした。

(NHK側)

日本が金だけを出したという批判はアメリカから見たものなのか、国際社会全体から見たものなのかについて、番組ではクウェート政府が世界30か国に感謝を示し、その中に日本が入っていなかったことが国際社会全体がそう受け止めたという印象付けたと紹介した。当時の印象としてはそういうことだったのでないかというのがいろいろな識者に伺ったうえでの骨子だった。イラク戦争についての総括がもう少しあればということについて、中山教授が番組の中で、アメリカでも間違っていたのでないかという声があり、イギリスではブレア氏がある意味責任をとった形になっていることを紹介し、日本ではきちんと捉え直していないということがあるのではないかと、その空白が気になると話している。そのコメントでそういうニュアンスは出せているのではないかと思う。ラムズフェルド氏のインタビューについては、短い印象を受けたのかもしれないが、ほかの人よりは長めに使っている。あの戦争がよかったと言い切ったというよりは、それ以外の国、フランスとドイツは反対したが賛成した国も多かった、国連の決議があればより望ましかったが、それよりもイラクが問題だったという当時の国防総省の見解をそれなりに述べたという意味で、インタビューの価値はあったと考えている。

- 今の説明では、NHKがやるべき日本の検証は企画段階で入っていなかったということか。中山教授のコメントがあるかどうかはスタジオを収録しないと分からないわけで、コメントしなかったかもしれない。NHKはあそこまで時間をかけ、手間をかけ、鋭い視点でほかの国を取材したものの、肝心の日本については企画段階で落ちていたという理解でよいのか。

(NHK側)

そういうわけではない。今回は20年全体を検証しており、イラク戦争について、どう外交として対応したかがテーマだった。イラク戦争のときにどういうアメリカの要求を受け、

どういう反応をしたかがテーマだ。湾岸戦争以降のいろいろな出来事の検証は、外交としてどうかというよりも現代史全体としてどうかというジャンルに入ると思う。

- それこそNHKに取り上げてほしい、NHKがやるべきことだと思う。
- 7月12日(日)のNHKスペシャル「腰痛・治療革命～見えてきた痛みのメカニズム～」を見た。慢性の腰痛の原因が脳にある場合もあり、認知行動療法が紹介されていて興味深かった。将来は保険の適用になる形に進めばよいと思った。
- 「廃炉への道 全記録」シリーズは、これまで3本放送しているが、力の入っている番組だ。これから日本国として考えなければいけない大きなテーマだ。チェルノブイリとスリーマイルの過去の検証データ、映像をNHKが全部入手したというところは、いつものNHKらしく、頼もしいと思った。映像を入手し各国を取材し、手間暇をかけて番組を制作するからには、これから40年、50年かかるという廃炉作業をフォローアップしていく覚悟とスケジュール感をもう少し番組のなかで出したほうがよかった気はする。これからも期待している。
- 6月28日(日)の「NHKとおきサンデー」で「NHK for School 1」を紹介していた。小中高校の学校の先生向けに教材となるコンテンツを無料で提供するそうで、これはとても助かると思った。小中高校生だけでなく、大学生も映像の教材が必要で、DVDは大変高価だが、NHKの豊富なコンテンツを学校現場が自由に使えるようにしているのはNHKならではのと思う。
- 「連続テレビ小説」が大好きで、BSプレミアムで視聴している。今は「まれ」と再放送の「あまちゃん」の両方を楽しんでいるが、2つのテイストが大変似ている。若い女の子で、地方が舞台で、地方の人たちがいつも集まってわいわい言っている。それ自体はよいのだが、2つを続けて見るとそのよさが見えてこない。もう少し静かな「ごちそうさん」や「カーネーション」と「まれ」の組み合わせだったらよいかもかもしれない。今後は組み合わせも考えてもらえたらと思う。
- 7月2日(木)のオトナヘノベル 10代の体験をドラマに「身近な人がストーリー そのとき どうする?」を見た。木曜日の午後7時25分からの短い番組で、夕飯の後に子どもと見ることが多い。10代のリアルな体験が小説とドラマになるという番組で、SNS時代ならではの信じられない現実がドラマになっており見ていて怖くなった。リベンジポルノということばを初めて知り、子どもを持つ親とし

ても、1人の人間としても恐怖を感じた。番組後半でLINEの履歴が証拠になるなど、10代に向けたアドバイスがしっかり伝えられていたのでホッとする場面もあった。後日、気になったので番組のホームページを見たところ、「かきこみ」に「ゲームがやめられない」「学校でセクハラがある」など10代のリアルな書き込みがいろいろ載っていた。「かきこみ」を見て、「私だけではない」と思えることで救われる子どもたちもたくさんいるのだろうと思った。親にも話せずテレビを見て、番組ホームページに書き込んでいるとすると、何かが起こったときの対策や対処法、1人で考え込まないでほしいというようなことがホームページ上に大きく書いてあると安心できると思った。

○ 7月6日(月)のハートネットTV ブレイクスルー File.34「キムさんの日本語教室」を見た。耳が不自由な外国の方が日本で生活する出発点である日本語をどうやって学ぶかという興味深い番組だった。国際化が進む中でこれまで光が当たって来なかったろうあ者に対し、日本の取り組みがほとんどできていないことに驚いた。いろいろな課題を突きつけたよい番組だったと思う。紹介されたろうあ者は皆さん意欲的で、日本で生活することに前向きな姿勢を持っており、手話を通し日本語を学ぼうとする意欲、努力を感じた。ろうあ者に対しては日本人対象の教室しか日本にはなく、外国人のろうあ者が最近増え、これからの大きなテーマになるのでないかと感じた。日本の国際化が進む中、外国の方も日本語の手話を学ぶ機会が必要だとよく分かった。私たちも努力し、活動しないといけないと思った。自治体では外国語を話せる方のボランティアを募り、いろいろと支援しているが、手話までは行き着いていない。「ハートネットTV」でいろいろな問題、課題をさらに提起して欲しい。

○ 7月6日(月)のオイコノミア「それっておトク？飲み屋選びの経済学」を見た。お得なお酒の選び方、お得感でお酒を飲んでもらうお店の紹介などをしていたが、飲み放題のお店でもお酒のお得感は一定の条件によって違うということなど、なるほどと思った。同じワインを試飲し、価格の違いを聞くと高いほうがおいしいと感じる、消費者はそういうところがあるとよく分かった。大変おもしろい番組だったが、経済学で解説しなくてもよいのではないかと思った。普通にゲストの大悟さんが話しているほうが分かりやすく、経済学として大学の先生がいろいろ説明されているほうがかえって分かりづらかった。すべてを経済学で占める必要はないのではないかと思った。また、お酒の話が出るときにはお酒についてのリスクをひと言入れてほしい。

(NHK側)

「オイコノミア」は経済を使ってややこしく話をするのが番組の仕掛けになっている。経済はややこしいと思っていただくことも含め、経済から物事を見てみるというコンセプトで取り組んでいる。お酒のリスクについては飲み過ぎに気をつけましょうぐらいしか言えないかもしれないが、そういうことも必要かと思う。

- テーマの設定の仕方だと思う。飲み屋での話を経済的に話す必要があるのかということだ。もっとほかにもテーマがあるでないか。お酒のリスクについては、飲み過ぎに注意しましょうだけではなく、妊婦は飲んではいけないなど、もう少し真剣な部分でのお酒のリスクにも触れてもらえるとありがたい。

(NHK側)

「オイコノミア」では、経済的に解説しやすいものだけを取り上げると又吉さんに出演してもらっている意味もあまりなくなるので、ときどき挑戦的なテーマを取り上げている。今回の「それっておトク？飲み屋選びの経済学」は、チャレンジングな内容の一つだ。温かい目で見ていただけるとありがたい。

- 6月20日(土)のBS1スペシャル「僕ら難民キャンプが撮影所～過激派組織ISに追われた子どもたち、映画を撮る～」(BS1 後7:00～8:49)を見た。映画監督のバーマン・ゴバディさんなどに映画作りを教わった難民キャンプに暮らす子どもたちが映画を作る様子と、その作品を紹介していた。どんなニュースでも伝えられない、ISに迫害された子どもたちだからこそ伝えられる悲惨な状況や、性的な暴力を受けた10歳の妹の話、家族が殺されたことなどを、切々と子どもたち自身の手で拾い上げていた。それらをまとめてよく放送できたと思う。子どもたちの作品が映画になって世界中で放送されると、ここ数年で子どもたちがどんな被害に遭っていたかが見えてくる。芸術的な面などいろいろな意味で子どもたちに刺激を与えることは大変大事なことだ。将来は銃ではなく、カメラを持つ子どもたちが出てくる可能性があり、それをテレビが応援しているというのは素晴らしいことだと思う。ISのひどさを伝えることも大事だが、ISに負けないテレビならではの応援の仕方があるような感じがした。2時間程度のドキュメンタリーだったが、内容の充実した番組だった。短く30分程度にエッセンスをまとめて、総合テレビなどで伝えられたらもっと世界を変えていける番組になるのではないかと感じた。

- 私もBS1スペシャル「僕ら難民キャンプが撮影所～過激派組織ISに追われた子どもたち、映画を撮る～」を見たが同感で、大変感動した。
- 各国の報道を紹介している「キャッチ！世界の視点」は大変参考になる。ポイントを絞った解説をしており、ほかの番組よりも優れているのではないかと感ぜるぐらいだ。けさの番組の中でも、神戸児童連続殺傷事件を起こした元少年Aの手記について、アメリカの「サムの息子法」との比較をしており、大変参考になった。
- 7月8日(水)のアナザーストーリーズ 運命の分岐点「あさま山荘事件 立てこもり10日間の真相」を見たが、なかなかドキドキする番組だった。当時山荘に立てこもった犯人が何十年ぶりにインタビューに応じていたが、初めて見た。番組のなかで、いくつかの疑問について答えを出していた。犯人たちは捕まりたがっていたのではないかという話や鉄球のクレーン車を運転した兄弟2人のことなど、ドキュメンタリーとして興味深かった。ナビゲーターがところどころで解説するが、率直にいうとうるさかった。ナビゲーター役の方には、その人自身のすばらしさはあると思うが、語り部としてそれがうまくはまっていない。最近、若い人たちに見てもらい入り口作りとしてそういう人たちを採用するケースが多い気がするが、その必要はないのではないと思う。NHKにはベテランアナウンサーが大勢おり、上手に使って説得力のある展開にしたらよいのではないと思う。
- 私はどちらかというとラジオ派なのでラジオをいつもつけている。時には聞き流し、時には真剣に聴いている。NHKのラジオは9割がすばらしいと評価しているが、最近はともするとうるさく、騒がしくて消さざるを得ない番組がある。テレビはボリュームを下げ、画を楽しむことができるが、ラジオで騒がれると逃げ場がない。最近も、3人ぐらいの出演者が内輪ネタで大変盛り上がっていて、民放のラジオかと思ったらNHKだった。いつもNHKらしく静かでもなくてもよいのだが、耳から入ってくるものなので、滑舌、音の問題はもう一度考えていただければありがたい。
- 新国立競技場の建設について毎日のように民間放送、新聞、スポーツ新聞などでやめたほうがよいと報道されている。その気持ちも分からないではないが、ラグビーワールドカップ、オリンピック・パラリンピックが始まれば、張り切って頑張るのは放送局やスポーツ新聞だ。あんなものを造ってどうするのかというのをいつまで報道するのかと思う。そういう報道をしてはいけないと言うつもりはないが、せっかく造ろうと思うものをみんなで批判するのはよくないと思う。材料の強さが変わらない限り大きな構造物を造るのは大変なことで、2,520億円が安いと言うつ

もりもないが、困っているものをみんなで批判することはやめたほうがよいと思う。

(NHK側)

新国立競技場は当初より 900 億円多い 2,520 億円という建設費になり、コスト面での精査が足りなかったのではないか、税負担、国民の負担が出てくるのではないか、東京都の負担が増えるのではないかという指摘が出てきた。そういう問題点があるということで、ニュースで取り上げている。2019 年のラグビーワールドカップや 2020 年の東京オリンピックに間に合わせないといけないという命題もあり、今から設計をやり直したのでは間に合わないということも事実としてある。その辺りはきちんとバランスを取ってニュースとして伝えていく。

- よろしくお願ひしたい。昨日の民放の番組で 10 代の女性が「そんなに困っているなら 1 万円を出します。友達が 5 人いるから 6 万円出します」と言っていた。日本は人口 1 億 2,000 万人で、もし全員が 1 万円ずつ出したら 1 兆円になる。実際に寄付したいという人も多いそうだ。新国立競技場の建設をつぶそうというスタンスでいいほうがよいということだ。
- 海外出張でドイツ、イスラエル、トルコを訪れたが、NHKワールドTVをドイツで見ることができた。NHKワールドではいろいろな番組を放送していると思うが、私が見た番組では日本がいかにもエキゾチックで、食事や作法が素晴らしいものであるということを延々と伝えていた。FIFA女子ワールドカップサッカーが開催されている時期で、その結果を知りたくて日本のニュースを探したが、たどり着くことができなかった。

NHK編成局  
番組審議会事務局

## 平成27年6月NHK中央放送番組審議会

6月のNHK中央放送番組審議会は、15日(月)、NHK放送センターにおいて、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「クローズアップ現代」報道に関する調査報告を受けた再発防止策について説明があり議事に入った。続いて、「アナザーストーリーズ 運命の分岐点 「アイルトン・セナ事故死 不屈のレーサー 最期の真実」」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、7月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	北城恪太郎 (日本アイ・ビー・エム (株) 相談役)
副委員長	小林いずみ (前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官)
委員	有森 裕子 (元マラソンランナー)
	大野 博人 (朝日新聞社役員待遇論説主幹)
	大日向雅美 (恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授)
	倉重 篤郎 (毎日新聞社論説室専門編集委員)
	佐野真理子 (主婦連合会参与)
	龍井 葉二 (連合総合生活開発研究所客員研究員)
	永田 紗戀 (書家/花咲く書道 Studio Saren. Nagata 主宰)
	谷口 肇 (全国農業協同組合中央会専務理事)
	和田 章 (東京工業大学名誉教授)

### (主な発言)

<アナザーストーリーズ 運命の分岐点

「アイルトン・セナ事故死 不屈のレーサー 最期の真実」

(BSプレミアム 5月13日(水)放送) について>

- 久しぶりに感動した番組だった。1人の生き方が、次の人たちに与える影響の強さに感動した。ルーベンス・バリチェロさんがお父さんに「もっと気を楽にしてがんばれ」と言われてから活躍した話など、今の日本の若者たちで元気をなくした人などを勇気づける内容だと思った。一番感動したのはブラジルのサッカーチームが

ワールドカップサッカーで優勝したことだ。1人の生き方、ちょっとした一つのことなどが次の人たちの人生に与える影響の強さがあると思ったよい番組だった。

○ セナが亡くなったときに私は中学生ぐらいで、名前を知っているぐらいだった。番組を見て、1人の人間の偉大さを深く感じ、映画のような番組だと思った。セナがブラジル国民の希望だったこともこの番組で知った。残された古い写真にF1の音が重なるシーンがあったが、かえって想像力をかき立てられて、涙が出るほど感動した。また、現代のブラジルの子どもたちにセナの思いが受け継がれていることが最後に紹介され、心がじんわりと温かくなった。見終わった後に私も頑張ろうと思えるすばらしい番組だった。

○ みんなが知っていることについてもう一つのストーリーをいくつか取り出していくという手法は興味深い。今回は4つのアナザーストーリーで、多面的に物事を見せてくれる意味ではよい番組だと思ったが、気になるところも2つあった。1つは今なぜアイルトン・セナなのかだ。F1の世界にほとんど関心がない人たちにとって、セナを振り返ることにどういう意義があるのかがあまり伝わってこなかった。もう1つは、21年前の出来事について、今回何をニュースとして伝えようとしていたかだ。これまでずっと黙っていた女性広報官が、最近になって語り始めたというところが今回の最大のニュースかと思って見ていたが、セナの死の謎について裁判で出た結果以上の話は出てこなかった印象だ。後輩レーサーがセナを追いかけ、後継者として成長したという話、日本人のジャーナリストがセナとの関係において一流の世界のジャーナリストになったという話は、人間ストーリーとしてはよかったが、今回新しく出てきた話ではないという印象を受けた。ワールドカップサッカーとの関連の話も、21年前にも話題になったことではないかと思った。セナが偉大なブラジルのシンボルだったことは分かったが、新しい話題がなかったという印象だった。総じてよかったと思うが、そういう印象を抱いた。

(NHK側)

新しさがないという部分については確かにそのとおりだ。ネタによって本当に新しい事実が見つかる場合もあるし、そうでない場合もある。セナのファンにとって、事故の真相はいまだに闇の中に葬り去られており、そこに新しい事実を浮かび上がらせてくれるのかという期待を持ってこの番組を見た方は、新しいことが出て来なかったことにはがっかりされたようだ。女性広報官がテレビカメラの前で話すのは初めてのことだった。写真、証言、音などを組み合わせることによっ

て、裁判記録からだけではない当時のセナや、女性広報官、後輩のバリチェロたちがどんな思いで事故の瞬間を見たのかという臨場感を、ある程度浮かび上がらせることができたと思う。今なぜセナなのかというご指摘があったが、セナのよ  
うな偉大な人が残したことばや生き方は時代を超え、伝えられていく、時代を超えた普遍的なものだということを見ている人たちに気づいていただければありがたいと思っている。

- 番組の最後まで興味深く視聴することはできたが、気になるところがいくつかあった。「アナザーストーリーズ」と複数形でよいのだろうか。「ジ・アナザーストーリー」ではないかと思った。セナが事故を起こした大会でルール変更が行われていなかったらというような反実仮想のストーリーが聞けるのかと思ったが、そうではなく、セナに関係した人たちのストーリーだったので「あれ？」という気がした。ドキュメントか、エンターテインメントか、どちらなのかという点も気になった。もしもドキュメントならばルールの変更がどれぐらい意味を持ったのか、もう少し知りたかった。ほかのレーサーの事故が心理的な動揺を与えたという説明があったが、ブラジル人の若い同僚の事故があったものの軽傷で、セナのレースの前に冗談も交わっていて、不安・動揺よりも安心・安ど感のほうが勝っていたのではないかと思った。もしもそうではなく、動揺していたというのであれば、その動揺は  
どういうところに表れたのかということが知りたくなった。

ほかの人たちのストーリーはそれぞれおもしろいと思ったが、セナに関連付けすぎている気がした。広報官はセナのすぐそばにいた人だからいろいろな影響を受けたと思うが、日本人ジャーナリストはセナが死んで植木職人に転職したというが、「それだけで？」という感じがし、もう少し裏の事情が知りたかった。サッカーのナショナルチームの優勝もセナだけで説明するのは無理がある気もした。ストーリーがやや劇画的な印象で、エンターテインメントと割り切れればそれもあるとは思  
うが、その辺りは少し戸惑いを感じた。

(NHK側)

劇画的に見えるという点は、ドキュメンタリー性とエンターテインメント性の折り合いの付け方、バランスの取り方  
だと思う。毎回大変悩んでおり、試行錯誤の連続だ。

- 1人の死が多くの人その後の人生に影響を与える例としてとてもよくできた番組だと思う。私は「あの日、セナに何が起きたのか」に注目し、なぜ死んだのかという真相を待ち望んでいたが、謎は謎で終わっていた。私は80年代にセナの活

躍を見ておりファンだったので、懐かしく画像を見たとともに、セナに何が起きたのかを本当に知りたかったので残念だった。

ナレーションで「祖国ブラジルの期待を背負った」「国民の期待だったセナ」という表現が何回も出てきた。セナもその期待に応えなくてはならないという重圧感があったというような話もあった。番組を見る限り、誰よりも速く走りたいセナと、祖国ブラジルの期待に応えたいセナという2つがあり、番組の後半ではどちらかという祖国ブラジルの期待に応えたいという点に重点が置かれた気がする。セナのすばらしさは、誰よりも速く走るにはどうしたらよいのか、人間としての限界にどうやって挑戦するのか、命をかけたチャレンジャーとしてのセナであり、それが世界の人を魅了したのだと思う。祖国の名誉、それに応えるということに重点が置かれていた点が気になった。素直にセナのよさを表に出したほうが受け入れられ、画像を見ながら懐かしい思いに浸れたのではないかと思う。

- 事件に対する別の見方を伝える番組なのかと最初は思ったが、関わった人それぞれの人生の、ある種のドキュメントだった。広報官の話では、事故当日の話というより、裁判を経て離婚までせざるをえないという1人の女性のストーリーとして見た。それで少し納得しかかったら、最後はサッカーチームの話で、違和感があった。チームでなく、その中の1人にスポットを当て、その後どうなったかを伝えた方がよかったのではないか。個人に絞って淡々と伝えたほうが裏に出てくる大きさみたいなものが浮き彫りになるのではないかと感じた。

4つのストーリーのうち、まずどれか一つにスポットを当ててから、セナのテーマにしようと決め、ほかの3つのストーリーを探すという取材方法なのか。

(NHK側)

今回は何を取り上げるか決めたいうでそこに関わっている人たちを取材した。4つのストーリーの中から誰かを突出して最初に取り上げるということではない。なるべく多くの人たちの記憶に残っている、誰もが見た、誰もが知っているところに重点を置いて毎回のテーマ、ネタを探している。

- 当てが外れる場合もあるのか。

(NHK側)

ある程度リサーチし、なかなか厳しいということでネタをあきらめる場合もある。視聴者が見たいのは事故、事件の知られざる真相だと思う。この番組では、事件の真相をなるべく

く丁寧に伝えることに主眼を置いている。そこに関わっている人たち、三者三様の見方によって事件が違って見えてくる。三つの視点から事故の真相が浮かび上がるようにできないかということだ。事故の真相をそのまま掘り下げることだと、これまで制作してきた番組と見え方がそう変わらないだろうと思う。なるべくサイドの人たちの目線から浮かび上がらせることはできないかということを探している。新しい証言者が出てくる、新しい事実が発掘されるということは毎回そんなにあるわけではない。出来事と那些人たちの人生をうまくリンクさせ、魅力的に見せられるように努力している。

○ 「最期の真実」とタイトルにあるので、どんな真実があるのか、どんなことが隠されているのだろうと思った。あんなにスピードが大好きなセナが、なぜ事故を起こしてしまったのかという内容ではなかったと思う。もっと何かあるはずだと思った。ルール変更によって勝っていた人が全く勝てなくなることはある。スキージャンプの板やスケートの靴などのルール変更は大きな影響を及ぼす。ルール変更についてあまり詳しく説明がないまま終わってしまって、バリチェロの話や祖国のプレッシャーなど普通のストーリーになっていたと思う。感動もしたがありがちなストーリーが出てきて、どこが「最期の真実」なのかよく分からなかった。タイトルと内容が異なっていたと思う。単なる国のプレッシャーだけではなく、何があったのかを知りたいと思った。そこを掘り下げてほしかった。

○ 私はF1に関心が薄く、セナのこともよく知らなかったが、F1のスリリングな感覚、限界に近づけばエキサイトするという感覚は格闘技に近いスポーツなのかと感じた。

質問をいくつか挙げたい。F1マシンの電子制御みたいなことが事故死の真実からんでいるのだろうか。この番組を作成するのにどのぐらいの期間を要しているのか。番組ではゲストを呼ばないということだが、なぜか。

1時間という長い番組だったが飽きはなかった。気になったのは全体的に暗い感じがすることだ。ナビゲーターの語り、話し方、声の質が全体を暗くしているのではないかと思った。

(NHK側)

番組の制作期間は3か月ぐらいだ。

ブラジル人ジャーナリストが番組に出ていたが、ルール改正が事故の大きな原因だろうといわれている。事故の真相、

原因が本当に明らかにできれば、番組の中で盛り込むことも可能だったと思う。

- セナをよく知っている私の世代、「最期の真実」とは何だったのかと期待した者に対し、受け止めるものが少なかった点は残念だった。若い世代でセナのことをよく知らない方が見ると感動したということだが、それがテレビなのだろうと思う。いろいろなボールの投げ方があってよいかと思う。

ドキュメンタリー性とエンターテインメント性のバランスはとても難しいと思う。そのアンバランス性が気になったのはナビゲーターの語りだ。手法としてはとても新しいし、ほかの番組にないおもしろさは感じたが、時代がかかっていて、重苦しく感じた。語りと内容を一致させることも今後必要かと思う。この春から始まった新しい番組なので期待している。

- 「最期の真実」というタイトルへの期待が、内容とのギャップを作り上げてしまったのではないかと思う。あえて「最期の真実」と言う必要はあったのだろうか。それよりは4人のその後起こったことから、セナという人物がいろいろな角度から見えたので、人物像を描くという意味ではおもしろかったと思う。最初の広報官のストーリーは、ほかの3つと少し違うタイプのストーリーで、4つのストーリーを同じところに並べるのは少し無理があったのではないか。その後の3つのストーリーに関してはセナに影響を受け、人生が変わったという意味では共通項があったが、広報官については、セナに近かった方が今まで話さなかったことを話すという意味合いで性格が違うと思った。

ナビゲーターのナレーションのトーンは、効果を狙いすぎているようで、重苦しさ、わざとらしさを感じた。

- ナビゲーターの語り口はよかったと思う。あの語り口を聞くと「アナザーストーリーズ」だったと思えるので、特徴があってよいのではないか。

メカニックの責任者も人生が変わっただろうし、事故の影響で人生が変わった人たちの話から事故がどうやって起きたのか出てくるのかと思ったが、裁判で無罪になったというだけだった。セナが直線に突っ込んでいったのはなぜかなど、そういうことの中から事故の真相も分かり、それに関わった人たちの人生も変わったということが出るのかと思ったが、何も出て来なかった。アナザーストーリーとしていろいろな人に影響を与えたところはよかったと思うが、「最期の真実」の部分は、何も真相が出なかった印象だ。

(NHK側)

セナの事故は、21年たつのに本当によく分からない事故で、少しでも真相に近づければという目的でこの番組を制作している。その部分が自分たちの脳裏にあり、番組タイトルに「最期の真実」と付けた部分もある。タイトルに内容が伴っていないという指摘を頂いたので、次回以降はよく考慮したいと思う。

ナビゲーターは女優業が主で、MCを担当するのは今回初めてで、慣れていないところもあるかと思うが、6月10日(水)の「ビートルズ旋風 初来日 熱狂の103時間」では語調を「ですます」調に変えるなど、もう少し感情を込めたプレゼンテーションにするよう工夫している。

「アナザーストーリーズ」という番組を4月から立ち上げ、真相話で押してよいのかどうかという議論も制作者の間ではあった。真相を究明することを突き詰めると、これまでのような調査報道番組になってしまうところがある。番組を立ち上げたときは、何十年かたつていろいろな立場で関わった人たちがそれぞれ事件とどう向き合ってきたのかがおもしろいのではないか、複眼的に見ることによって出来事の見え方が新しくなるのではないかというようなことを目指した。真相部分にどこまで労力を注ぐのか、サイドの人たちの物語をどこまで伝えるのか、その二つがうまく絡み合っ展開できるともっとおもしろくできるし、皆さんが物足りないと感じられた部分もクリアできると思う。そこは大きな課題だと思う。

始まって2か月の若い番組なので現場も悩みながら工夫を重ねている。先週放送した「ビートルズ旋風 初来日 熱狂の103時間」は全く違うタイプの作りとした。いろいろ関わった人たちが出てくることによって、当時の日本の高度成長期の時代が見えてくる。それを真実、真相と言うかどうかは別として、違うものが見えてくると感じている。今は「アナザーストーリーズ」が一つの形になっていくように試行錯誤しているところだ。

- 複眼的にとらえ、どういう影響があったのか、今だから分かるという背景で報道することはおもしろい取り組みなので期待している。今回はタイトルが「最期の真実」だったことから、新たな真相が出てくるのかと思わせたところが皆さんの批判

の元かもしれない。

<放送番組一般について>

- 「クローズアップ現代」問題の再発防止策について、NHKは報道の事実を伝えることに大変重きを置いていると視聴者も見ていると思う。分かりやすくする、おもしろくするために事実と異なる放送をすることは問題があると思う。常に事実を報道することを職員の方々に徹底していただければと思う。
- 「クローズアップ現代」の再発防止策について、過剰な演出とやらせの違いが微妙だ。公共放送は何かと考える中で、きちんとNHKはどう考えているということをはっきり言っていただきたい。今日の説明でもそこが抜けている。いろいろな方が、あれはやらせではないかと言っていて、それは違うと言いつつ代わりに防止策が物足りなく感じた。その辺りはもう少し詰めて考えていただきたいと思う。

(NHK側)

やらせ、過剰な演出など、いろいろあるが、NHKとしてはいずれにしろ行ってはいけないことだ。われわれはそういう疑問を持たれないような事実に基づくドキュメンタリー番組などを放送していかなければならない。

- やらせか、過剰演出かについてだが、過剰な演出にしても事実と違う場所を隠しカメラで撮っているように見せて放送したのはよくないと思う。演出が過剰というよりも、実際の場所について、真実と違うことを放送したと見たほうがよいのではないかと思う。

(NHK側)

まさにそういう問題をわれわれは大変重く受け止めている。事実と違うことを放送することはあってはならないと思う。番組そのもの、出家詐欺が世の中にあって、警鐘を鳴らす番組を作らなければならないという基本的な意図は間違っていたと思わない。それを表現するためのやり方にさまざまな指摘を頂いたような問題がある。事実ではないことをあたかも事実であるかのように言うことは論外だ。そのようなことを厳に排していく意味でチェック体制をきちんと実施していく。それが結果的にやらせも防ぎ、過剰な演出も排除でき、対策が有効に機能する。まだ始めたばかりなので、有効性について

ての検証は一定の期間を経たうえで実施していきたい。

- 「クローズアップ現代」問題の、過剰な演出なのか、やらせなのかについてだが、その中間ぐらいで、ある人から見ればやらせだろうし、そうでない人から見れば過剰な演出ということではないか。そこを議論してもしょうがないと思う。なぜそうなるかを私なりに解釈すると、この世界ではどうしてもそういうことが起こりがちだからだ。歴史は一回性であって、そのときにその場にはいないと映像を撮れない。テレビの場合はカメラや音声など大きな部隊として常に動いていて、手間暇、人件費のかかる取材をしている。思うとおりに映像が撮れないときに、費用対効果を考慮して、この程度ならば大丈夫ではないかと、事実の範囲の中で当てはめて、グレーゾーンをぎりぎり上げるような判断をすることが、現場にも、チェックする人たちにも、起こりうると思う。テレビの場合は画がなければ何もできないという、画の負担の部分がそういうことになりがちな構造的問題がある。それは画のよさと画のリスクの両方を併せ持ったものとして捉えていかないと、いたずらにそれを押さえ込むと現場が萎縮し、マイナス面が出てくる可能性があると思う。最後はバランスだ。今回、NHKはきちんと対応し調査報告を出し、再発防止策としてある意味でお役所的に厳しいものを作っていると思う。それでも足りないという人もいるかもしれないが、ここまで実施すれば相当なことが防げると思う。逆に現場に過度なプレッシャーになってはいけないという印象を持った。
  
- 5月23日(土)のマイケル・サンデルの白熱教室「公共放送の未来を考えよう」(総合 後10:00~10:49)を見た。サンデル教授の最後のまとめがさすがだったと思う。「公共放送にとって視聴者は単なる消費者ではない。視聴者はさまざまな出来事へ衝突しながら参加するものである。どうやってキャンプファイヤーのような対話ができるのか。異なる意見を包み込むことができるのか。新たなテクノロジーを使って受け身だった視聴者を民主主義の市民として参加を促していくのか。挑戦しがいのある公共放送職員たちの使命だ」ということを言っていた。番組審議委員としても勉強になった。視聴率と放送の質の問題、インターネットと公共放送、共同体意識の育成とナショナリズムの問題、政治的圧力と公共放送など、勉強になるよい視点を提供してもらえた。

(NHK側)

I N P U T (世界公共放送番組会議)という世界のテレビ局の制作者を集めて会議を開催した際に、収録して放送した。鋭い指摘もあり、その指摘にNHKの担当者が答えたが、なかなかうまく答えられないシーンもあった。参考になることが多かったと思う。

○ マイケル・サンデルの白熱教室「公共放送の未来を考えよう」は、題名を見て、これは見ないといけないと思って見た。今日説明のあった「クローズアップ現代」の再発防止策についてはまだ公表されていなかったが、公共放送とは何だろうか、じっくり聞きたいと思った。世界から集まった方々で、環境や各国の考え方が違い、同じ方向を向いているとは思えない場面もあったが、素晴らしい番組だった。これからテレビとインターネットの融合をどうするのか、公共放送の使命と役割、政府や権力からの圧力など、いろいろなことを参加者に質問しながらさらに突っ込んでいく、いつものサンデル教授の方法が興味深かったが、もう少し突っ込んでほしいとも思った。NHKの方は4人出ていたが、うわべの話だけでなく、こういうときこそはっきり言ってほしいと思った。重要な論点が検討され、参加者の賛否、それぞれの回答はいずれも考えさせられるものだった。戦争、スポーツの報道のあり方は基本的に同じにするべきで、スポーツだからどうということではないような気がした。とはいえ、日本だから日本のことを強調することに関しては問題がないのではないかとも思え、大変複雑な思いがした。提供するメディアか、要求に応えるメディアかも大きなテーマだと思った。あっという間に時間が過ぎてしまって残念だった。いろいろと編集し、切られた部分も多かったと思うが、消化できなかった部分がある。公共放送の未来を考えようというテーマでその役割、使命が話し合われたが、公共放送と民間放送の違いが明確に伝わってこなかった。民間放送はコマーシャルがあるため視聴率の高い番組を作らなければならないということは分かるが、ニュースやドキュメンタリーについて話をされていた中で、政府からの圧力の対応、キャンプファイヤーのような役割、視聴者の知る権利の尊重、インターネットとの融合におけるコンテンツの提供、民主主義への参加者としての視聴者の位置づけなどは、民放にも共通する課題ではないだろうかと感じ、それらの使命、役割は公共放送も、民間放送も変わりがないのではないかと思った。公共放送とは何なのか、もっと深く知りたいと思い、その議論をさらに深めていただきたいと思った。いろいろな国の方々を集めるのは困難なことだとは思いますが、いろいろな人が考えている公共放送について、みんなでもう少し整理したらよいのではないかと感じた。

(NHK側)

NHKは公共放送だが、民間放送も同じように公共の放送だろう。放送法上の観点からいくとその存在に変わりはない。テレビ放送会社は放送法という法律に基づいて放送しており、公平公正、不偏不党、何人からも規律されずということは民間放送にも適用されている。大きく違うのは収入源がNHK

は受信料であり、民間放送はコマーシャルであることだと思う。

- 公共放送についてだが、なるほどと思った。民放も、NHKも、公共的な放送としては一緒に、民放はスポンサーがあり、NHKはスポンサーがないということだが、同じ放送でもNHKはスポンサーから圧力を受けることがなく、同じ公共性といってもNHKと民放の公共性は違うと思う。NHKは特定のスポンサーを考える必要がなく、国会で予算の審議を受けるにしてもスポンサーとしての関係があるわけではない。同じ公共性にしても、6月14日(日)のNHKスペシャル「沖縄戦 全記録」(総合 後 9:00~9:58)のような番組は民放では作れない。ああいった番組を作るうえでも、NHKには民放とは違う意識を持った公共放送として取り組んでほしいという印象を受けた。

#### (NHK側)

放送法を厳密に読むと何人からも規律されずということで、政府の言うことであろうが、何であろうが、放送法で定められた中で、自主独立で判断し放送を出しており、それは民放も同じだ。純粋な法律論では、民放も何人からも規律されずに自主独立路線を貫かなければいけない。NHKが自主独立でいろいろな番組を作っていることは番組審議委員の皆様にもご理解いただきたい。もしも番組の中で政府寄りということがあればどんどん指摘していただきたい。本当にバランスが取れているのか、取れていないのかも指摘していただきたい。そういうことも常に頭に置きながら取り組んでいくつもりだ。

- 5月30日(土)のNHKスペシャル 戦後70年 ニッポンの肖像 豊かさを求めて「第1回 “高度成長” 何が奇跡だったのか」(総合 後 9:30~10:19)、31日(日)の「第2回 “バブル” と“失われた20年” 何が起きていたのか」(総合 後 9:00~10:25)をかなり期待して見たが、番組としてインパクトが弱かったと思う。いろいろな角度から取材もされ、光の当て方も的確で、かなり雄弁に映像の中で語られてはいるのだが、残念ながらスタジオに戻った際に妙に要約されることがある。番組制作側からすると、VTRで紹介したことを改めて解説する、要約するというサービスをされているのかもしれないが、もともとが大変膨大な情報量、問題の質であり、簡単に要約はできないと思う。ゲスト2人に要約されると逆にしらける部分もあった。番組の最後でテーマの今後についてゲストが15秒ぐらいで

語るのだが、15秒で語れる問題ではなく、それがいかにも番組の締めであるかのようにされるのはもったいないと思った。今度は外交について取り上げるとのことだが、「NHKスペシャル」の持ち味をもっと生かした番組作りをお願いしたい。

- NHKスペシャル「沖縄戦 全記録」は大変興味深かった。沖縄戦がどういうものだったのか、残されていた膨大な記録をデータ処理し、それをグラフで示しながら、生き残った地元の人や軍人の証言、米軍のカラーの記録映像や陣中日記などをうまく組み合わせて描いていた。なぜ住民側の犠牲が拡大したのかをテーマに、説得力のある番組だったのでないかと思う。衝撃的だったのが「日本でいちばん危ない仕事をしていたのは民間人だ」という証言だ。パニックに陥って住民を機関銃で殺害したアメリカの軍人の証言も衝撃的だった。話す本人が途中からおえつを漏らしたところもその悲惨さを伝える力があつたと思う。沖縄は今も米軍基地問題が解決していないが、背景の一つにあるのは本土や政府と沖縄との間に一種の歴史認識問題があるからだと思う。本土側、政府は安全保障の観点から論じることが多いが、沖縄側には重い歴史がどうしてもあると思う。外国との歴史認識問題だけではなく、国内での歴史認識問題も根深い場合があり、そういった歴史認識問題を解きほぐすのに重要な番組ではないかと思った。「NHKスペシャル」はよく計算された感じがいつもするが、ある意味で堪えがたいほどの悲惨な映像も取り込んでいた。少年の遺体だけではなく、精神に異常をきたした米兵の様子、民間人と思われる人たちが銃撃を受けている様子など、かなり重い内容だったが、よい番組だったと思う。またこういった番組を制作して欲しいと思う。
- NHKスペシャル「沖縄戦 全記録」は感動した。NHKしかできないことだと思った。県民8万人がどこで亡くなったかをデータ化し、CGで日付別に亡くなった人数を表現するというのはこれまでの沖縄報道ではなかったような気がする。あのデータ分析があるから一つ一つの映像に説得力が出てきたと思う。8万人のデータを打ち込むというのは相当な手間であり、NHKがしかるべき潜在的な力を生かした仕事だと思った。アメリカの映像も全部見たうえで編集したということで、説得力のある映像がたくさんあつた。優れていたのは思想があることだ。沖縄戦がどういう意味づけだったのか、本土の防衛のために、少しでも時間稼ぎのための手段であったということは歴史の事実としてあると思うが、改めていろいろな資料と証言によって浮き彫りにしていたと思う。ナレーションもよかった。男性のナレーションに女性のナレーションがところどころで入ってくるというのは、普通だとしらける感じがあるが、この番組ではとても合っていた。また、映像の演出もよく、北海道に住む元軍人の証言のところでは、ウマの目をずっと映しており効果的だったと思うし、沖縄で島民が逃げ込んだガマを映す際には、夜の山の間に見える星を

映すなど、行き届いた演出という感じがした。

- NHKスペシャル「沖縄戦 全記録」はNHKらしいすばらしい番組だった。よくあそこまで映像を出してくれたと感動した。
- NHKスペシャル「沖縄戦 全記録」を見た。感想については割愛するが、“予告編”を見せていただいた感じなので、これから8月15日に向けて、“続編”にも大いに期待している。
- 6月13日(土)の週刊 ニュース深読み「稼ぐ力に注目！！景気のカギは中小企業」では事業を新たに興す人を取り上げており、都内で廃校を使って企業支援している、いろいろなアドバイスをしているという話はよかったと思う。番組の中やツイッター等で「日本は再起不能な社会で、再起できる社会ならよいのに」とか「お金を借りる方策をいろいろアドバイスしている」という話があったが、本来会社を起業するときにはお金を借りてするべきではないと思う。お金を借り、もし倒産してしまったら、返済するために再起不能になってしまう。初めて会社をつくる時には資本金を集めるべきで、そこに話が及んでいなかった。日本にはエンジェル税制という、創業を支援するすばらしい税制がある。2008年に拡充された税制であまり知られておらず、どこかで取り上げるときに触れてくれればと思う。また、ベンチャー企業こそ社外取締役に入ってもらったらよいのではないかと思う。経営経験のあるOBは世の中にたくさんいる。そういう人たちが経営を支援することで事業は成功するというこも取り上げてもらえるとういと思う。
- 6月14日(日)に安保法制関係で国会を取り巻くデモがあった。主催者発表で2万5,000人というかなり大がかりなデモだったが、その日の「NHKニュース7」では取り上げられていなかったと思う。アメリカのデモについて取り上げていたが、なぜ国内のデモについて取り上げなかったのか。

(NHK側)

国会を取り巻くデモ、反対運動は随時いろいろな形で取り上げている。賛成論、反対論、さまざまな角度から安保法制についても伝えている。ニュースの時間に何を取り上げるかはそのときに判断をしているが、6月14日は日曜日ということもあり、関連した動きは、日曜討論「白熱する国会 安保法案・年金情報流出」で取り上げ、昼のニュースでも内容について伝えた。夜8時45分の「ニュース・気象情報」では「各地で反対運動」というニュースの中で、国会周辺での

大きなデモの様子を伝えている。デモを取り上げないということではない。安保法制については反対論もかなり根強くあって、反対運動もかなり行われているので、随時取り上げていく。

- 国会周辺のデモの件について、「当日は日曜でそれに対応する動きがなかったため、これだけを報ずることは控えた」みたいなことを言われたように聞こえた。それはこれからも起きることだ。対応するものがほかになければ報じないということが番組編成の基本だとしたら間違っていると思う。そういう意味のバランスでは決してないと思う。

(NHK側)

夜8時45分の「ニュース・気象情報」では単独でそのニュースだけを伝えている。だいたい一つの塊のようなことで伝えることが多いので、そういう意味で申し上げた。ほかにバランスを取るものがないから使わなかったという意味ではない。

- 「首都圏ネットワーク」で「ストップ詐欺被害！私はだまされない」のコーナーを放送している。特に年金情報が漏れた後で、詐欺被害も出ているようだし、夕方のお年寄りが見ている時間帯に継続して伝えることは意義のあることだと感心した。
- 6月3日(水)のガールズクラフト「ONLY ONEに輝く！イニシャルアンブレラ」を子どもと一緒に見た。古くなった傘をリメイクして使うという内容で、梅雨の時期ならで、すごくかわいらしくもあり、楽しい番組だった。司会のニコルさんもすごくかわいいが、番組のCGの背景がかわいらしく、子どももすぐと一緒に作りたいたいと思うようだ。番組では視聴者からの投稿作品が紹介されることが多く、材料が手に入りやすく、ウェブサイトに作り方の動画が丁寧に掲載されていて、全体的に割と短いプロセスでかわいいものができるため、達成感がある。すてきな番組なのでこれからも楽しみにしている。
- 6月13日(土)のSWITCHインタビュー 達人達(たち)「松岡修造×茂木健一郎～脳と身体と心のカンケイ～」は、2人の掛け合いがなかなか見事で、お互いその場で出し合う個性も楽しかった。テニスについての話も大変参考になり、楽しい番組だった。この番組は、人の組み合わせによって相当差が出ると思うが、

うまく当てはまるときはおもしろい。

- 5月8日(金)の「テレサ・テン 歌声は永遠に～没後20年・アジアをつないだ魂をたずねて～」(BSプレミアム 後10:00～10:59)を見た。「時の流れに身をまかせ」の「もしもあなたと逢えずにいたら わたしは何をしてたでしようか」の「あなた」とは歌を指しており、そう思って歌を聴き直すとすごいことだと思った。それぞれの方が一生懸命にやりたいものを見つけ、死んでもよいぐらいに取り組むということはすばらしいと思った。
  
- 5月30日(土)の夜8時過ぎに大きな地震があり、都内のビルのエレベーターが1,000台ほど運転を停止した。六本木ヒルズはいつも話題になるが、NHKではヘリコプターを飛ばして報道し、2時間もエレベーターが停止したと民放と同様に批判的に伝えていたが、安全確保のためにエレベーターを停止し確認しているのであり、非常時に落ち着いて安全確認をしている人たちを批判する報道はよくないのではないか。東京一極集中で、高層ビルも密度が大変高いビルが建っているが、これからは何かあったときに逃げ出すことではなく、安全が確認されるまで、そこにとどまることのほうが大事だという時代になっている。東京ディズニーランドでは東日本大震災のときに観光客をその場にとどめ、慌てて帰らせないようにしたことがよかったと言われている。安全確保の行動を批判するのはよくないと思う。

(NHK側)

ヘリコプターを飛ばしたのは六本木ヒルズでエレベーターが止まったからではなく、都内のかなりの部分で揺れたので被害を確認するためだった。ご指摘のとおり、安全確保には一定程度の時間がかかるのは当然のことであり、それを無視し、とにかく避難させればよいわけではないことは確かだ。時間がかかったことを批判的に伝えたつもりはなく、都会での大地震ということできざまな影響が出るということも伝えたかった。山手線も止まり、安全確認に長い時間がかかり、混雑したことを地震の要素として伝えた。委員の指摘も踏まえ、今後はそういうこともきちんと伝える姿勢でのぞみたい。

- 5月30日(土)の地震でエレベーターがあれだけ止まることはゆゆしきことだと思うが、われわれはそういったことをすぐ忘れてしまう。エレベーターの問題だけではなく、都市型大地震災害の場合はどういった問題が起きるのか、首都直下型地震をある程度念頭に置いて、公共放送にしかできない、警鐘を鳴らすような番組を作ってほしい。

NHK編成局  
番組審議会事務局

## 平成27年5月NHK中央放送番組審議会

5月のNHK中央放送番組審議会は、18日(月)、NHK放送センターにおいて、12人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「クローズアップ現代」報道に関する調査報告について説明があったあと、放送番組の種別および種別ごとの放送時間(平成26年10月～27年3月分)について説明があった。続いて、所さん!大変ですよ「ぐるぐる”病院の謎」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、6月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	北城恪太郎 (日本アイ・ビー・エム(株)相談役)
副委員長	小林いずみ (前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官)
委員	有森 裕子 (元マラソンランナー)
	大日向雅美 (恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授)
	小田 尚 (読売新聞東京本社専務取締役論説担当)
	鎌田 實 (諏訪中央病院名誉院長)
	倉重 篤郎 (毎日新聞社論説室専門編集委員)
	佐野真理子 (主婦連合会参与)
	東儀 秀樹 (雅楽師)
	永田 紗戀 (書家/花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰)
	谷口 肇 (全国農業協同組合中央会専務理事)
	和田 章 (東京工業大学名誉教授)

### (主な発言)

<放送番組の種別および種別ごとの放送時間(平成26年10月～27年3月分)について>

- 総合テレビで放送している報道ジャンルについて、目標値を20%以上としているが実際は毎回50%程度であり、違和感を覚える。今後、比率の目標値を設定する際、実態に合わせた目標設定をしたほうがよいのではないか。

それぞれ目標は達成されている。今後も調和のとれた放送になるよう努めてほしい。

<所さん！大変ですよ「ぐるぐる”病院の謎”（総合 4月23日(木)放送)

について>

- 論文を書くにしても、内容には起承転結があるが、問題だけを伝え、解決策について言わないという変わった番組だと思った。世の中には問題が多くあるが、解決策を言わなければ番組を作るのはだいぶ楽だと思った。

(NHK側)

解決策に関しては今も取材を続けている。可能であれば次の展開も考えたい。

- 興味深く番組を見て、病院で大変なことが起こっているという問題提起だと思ったが、ゲストの方々のコメントが、逆に大変ではないというような、問題を和らげるような内容だった。そしてさらに掘り下げた内容について、病院側の意見が紹介され、それで終わってしまったという印象だ。大変な問題だということだけが印象に残った感じで、まさに所ジョージさんが「この問題はちゃんとした番組でやったほうがいいんじゃないの？」とコメントしていたとおりだと思う。番組で取り上げていた内容は、これからの社会にとって重要だと最初に思ったが、大変軽く扱われたまま終わっていた。短い時間で大切な内容を取り上げると、見ていて不安に思ってしまう。番組の中で結論づけなかったら、例えば特番でもっと掘り下げるといったコメントがあれば安心できる。その辺りが気がかりだった。私たちは病院にかかる立場であり、生活保護を受けないにしても病院に行くことを不安に感じた。早めに次の展開、もっと掘り下げた内容の番組が見たい。

- この問題についてどうしていくべきか、今後を考えられる程度の情報を知りたかった。所さんが「この問題はちゃんとした番組でやったほうがいいんじゃないの？」とコメントしていたが、私も同感だった。番組の演出で不快に感じたのは、“ぐるぐる”が何を意味しているかを早く説明しなかったことだ。“ぐるぐる”といえば“たらい回し”のことだろうと分かる。知ったときの驚き、感動が何もないようなことに時間をかけるのはNHKらしくないと思う。

どうするべきかという結論に至らないのであればスタジオ部分は必要ないのでと思ったし、視聴者に対して問題提起をするだけであれば、ドキュメントとして淡々と取り上げてほしかった。

吉田鋼太郎さんがナレーションをしており「鋼太郎のちょっと大変ですよ」というコーナーで、吉田さんを顔出しで紹介していたが、必要性を感じなかった。吉田さんの強いキャラクターが頭をよぎってしまい、劇的な、作りすぎた演出が気にな

り、違和感を覚えた。NHKのアナウンサーが淡々とナレーションを付けたほうが切実な感じ、まじめに作っている感じがするのではないか。

- 非常に重要で深い問題が3つあると思う。1つ目は病院経営の問題、2つ目は重い病を抱え、高齢で、生活保護を受けざるをえない方々の悲しみの問題、3つ目は社会保障費をどう使うかという問題だ。この3つはしっかり取り上げてほしい問題で、それに気付かせる糸口として、番組で注意喚起したのかもしれないし、NHKならではの取材だったとは思う。しかし、問題が軽く扱われていて、ゲストは問題と関係のないことをコメントし、時には笑い声を立てるなど、後味が悪かった。“ぐるぐる”される生活保護の高齢者の方の気持ちを思うと、私がゲストだったら笑い声など立てられない。また、アナウンサーが「税金を使う」と何度も言って、生活保護の方には税金が大変かかると印象づける説明をしていた。社会保障は税金を使用するものだ。医療、年金、介護、子育てもそうだが、税金を使うことが問題ではなく、税金をどう適切に使うか、使い方が問題だ。短い時間のため、その辺りの切り分けが難しかったのかもしれないが、丁寧な説明が欲しかった。問題提起としては重要なことだと思う。違う番組でしっかり取り上げてもらうことを希望する。

(NHK側)

可能な限り、今後も取材していきたい。演出に関しては制作現場で議論をしていきたいと思う。

- 3か月で転院しなければならないということはよく聞く話だが、今回の番組で紹介されたように、もっと短期間で“ぐるぐる”されていることは初めて知った。そのからくりもきちんと説明されていてよかった。生活保護受給者を食いものにしていく悪質な病院、一つの病院を核としてネットワークを作り、正しく税金が使われていない実態、患者を患者として見ずに一つの駒のように考え、“ぐるぐる”させている状況が伝わってきた。一方、問題を片方からしか見ていないことが消化不良だった。10年間に70回も転院した人が存在しているということは、昔からそういう実態があったということだ。生活保護受給者と近い自治体、社会福祉関係者がこの実態について知らないのかと疑問に思い、そちらの面からの取材も重要だと思った。厚生労働省が動き始めたということだが、10年間も実態があるのに今ごろかと思った。実態の見えない“ぐるぐる”病院という形で、病院だけが悪者にされていたような気もする。問題の全体を見ると自治体の責任も大きいと感じるし、そういった違う角度からも取材してもらい、報道してもらえると生きるための参考になるのではないかと思う。

- 私は「“ぐるぐる”病院の謎」しか見ていないが、過去に拳銃の問題も取り上げたと聞いた。この番組はかなりシリアスな問題を取り上げる番組なのか。

(NHK側)

シリアスなテーマを取り上げることもある。遺品拳銃について取り上げた回は、亡くなった人が所持していた拳銃が自宅から相次いで押収されているということが地方新聞に多く掲載されたことをきっかけに調査したものだ。

- 所さんが進行役だが、今回の問題には全く合わないと思う。所さんは見ている楽しい番組に合うキャラクターだと思う。視聴率を上げるために所さんのようなキャラクターを起用し、実は深刻な内容だったとなると、見ている側もどう捉えていいのか、どこで相づちを打てばいいのか、笑ってよいところなのかが分からず、ぎくしゃくしたものを感ずるのではないかと。シリアスな内容ではなく、世間で起きていることに対して、不思議でおもしろいと紹介する番組にしたほうがよいのではないかと。

(NHK側)

4月30日(木)に放送したものは「文房具“爆買い”騒動の謎」で、白いチョークの“爆買い”が始まっているという話だった。愛知県のチョークメーカーが廃業することになったのだが、大変品質の高いチョークだったので、韓国を始め最終的にはアメリカの数学学会が1トン以上のチョークを“爆買い”していたという話だ。数学の世界ではチョークを使ってものを考えることがポピュラーで、このチョークがないと難問が解けないという情報を伝えた。チョークの裏側にそんな世界があったのかということを見せるもので、スタジオも楽しく展開した。

- 「シリアスではない回もあるからよい」ということではなく、「シリアスな話題を取り上げない」番組でよいのではないかと話だ。

(NHK側)

“シリアスなテーマを取り上げない”とは言えない。ただシリアスではない回も多い。5月14日(木)の「世にも不思議な“えんぴつ物語”」もそういうタッチだ。HBの鉛筆を最

近見ない、小学校で使われていないという話だ。

- そういう直球のテーマで制作して欲しい。
- この番組は、誰を対象とした、どういうカテゴリーの番組なのか。取り上げる内容が激しく違うようだ。恐らく大人が見ると物足りない終わり方だが、子どもたちが見るといろいろ考えられる内容なのではないか。

(NHK側)

社会的な事象を紹介する番組で、今までNHKの情報番組などをなかなか見てくれなかった層に見てほしいという思いで作っている。これまでと比べると、10代、30代、40代からよく見られている。

- 今回取り上げたような問題について、ネットワークのようなものがあることは初めて知った。このネットワークをよく見つけたと思う。地域で限られた病院のベッドをいかにまんべんなく使うか、病院関係者はベッドの回転率や稼働率を大変気にしている。それを悪用し、いかにも回転しているように見せている閉じられたサークルがあるということが、この番組で分かった。

私はNHKで放送する番組がすべて一色になる必要はないと思う。10代から30代など「クローズアップ現代」を見てくれない人たちが、こういう番組を見て、そこで日本にとって大事なことが語られ、大きな問題があると気がついたときに「NHKスペシャル」などで取り上げられればよい。医療関係者も努力はしているが、悪いものは何とかしなくてはならず、その入り口としてこのような番組があってもよい。所さんが「この問題はちゃんとした番組でやったほうがいいんじゃないの？」と正直に言ったことも含め、よい番組だったのでないかと思う。応援していきたい。

- 私も応援したい。4月16日(木)の「恐怖！ヤギ襲撃事件」はよかったが、「ぐるぐる”病院の謎」は足りなかった面もあるのではないかと思う。厚生労働省などの実態調査は進んでいる感じもしたが、なぜ病院の名前を公表しないのか、福祉事務所は何をしているのか、診療報酬が下がる直前で患者を転院させているという話であれば、個々の患者の実態によっては入院期間を延ばせるような報酬体系にできないのかなど、いろいろ考えさせられた。社会的な問題意識を深める入り口としてよい番組だと思う。「考えるカラス～科学の考え方～」もそうだが、問題を指摘し、答えは言わず、あとは自分で考えてほしいという番組だと思う。この番組もそうい

うスキームの番組なのではないか。番組を見て、いろいろ意見を言いたくなるし、もっと見せてほしいという感じがよい。「恐怖！ヤギ襲撃事件」では、都会の人が赤城山の麓にイヌを捨てに行くということに大変考えさせられた。何のためにイヌを飼ったのか。イヌが野生化し、地元の人たちが危険におびえ、困難な目に遭っていることが分かり、問題を知る入り口としてよい番組だった。

- 私はおもしろく感じた。ファクト(事実)の発掘という意味で優れている。転院の問題は、周知の事実かと思ったが、医療関係者の世界でもあまり知られていないという話だ。北関東の病院間でトレードを行うシンジケートができていているという事実も発掘されていた。取材はするが、それ以上は突っ込まないような感じもあったが、それはまた別の番組で取材すればよいと思う。産婦人科の話もあったが、これも一つの発見だった。少子化で産婦人科にはいろいろな問題がある中で、生活保護受給者を受け入れているという事実の発掘として申し分ない番組だった。コメンテーターの「アメリカではだれも面倒を見てくれないからうらやましい」という話は本当なのか分からないが、そういう見方があってもよい気がした。4月30日(木)の「文房具“爆買い”騒動の謎」の回は、家族が見ていて、「とてもおもしろい番組がある」と言っていた。力のある日本企業がチョークの生産をやめざるを得なくなり、韓国の企業が買い取って世界に向けて売っていくというものだ。チョークという身近な物が、数学の世界では大変重要なものであったことなど、意外なことがいくつも知り得たとのことだった。
- 「所さん！大変ですよ」というタイトルが問題ではないか。「所さん！ファクト発見ですよ」程度ならば事実を知る、起こっていることを知る番組というトーンで見られる。「大変ですよ」と言うと、問題に対して解決しなければいけないという感覚を持ちながら見てしまうのではないか。
- 番組審議委員の間でも意見が多様ということがよく分かった。問題提起を行う番組としては、気が付かない事柄を取り上げておりよかったと思う。今回のように深刻な問題のときには「これからも取材をしていきたい」と最後に言ってくると、「NHKはまた取材をしてくれる」と思わせてくれたと思う。社会に対して問題提起をすることは報道番組にとって重要なことだ。以前、病院の“たらい回し”の問題が取り上げられた際に、患者がいるのに病院が“たらい回し”する背景に、病院の勤務医は本当に忙しく、これでは勤務医がもたないという問題提起があり、病院の医療費の改定などに結びついたことがある。内容によって、おもしろかったで終わるときがあってもよいが、「もう少し聞きたい、知りたい」と思うような内容のときはひと言入れてくれるとよいと思う。

番組のタイトルについては、「所さん！大変ですよ」というタイトルでないと視聴者は見ないのではないかと思うが、途中で「所さん！大変ですよ」と何回も出てくるのは、少しくどいと感じた。

賛否両論ではあったが、応援演説だと思ってさらによくして行ってほしい。

(NHK側)

NHKの視聴者も多種多様だ。ある問題について賛成や反対などいろいろ違う意見があるが、NHKは事実を提供し、問題提起をし、結論は視聴者の皆さんに考えていただくということが基本スタンスであり、放送法にのっとったNHKの方針だ。ご理解をお願いしたい。

自治体や福祉事務所、厚生労働省などに対して取材をしていないわけではなく、取材した段階では、番組で伝えられるところまで自治体などの対応が進んでいなかったということだ。取材が進めばまた別の番組で取り上げることも可能だと思う。取材せずに片面だけの情報だけで制作しているわけではないので、そこはご理解いただきたい。

○ 私には知らないことばかりだった。「クローズアップ現代」よりこういう番組のほうが見やすいという感想を持った。こういった問題はまず知ることが大事だと思う。子育てをしている世代では、「クローズアップ現代」は生活時間的に見づらい。今回の「所さん！大変ですよ」は、家族で一緒に見たが、番組の演出的にも子どもにも見やすかったようだ。

一方、ゲストのコメンテーターの話には違和感を覚えた。所さんのナチュラルなコメントと、専門家のコメントがあれば、所さんのより柔らかい感じが大変生きる見やすい番組になると思う。

○ おもしろかった。いろいろな方が社会の問題を知る一つの切り口としてはよいのでないかと思った。25分の番組であり、そもそも深くいろいろなことを見ていく番組ではないだろうと思う。視聴しながら、知りたいことがいくつか出てきた。たとえば中核的な病院が衰退するのはなぜか、診療報酬が変わったせいなのか。産婦人科が産婦人科以外を担当しているのはなぜか、子どもを産む人の数が少ないからなのか。お産ができずに困っている人もいるのに、福島で昔起きた事件の影響なのか、などだ。その番組の中で完結できないテーマのときは、番組の最後に、提示された問題のまとめをしてもらえると深掘りする番組がまたあるのかという期待に

つながると思う。

(NHK側)

貴重なご意見をありがとうございました。今も、番組スタッフは皆、懸命に事件や出来事を探し取材している。またご覧いただけたらと思う。よろしく願いいたします。

- 生活保護を受けていて病気になった人が頻繁に入退院を繰り返すことを強いられる問題は、昨年からメディアでも取り上げられていた。しかし、実際にそうした目に遭った人から直接取材した例はあまりなかったと思う。その点で、興味深い番組だった。番組では後半、ひとつの病院が中心になって転院ネットワークを組織していたことを暴いていた。これも、問題の根の深さを理解する上で重要な取材だったと思う。他方、所さん自身が「ちゃんとした番組でやった方がいいんじゃないの」と指摘していたように、扱いが軽いという印象を持った。たとえば、冒頭近くで「ぐるぐる」の意味について、漫画のパネルを使ってあまり意味のない寄り道をしていたが、あれは不要だったのではないか。また、3人のコメンテーターが問題の本質をきちんと把握できないままに発言している感じが否めなかった。「お一人様女子の健康不安」とか「アメリカの過重な医療費負担」とか「孤独にならないためにはぐるぐるもいいかも」あるいは「稲作文化セオリー」など。そのたびに所さんがうまく軌道修正していたのでなんとか救われたが、焦点がぼけてしまっていた。取材が浅いわけではないと思う。当事者としてたらい回しされた患者だけでなく、病院関係者などにも取材できており、データはしっかり抑えているようだった。しかし、ここまで突っ込んだルポを見せられると、政府はこの問題をどう把握しているのか、あるいは、医療関係者などから改善策についての提言がすでにあるのかないのか、この慣行が今も広がり続けているのかどうか、など新たな疑問が次々出てくる。おそらく取材チームはそのあたりも抑えていると思うが、十分に紹介する時間が足りなかったのだとすれば残念だ。シリアスなテーマを軽いタッチで報じるというスタイルはあっていいと思うが、今回については、それがうまくかみ合っていなかったように思う。

<放送番組一般について>

- 「クローズアップ現代」報道に関する調査報告書をいち早く送ってもらい感謝している。4月28日(火)の検証番組『クローズアップ現代』報道に関する調査報告書についても視聴した。調査報告書の内容の説明、記者会見の内容どちらもNHKがきれいなことばでまとめているという印象がとても強い。調査報告について

の記者会見の中で2人の記者から「過剰な演出とあるが、普通の視聴者感覚からすれば、言い方が違うだけでやらせと言ってもよいのではないか」「NHKが言っていることと視聴者が見た印象は違う。それでもやらせと認定しないのは結論ありきだったのでは？」という指摘があった。それがまさに普通感覚であると思う。NHKの説明は、言い訳をきれいなことばで言うことに終始していると感じる。残念ながら2人の記者からの質問に対する正面からの回答はなかった。「過剰な演出であり、やらせは行っていない」と判断されたことには納得がいかない。私も報道関係者からいろいろなコメントを求められるが、NHKに限らず、テレビ局はいつも画が欲しいと言う。「新聞ではないので画にならないと番組にならない」「画で訴えたほうがより印象的な場面が作れる」というようなことを言う。画を作るとするのは演出の範ちゅうだと思うが、そういった演出の感覚がだんだんとまひし、過剰になる。それはやらせと紙一重であって、大変大きな問題だと思っていたが、今回もはっきりしなかった。どこまでが過剰な演出で、どこからがやらせなのか、そこが全く見えないままにNHKとしてこのように判断したというのは違うのではないかと思う。原点に戻り、真実を伝えるという報道のあり方を真摯(しんし)に考えてほしい。心から強く望む。

- 「クローズアップ現代」の問題はかなり深刻だと思う。NHKのやらせに対する定義が狭すぎるのではないかという気がする。今回の件も「ねつ造ではないのでやらせではない」ということだが、打ち合わせをし、こういう進行でいきましょうと確認しあうだけでやらせではないかと思う。今後ずっとこの問題でやらせではないと本当に言い切れるのか伺いたい。NHKで働く人たちは皆そういう感覚なのかと心配になり、NHKにいる知人、友人に聞いてみたが、「あれはやらせだ。どんどん批判してくれ」という言い方をされた。その点についてNHKの内部でそういう声が上がっているのだろうか。もし上がっておらず、外部の批判を求めるということであれば不健全だと思う。報告書の19ページにもあるが、担当した記者が「よろしくお願いします」と相手に言ったことが調査の中で判明している。実際の番組を見ても、相談している人が入ってくる場面は不自然な感じがするのに、なぜ上司、デスクのチェックがうまく機能しなかったのかも大きな問題をはらんでいる。今のところ担当者の処分としては停職となっているそうだが、外部の人と取材を巡ってトラブルを起こし、信頼を失うケースは新聞社でもあり、その場合は人事異動で外部の人とタッチしない部署に異動させる。今回のケースはNHKとして処分をしているのだろうが、今後該当の担当者をどういう部署に異動させるつもりなのか伺いたい。

(NHK側)

NHK内部の声を聞いているかということについては、調査報告書の中にも記載しているが、今後二度とこうしたことが起きないようにするために、5月の大型連休明けから、今回の調査に関わった担当者たちが、NHK本部の放送に関わるすべての部署をはじめ全国を回って勉強会を始めている。先週、私も水戸放送局に行って、現場の若い記者、ディレクター、編集マン、カメラマンなどと2時間余り話をしてきた。水戸放送局では「あれはやらせだと思ふ」と率直に言う職員もいた。NHKの放送ガイドラインに書いているやらせの定義に照らし報告をしているが、いろいろな意見があることも含め、きちんと受け止め、二度とこうしたことが起こらないように再発防止策をできるだけ早くまとめたいと考えている。

なぜ問題を共有できなかったのか、分かっていたら未然に防げたのではないかということについては、ご指摘のとおりだと思ふ。報告書でも論じているが、放送局が番組を作る際には、新聞などの活字メディアとは違い、撮影、音声、編集などの工程を経る。したがって、記者が自分で取材してきたことがそのまま記事になるのとは違い、何人かの共同作業で番組になる。編集マンは素材を一から見るのが当然だし、カメラマンもディレクターも取材に立ち会うので、通常であればおかしいのではないかという声上がるべきだった。今回は最初の設定のところの記者の説明に、事実ではない部分があり、その間違った前提の下で編集、制作が行われたことが問題だった。情報を共有し、おかしいことには声を上げる必要があり、そういうことに消極的になってはいけないという内容で再発防止策をまとめている最中だ。

人事異動の件については、個別の異動に関わることであり、公の場で申し上げることは控えさせていただきたい。

記者会見でも広義の意味でやらせではないかという質問を受けた。NHKの放送ガイドラインに照らした報告書だが、質問のような大変厳しい意見があることは十分に承知している。そういうことが二度と起きないように今後再発防止策をきちんとまとめ、たとえば取材をしたときに内容を共有すること、今回のような匿名のインタビューを番組で使うときに

は内容について関係者でチェックすること、最終的に放送前の試写をする段階で当事者だけではなく、局内の第三者的な立場の人間がチェックすること、そもそものジャーナリストとしての教育をさらに徹底することなどについて、再発防止策をまとめ、それに基づいて二度と起きないように進める。再発防止策がまとまった段階で報告させていただきたい。

- 再発防止をどうしたらよいのかと考えると、「クローズアップ現代」の問題は常態化しているのではないかと気になる。宗教法人を利用した詐欺があったこと、宗教法人がピンチであることの二つの柱だけでも十分にすばらしいリポートになったと思う。それなのに取って付けたような無理をしている。ブローカーの存在がなくても、宗教法人を利用した詐欺があったことは事実であり、その事実だけでよいのに、ブローカーをでっち上げざるをえなかったことについて、潔く、自らに厳しい調査結果にするべきだと思う。一時的な総括を自分たちで出したわけだが、身びいきしたような総括になっているのでないか。これからのNHKのことを考えたときに、一度厳しく自らを律し、NHKはほかの放送局よりも厳しく対応していることを見せることは、日本の放送界をよくしていくうえでも大事なことではないかと思う。どうしても納得できないことが3つある。1つ目はブローカーの裏付けがないにもかかわらず、なぜブローカーと言ってしまったのかということだ。2つ目は先にブローカーに会って、それから多重債務者と会ったように見せているが、実は多重債務者とは8年程前から付き合いがあり、先に会っているということだ。視聴者を錯覚させるような形になっているのではないか。3つ目は隣のビルから撮影しているが、いかにも大変な秘密の場面を撮っているように見せようとしていることだ。複数のチェックが入っているにもかかわらず放送されたことは、劇的に撮ることをよしとしている空気があったのでないか。複数でチェックできなかったということは、ほかでもそういうことがあって、そのほうが劇的で、若い人たちにそう撮らないと視聴率が上がらないと思わせてしまっている何かがあるのではないか。私たちはNHKを高く信頼している。NHKの番組だったら間違いないだろうと今でも思っている。人間誰でも間違いはあるわけだが、間違ったときには二度としないためにどうすればよいのか、何となくあいまいなまま終えないことだ。今の3つの点に明確に答えられ、大丈夫ならばよいが、何となく言いくるめ、自分たちで理由づけをし、やらせはなかったとしないほうがよいのではないか。NHKの応援団としては、逆の手を取ったほうが国民に信頼されるのではないかという気がした。

(NHK側)

実際の事件について説明するだけで十分だったのではない

かという点については、調査委員会でも全く同じ意見だった。一般性、汎用性を持たせるために無理にシーンを広げなくても、事実があればそれをきちんと提示するだけで、しかも冷静に提示するだけで十分に伝わっただろうという点については、われわれもそのとおりで考えている。演出の部分でブローカーの裏付けがないまま、なぜ放送してしまったのかについては、番組の中でより一般的に出家詐欺が広がっているという構成に合ったインタビューややりとりを撮りたいという思いが優先されてしまったからだ。せつかくブローカーという人に会ったのであれば、ブローカーという人をもっと取材し、そこで新たな事実をつかもうとするのが本当のジャーナリストではないかと思う。取材の目的がどこかで違ってしまっていたのではないか。そもそも多重債務者と前々から知り合いであったのに、いかにもブローカーと紹介した人のところに多重債務者がやってきたという設定で編集していることについては、記者が匿名で取り上げた二人の身分を秘匿する目的もあったが、実際とは違う取材過程を取材チームで共有した中で起きてしまった。これは放送ガイドラインに抵触することだ。また、隣のビルから隠し撮りをしたように、大仰に見せる必要はないだろうというのもご指摘のとおりだ。そういう部分は過剰な演出だとわれわれは報告したが、あれこそまさにやらせだという批判があることも十分に承知している。それら一つひとつは、放送ガイドラインにいずれも抵触する問題であり、しかもそのような制作に対する考え方や風土が、もしもNHKの中で広がっているということであればゆゆしきことだ。すべての放送局を回り、放送現場の人間としっかりと話をし、NHKに求められていること、NHKが視聴者にきちんと信頼されるための放送とはどういうものかを一からもう一度話し合おうということで進めている。いろいろな批判をいただくことは当然のことだと考えているが、今回の件を重く受け止め、二度と起きないように、放送に携わる一人ひとりが今回の問題、課題を共有するところが重要だと考え、策を進めていく。

- 「クローズアップ現代」問題については、私はそれほど大変な問題とは思っていなかった。調査報告書を見る限り、NHKはきちんと委員会を作り、調査をして、

再発防止措置も出していると思っていたが、各委員からの厳しい意見を聞いて、なかなか大変なことなのだなと思った。私は番組審議委員を3年近く務めているが、今日ほど問題に向き合って番組審議会としての機能を果たし、やりとりをしているのは初めてだ。問題となっている番組を見て、改めてこの問題について考えさせてほしいと思う。今後、再発防止などのいろいろな議論が進むと思う。報道の傍らにいる者としてもやらせだったのかどうか、どう見たらよいのかを考え直させてもらい、意見があれば申し上げたい。

- 委員の方々から出た意見はいずれも的確だったと思う。一方、検証番組を放送したこと、NHKの説明内容も的確だったと思う。しかし、ブローカーや多重債務者との関係のところは、聞き取り調査をした結果いろいろ食い違う点があるようだが、少なくとも隠し撮りのような形で放送したのに、実は隠し撮りではなかったと言うのはNHKとしてよくないと思う。過去にも麻薬の問題などで同様の隠し撮り映像のようなものが放送されているが、「あれは事実だったのか」と感じてしまう。過剰な演出については、事実がまずあって、その場面を撮影する際に言い方を変えてほしいということはあるとしても、今回のように、隠し撮りではないのに隠し撮りのように放送し、記者だけではなく、カメラマン、ディレクターも関わっていたはずなのに、内部で問題にならないことは大きな問題だと思う。NHKの報道は事実を伝えているとみんなが信頼しているところで、事実でないことを伝えてしまったことは大変残念だ。やらせの定義に当たるかどうか、放送ガイドラインに照らしてどうかということよりも、視聴者から見て事実でないことを放送してしまったことへの反省が重要だ。「『クローズアップ現代』報道に関する調査報告書」の番組の最後で国谷裕子キャスターが残念だったと話したこと、国谷キャスター自身が反省を示したことはよかったと思う。起きた後の調査についてはいろいろ取り組んでくれたと思うし、二度と起きないように再発防止策の実施と視聴者の信頼を勝ち得るような形での報道をお願いしたい。

- 5月9日(土)のNHKスペシャル「総理秘書官が見た沖縄返還～発掘資料が語る内幕～」を見た。当時の佐藤栄作首相の秘書官だった楠田實さんの存在は私も知っており、何か残されていていずれ表に出るのでないかという話はうすうす聞いていた。参考になることが多数あり、こういう形で番組が制作されたことに感謝したい。沖縄や安保法制の問題がある今、番組が放送されたタイミングもよかった。安全保障や日米安保における沖縄の問題については、さまざまな証言が残されており、ジグソーパズルのように、ピースを埋めていっている作業状況だが、今回の番組は残された空白の部分をいくつか埋めてもらったという印象がある。番組の中で私が驚いた点がいくつかある。佐藤さんが、総理大臣として沖縄返還がなければ日本の戦

後は終わらないということを経済的なテーマに挙げたわけだが、そもそも楠田さんの進言もあり、そういう方向に向かったという話や、佐藤さんが沖縄で演説した際の演説文に、アメリカ側からの注文で、アメリカの沖縄基地が重要な役割を果たしているという文を添えたという事実、また、基地での核を巡る攻防の中で、アメリカの腹の中を知るために、ハーリー・カーンという人物を通じてアメリカの意向を探り、また同様に、カーンさんを通じて岸信介元首相を当時のニクソン大統領の元に派遣し、情報収集を行ったという話だ。いずれもこれまで公表されていなかった話だと思し、大変参考になった。あえて注文をつけるならば、核を巡る疑惑の中でわれわれがよく知っているのは若泉敬さんで、アメリカとの交渉の最後のところで非常時の核の持ち込みについて秘密合意をした方だが、彼と楠田さんとの関わり合い、関連付けがあるのかどうか知りたかった。番組としては、分かりやすく制作されており、専門家の目にも堪えるよい番組だった。

- 安全保障法制の報道、解説についての感想を述べたい。5月15日(金)の「NHKニュース おはよう日本」は、前日に閣議決定されたことを受けたニュースだったが、今回はバランスが割と取れていたと思う。総理会見、陸上幕僚長の記者会見、反対派のデモの映像、NGOの難民を助ける会の人のコメントなどで構成されていた。法案の中で「存立危機事態」、「重要影響事態」とことばがコロコロ変わることについて、そのまま伝えるのではなく、用語辞典の出版社がことばの解説をつけるのが大変だと言っているという事実で伝えたのは、なかなか考えられていた。最後の政治部記者の解説も世論調査等を使い、流れもうまくできていたと思う。
- 5月15日(金)の時論公論「どうなる自衛隊」は、全般的にバランスが取れているといえ取れているが、今回大きな転換となる集団的自衛権の限定容認と、後方支援の拡大について、島田敏男解説委員は「どこまで行くのかわからない。明確な説明がない」と言っていた。日本の法律の組み立て方は、自衛隊法や安全保障の問題であれば、自衛隊が実行可能なことを書き込んでいく方法で、逆に実行できないことを書き込んでいくアメリカなどの国の法律と違い、どういう状況にもある程度対応できるように作られている。そこを捉え、自衛隊が世界中に行くというような誘導する言い方は控えたほうがよいと思う。あくまでもそのときの総理大臣、防衛大臣等が政策判断し、自衛隊を派遣するかしないかをそのつど決め、国会の承認を経るわけで、法律の陣立てと実際の政策遂行にはかなり距離がある。そこをきちんと解説してほしいと思う。
- これから安保法制が本格的に議論される。5月17日(日)の日曜討論「安保法制・労働者派遣法 与野党に問う」を見たが、島田解説委員の司会で、各党の意見

をよく引き出したと思う。安保法制の大きな転換になる法案だが、さまざまな問題があり分かりにくいいため、個別の法律の意味づけ以外に、なぜ法案が出されたのかという全体像、安全保障環境の激変は何なのかということも含め、分かりやすく、大局的な解説が必要になると思う。それが実現できるのは、映像を持っているところではNHKだけと思う。法案が審議される間はその報道に気を配り、丁寧な報道をしてほしい。関連した番組の放送予定があれば知りたい。

(NHK側)

直近の番組では、5月24日(日)のNHKスペシャル「自衛隊の活動はどこまで拡大するか」で安保法制についての討論を放送する予定だ。そのほかについても重点的に取り組んでいく予定だ。

- 5月17日(日)の日曜討論「安保法制・労働者派遣法 与野党に問う」は法案の中身についての質疑がある程度かみ合っていた。野党からの批判についても、表面的ではなくきちんと自公が答えており、かみ合っていたところがよかったと思う。

(NHK側)

安保法制については日本の安全保障上の大きな転換点ともいわれている。世論調査を行うと、賛成、反対以外に「よく分からない」という答えが大変多い。われわれも法案の内容をよく理解してもらおう姿勢で伝えていきたいと思う。日本の法案の組み立て方なども含め、解説していけたらと思う。

- 国民の関心のあるテーマであり、引き続き丁寧な説明をしていってほしい。
- 4月18日(土)のE TV特集「終わりなき戦い～ある福島支援プロジェクトの記録～」を見た。低線量被ばくから福島に住んでいる人たちを守ろうとする、安齋育郎さんという科学者を中心にした専門家たちのきめ細かい活動の様子が描かれていた。例えば採れたマツタケの放射線量を測ると1キロあたりの数値が高かったが、もともとマツタケは少量しか食べないので、子どもには食べさせられないが、大人は食べてもよいかと言う住民の問いに対し、安齋さんは「私も食べます」と答えていた。安齋さんも本当はわずかな放射線でも嫌だろうが、そうは言わずに、そこで生きざるをえない人たちがぎりぎりどこまで大丈夫なのかを、ヒステリックにならずに分かりやすく説明していた。長い間ボランティアとしてよく活動してこられたと非常に感心した。福島の人たちに見てもらえれば、どうやって生きていけばよい

のかよく分かるようなよい番組だった。

- 4月25日(土)のE TV特集「小さな命のバトン」を見た。熊本の慈恵病院が“赤ちゃんポスト”を設置したときに、半分が賛成で、半分が赤ちゃんを安易に置くのでないか、親を知りたいと思ったときに知る権利が守られないのでないかという批判があったことを知っていたが、今回の番組では、その後病院が始めた「赤ちゃん縁組み」などの取り組みの様子が描かれていた。レイプによって妊娠し自暴自棄だった若い女性が、赤ちゃん縁組みが決まり、一生懸命におなかの赤ちゃんを育て出産し、縁組みしたお父さんとお母さんに引き渡す様子など、次々にすごいと思う状況が描かれていた。赤ちゃんの遺体がポストに置かれるということが起こり、丹念に調べた結果、誰の助けも得られず、赤ちゃんを産めない事情を抱えた女性が、自力で産んだが助けられず、どうしても捨てる気になれずにポストに置いたということが分かった。単なる死体遺棄という話ではなく、その女性の苦労が描かれ“赤ちゃんポスト”があることで救われている人がずいぶんいることが分かった。また、赤ちゃん縁組みでもらった子どもを育てている母親が、その子どもに対して丁寧に生い立ちについて説明し、「お母さんはあなたが生まれてきてくれて本当にうれしい」と伝える姿など、命が本当に大事にされている様子が描かれていた。“赤ちゃんポスト”で努力している人たちの意味、若い人たちがどれほど厳しい状況の中で子どもを産まざるをえないのかということも見えてきて、命を考えさせられるよい番組だったと思う。総合テレビで放送したらもっと多くの人が見られたのでないかと思う。多くの人に見てもらいたい番組だった。
  
- 録画して息子と何度も見ている好きな番組が「びじゅチューン！」だ。大人が見るような美術品、絵画などを大変くだけた発想で紹介する番組だ。番組に対する賛否はいろいろあるようだが、この番組がきっかけとなり、本物に触れたときに子どもが飛びつき、本物を知りたい気持ちがそそられ、知識欲も増えていくと思う。番組のホームページで過去の放送分を見ることができるが、「あしゅらコーラス」と「ファッションスタ大仏」の放送分が見られない。何か理由があるのかもしれないが、よい番組は、さまざまな人に伝播(ば)していくもので、見ようと思ったら見られなくなっていることがあってはいけないと思う。公表する前に準備をきちんと整え、永遠に残せる自信のあるものを残してもらいたい。
  
- 4月23日(木)の生きるためのテレビ「“自死遺族”の声から」を見た。「生きるためのテレビ」では死にたいと思っている若者たちの声を聞いてきたが、今回は自死遺族の方たちの話だった。2人の方がスタジオに来ていたが、よく自分の経験を話されたと思う。その話を聞いて、死にたいと思っている人たちに、死なないで

生きなさいというメッセージがうまく伝わったのならばよかったと思う。大変重い番組だったが、さらに進んでもっといろいろな角度から「生きるためのテレビ」を続けていただきたいと強く感じる。

- 4月28日(火)のRの法則「男子失恋カフェ」を見た。今どきの男の子はどうかとときに失恋するのかと思って見たが、昔も、今もあまり変わらない失恋模様だった。おもしろかったのは、失恋カフェということで、話が終わった後に処方箋がわりのスイーツが出されるのだが、シュークリームの中にワサビが入っていたり、自分をよく見なさいという意味で鏡のフタがついた容器にスイーツが入っていたりしたことだ。こんな番組もあるのかと楽しく見た。
- 少し前のことだが、3月27日(金)に「第87回選抜高校野球 第7日」をラジオで聞いていて、アナウンサーのサ行の発音が大変気になった。敦賀気比対仙台育英の試合だったが、発音が気になってしまい試合の内容が頭に入らなかった。アナウンサーのトレーニングはどうなっているのだろうと気になった。

#### (NHK側)

一般的に高校野球の実況については、スポーツ実況にだけた、特別な研修を積んできたアナウンサーが担当する。ただし、すそ野を広げていくために、そのときどきに新しい担当者を加えることもある。その力量がどの程度かを見る場でもあるためだ。そのようにして経験を積み、技術を高めることを心がけている。ご指摘は重く受け止め、滑舌などについては十分に注意し、指導していきたい。

- 5月13日(水)の朝6時に東北で地震があり、地震速報が始まったが、何も被害がないのに40分ぐらい延々と伝えていた。棚から物も落ちていないのに、アナウンサーが役場の人に「何か変わったことはありませんか」と一生懸命に質問していた。地震が起きた際の基準はあるのだろうが、民放は普通の番組を放送しており、あまり問題がないときは早く終わったほうがよいのではないかと思う。検討してほしい。
- 最近のニュースの構成について感じたことをひとつ。原発の再稼働問題や沖縄の米軍基地問題、安保法制問題などで、それぞれ賛成、反対の立場のコメンテーターに一人ずつほぼ同じような時間の長さで語らせたり、政府とそれに反対するグループについて、担当記者が一人ずつほぼ同時間で説明したりする場面が増えたように感じる。

ストップ・ウォッチを片手に計ったわけではないので、ただの印象かも知れない。前から常用している手法かも知れない。だとしても、こうした方法にはやや難点があるのではないだろうか。つまり、どんな問題についても明確な賛成派と反対派しか登場しなくなりがちだということだ。しかし、ほとんどの問題は、単純な二項対立で描いてみてもその核心に迫るのは難しい。何についても賛成と反対の間には、無限のグラデーションがある。そして多くの視聴者の考えも、そのグラデーションの中で揺れ動いていると思う。問題の視点を二元化することは、解決策をさぐるための議論を深めるよりも、むしろ最も距離の離れた賛否のグループの陣地取りゲームに付き合わされることになりはしないか。それは、それぞれの陣営から文句が出ないようにすること、あるいはそれぞれの陣営の留飲を下げることに つながるにしても、その問題の解決に向けて議論を豊かなものにするということには必ずしもつながらない。激しい対立がある問題について多様な意見を紹介するのはメディアの使命だと思うが、賛否の二項対立に還元してしまうべきではない。論争を呼ぶテーマでどのような人にコメントを求めるか、という問題は、賛否両派に平等に、ということ为原则にするのではなく、むしろ問題を相対化してみせられる人にコメントを求めるべきではないだろうか。聴く前から想像がつく意見よりも、視聴者が「なるほどそう考えることもできるか」と思わず膝を打つような視点が望ましい。これはNHKだけでなく、新聞も含めメディアが多様な視点を提供するという仕事をするうえで陥りやすい罠(わな)だと思う。それを避けるのは難しいことだけれど挑戦してほしい。

NHK編成局  
番組審議会事務局

## 平成27年4月NHK中央放送番組審議会

4月のNHK中央放送番組審議会は、20日(月)、NHK放送センターにおいて、12人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「クローズアップ現代」報道に関する調査報告について説明があったあと、経営計画における「達成状況の評価・管理」(26年度第4四半期・1～3月、24～26年度全体)について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、5月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	北城恪太郎 (日本アイ・ビー・エム(株)相談役)
副委員長	小林いずみ (前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官)
委員	有森 裕子 (元マラソンランナー)
	大野 博人 (朝日新聞社役員待遇論説主幹)
	大日向雅美 (恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授)
	小田 尚 (読売新聞東京本社専務取締役論説担当)
	倉重 篤郎 (毎日新聞社論説室専門編集委員)
	佐野真理子 (主婦連合会参与)
	龍井 葉二 (連合総合生活開発研究所客員研究員)
	東儀 秀樹 (雅楽師)
	永田 紗戀 (書家/花咲く書道 Studio Saren. Nagata 主宰)
	谷口 肇 (全国農業協同組合中央会常務理事)

### (主な発言)

<経営計画における「達成状況の評価・管理」

(26年度第4四半期・1～3月、24～26年度全体)について>

- 「世帯視聴率(3年間の推移)」を見ると、午前(6～10時)の総合テレビは2012年度が8.4%、2013年度が9.2%、2014年度が9.7%と向上している。「連続テレビ小説」や「あさいち」の好調さが要因だと思うが、大きな進展で、よかったのではないかと思う。

「波の質的評価に影響を与えたジャンルと番組」で「1. 丁寧に取材・制作されている」、「2. 正確な情報を迅速に伝えている」についても、特に貢献した番組として、「あさいち」、「ファミリーヒストリー」、「プロフェッショナル 仕事の流儀」、「歴史秘話ヒストリア」、「英雄たちの選択」などがある。私もいろいろ視聴しているが、それぞれNHKらしい番組で、ほかの放送局ではできないような取材力を感じる番組だと思っている。引き続きよい番組を制作してもらい、なおかつ視聴率が取れるように、視聴者に満足いただけるように努力して行ってほしい。

- 週間リーチは1週間に5分以上、NHKを視聴した人のデータだと理解している。NHKの全国的な存在感、どの家庭もテレビがあり、受信料を払って視聴していることからすれば、1週間に5分ぐらひは必ず誰かがNHKを見ているのではないかという気がする。それでも総合テレビでおおよそ7割ということだ。残りの3割は1週間に1回も視聴していないことになる。その人たちはもともとテレビを持っていない人なのか、民放ばかり見ている人なのか。おおよそ7割であれば十分な気もするが、その7割の構造と対策をどう考えているのか。また、活字メディアはいろいろな面で存在感が下がっている中、テレビはこれから先も当分、リーチも上がるし、視聴率もある程度維持できるという前提なのか考えを聞きたい。

(NHK側)

トータルリーチの調査結果は、全回答者がおおよそ5,000人で、NHK全体への接触者率が69.4%だ。放送文化研究所などで調査を行っても、1週間単位で見るとNHKに全く触れない人が2割～2割5分程度存在している。民放でも1～2割程度接触していない人がいる。その人たちがテレビを持っていないわけではないと思う。また、ワンセグやパソコンなどを利用して、放送コンテンツに何らかの形で触れる可能性はある。NHKとしては、年層別に見ても、さまざまなコンテンツがあり、さまざまな人に受け入れられる要素はあると思っている。リアルタイムだけではなく、インターネットや録画視聴などでもコンテンツを知ってもらえれば見てもらえるのではと考えている。特に若い世代はコンテンツを知らないから接触していないという現状がある。いろいろな方法を駆使し、まずは触れてもらうところに注力したい。放送という媒体自体がこの先どう変化していくのか、若い世代が触れていないことは確かだが、放送コンテンツそのものが敬遠されているかどうかは簡単に判断できない。これからどのよう

に認知してもらい、接触してもらおうか、どれだけ幅を広げられるかにかかっていると編成の現場では考えている。

- 視聴者の動向をつかむことは大変難しくなっていると思う。テレビだけでなく、スマートフォン、インターネットなど、多様な方法でアクセスする人たちの動向をどう捉えるかは難しいだろうが、今後とも詳細な分析を続けてもらえればと思う。  
「各波の男女年層別週間リーチ」は5分以上視聴した人の割合だが、年代によってこんなに違うのかと興味深かった。さらに5分ではなく、15分ぐらいを1つのユニットとして調査すると、全く減らない年代層と激減する年代層が出てくるかもしれない。そこで改めて視聴傾向の年代別の特徴がつかめ、それらの傾向をどうつかんでいくのかがより明確になるのではないかと思った。
- 今後の調査でそういうデータも調べてもらえたらと思う。

#### <放送番組一般について>

- 「クローズアップ現代」報道に関して、自民党から事情を聞かれたとのことだが、対応するにあたって議論はあったのか。今後も説明の要請があった場合、同じような対応をするのかが気になる。

#### (NHK側)

自民党の調査会に呼ばれ、堂元副会長が対応した。対応することに至った経緯について、私は詳細を承知していないので、答えることはできない。一般的にいえば、NHKの予算審議の過程等でも、民主党、自民党、維新の会などの部会に出席を要請され、さまざまな問題についての説明をしている。基本的にはその延長線上にあるという判断をしたのではないかと思う。

- ほかの政党と同じ性格づけという認識か。

#### (NHK側)

今回、自民党の調査会は「クローズアップ現代」にやらせがあったと報道されている件、テレビ朝日の番組の件、その2点に絞ってということだった。それ以上の詳しいことにつ

いては承知していない。

- このところNHKではやらせ問題などが、新聞や週刊誌等で報道されている。番組審議会においては、やらせ問題はとても大きなテーマだと思う。中間報告を公表した際に、公表したことを私たちに伝えてくれなかったことにごっかりした。番組審議委員には必要な情報だと思う。

(NHK側)

今後、十分に注意したい。

- 4月9日の段階では中間報告ということで、あの程度の説明になると思うが、それから10日ぐらいたっているのに何も説明がなく、どう進展しているのか分かりにくい。最終結論は出ないまでも、中間報告のあと、いろいろ調べた中で分かったことなど情報があると思う。何らかの形で分かったところまででも話をしたほうがよいのではないか。現状のNHKの説明では不十分な印象を受けた。

(NHK側)

それは大変難しい問題だと思う。私も調査委員会の1人で、実際の審議の過程を承知している。今回の問題は当事者の発言が真っ向から食い違っていることだ。事の真偽をどのように判断するのも含め、詳細な調査をしたうえでないと報告をまとめることは難しいと思う。当事者の聞き取りは1回だけではなく、2回、3回と繰り返し行っている。それぞれに弁護士に立ち会いをお願いし、誘導的、強制的な調べでない形で当事者の方たちの話を聞いている。時間がかかりすぎではないかという指摘もわれわれは重々承知しているが、重要な問題を含んでいる関係上、そこはご容赦を願いたい。

- 時間のたつこと自体が信頼を失うところもある。迅速に調査をし、公表してほしい。
- NHKスペシャル「戦後70年 ニッポンの肖像」が始まった。4月18日(土)のNHKスペシャル「戦後70年 ニッポンの肖像—日本人と象徴天皇—」第1回「“戦後”はこうして誕生した」を見た。このシリーズは、憲法第1条の天皇制から始まらざるをえないのだろうと思う。天皇陛下のペリリュー島訪問から始まるのが入り口としてもよいと妥当性は感じた。天皇制の捉え方も両方の意見が入っており、

バランスが取れていたと感じた。マッカーサーが、日本の統治のために天皇制を使うことを選択する流れがきちんと描かれていた。また昭和天皇が退位すべきか、日本国民の間にも両論ある中で、昭和天皇が日本国家のために退位しなかったという場面もあった。その証拠の1つの資料として稲田周一元侍従長の備忘録が紹介され、昭和天皇の肉声として「マッカーサーから退位しないでほしいとの希望があった。それは極秘であった」というような文章があった。初公開の資料とのことだった。天皇が退位しない意向だったことは知っていたが、マッカーサーから希望を受けての天皇の判断だったことは知らなかった。それだけでも大きなニュースになったのではないかと思う。さらっと触れられていただけだったが、ニュース判断はあったのか。

- 「NHKスペシャル 戦後70年 ニッポンの肖像－日本人と象徴天皇－」の稲田元侍従長の備忘録は特別なニュースなのか。極秘とあったため関心を持った。すでに知られている事実なのか。

(NHK側)

稲田元侍従長の備忘録については今回が初出だ。どう扱うかは今後相談をしてからになると思う。

「NHKスペシャル 戦後70年 ニッポンの肖像－日本人と象徴天皇－」の稲田元侍従長の備忘録の件に補足をしたい。昭和天皇がなぜ退位しなかったかというくだりの理由そのものについては、元侍従長の徳川義寛さんが遺したメモの中に、「稲田侍従長が承った要旨」として「退位すると混乱に陥るし、マッカーサーからも退位しないよう連絡があった」という趣旨の話が書かれてあり、公刊もされている。あの文章そのものは初出だが、事実が稲田元侍従長本人の備忘録からも確認できたという経緯だ。

- 私も「NHKスペシャル戦後70年 ニッポンの肖像－日本人と象徴天皇－」を見たが、大変よい番組だった。若い世代に見てもらうために、エッセンスのところだけでも15分ぐらいにまとめるような情報の提供方法はないだろうか。若い世代に見てほしいが、内容時間的に、なかなか見てももらえないのではないかという印象を持った。

(NHK側)

「第1回 “戦後”はこうして誕生した」と4月19日(日)の「第2回 平和を願い続けて」は、30代男性について、ふだんよりも多くの人に見ていただいております、関心が高く推移したと思う。豊富な内容を丁寧に構成した番組であり、これ以上短くするのは難しいのではないかと思います。一方、本放送の前には広報番組として「Nスペ5min.」を放送しており、これは時折ネット展開をしている。エッセンスでの15分というのは、ネット時代でもあり、歴史を扱う番組も可能かどうか検討したい。

- 今の天皇陛下の沖縄にかける思い、慰霊の気持ちは知られていなかったところもあると思う。大変よい番組を制作したと思うが、若い世代には49分は長い。検討してほしい。
- 2月25日(水)の歴史秘話ヒストリア「天皇のそばにいた男 鈴木貫太郎 太平洋戦争最後の首相」を見た。太平洋戦争末期の首相としての、二・二六事件からポツダム宣言受諾に至る史実を大変よく描写していた。二・二六事件を語る音声テープの紹介、天皇の「聖断」を仰ぎつつ内閣をまとめ、終戦に至った一連のつらさ、厳しい状況にあったことが臨場感を持って伝えられていてよかった。
- 報道番組と解説番組についての感想と提案を述べたい。4月に入ってからニュース番組でラインアップを表示するようになった。今伝えているニュース、これまで伝えたニュースが一目で分かるようになった。「NHKニュース おはよう日本」はできるだけラインアップが分かるようにしてほしいとお願いしたこともあったので、今回の改定はよいと思う。新しいニュースには「NEW」と表示されている。ネットや一部の民放ではすでに実施していることだが、遅ればせながらもNHKが始めたこともよいと思う。ただ、民放と全く同じようにしなくてもよいと思うのが色だ。ニュース項目の文字と背景色を黄色と赤色にしているが、落ち着かない色だ。もし色を付けるならばジャンル別に分けるなど、工夫ができるのではないかと思います。
- 法律が新しく制定されたときや法案が用意されたときに、端的に内容を説明するが、賛否の意見がある場合でも、それは中立的でないといけない。法案を作った側の意図や効果ではなく、何がどう変わるのかという実務的なことを言わないといけない。これから重要な法案になる労働基準法、働く人たちのルールを変える法案が、4月3日(金)に閣議決定され、「NHKニュース7」でも報道された。新しい制度について、「対象となる人の労働時間の規制が外れ、働いた時間ではなく、成果で

報酬を得るものだ」という説明があった。翌朝のラジオでも同じ説明をしていた。これは、明らかなミスリードで、誤解があると思う。「成果で支払う」ということばは法律の準備段階にあったが、審議会にかかり、法律になるとときには消えている。だが報道では、前のことばをなぜか引きずっており、誤解を生む可能性がある。新しい制度の対象者は、「時間と報酬に直接的にあまり関連がない人」という説明書きがあり、そのことばも残っている。実際には対象になったからといって賃金制度が変わるとは一切書かれていないし、保証もない。恐らく変わらないと思う。私が説明するとしたら、「労働時間の規制の範囲、適用者、裁量労働制の範囲が変わる」と1行で済む中身だ。民放や新聞も同じミスリードをしているが、厚生労働省がどう説明をしようが、民放や新聞社がどう説明をしようが、NHKにはそこに左右されないでほしい。再検討をお願いしたい。4月3日(金)の「ニュースウオッチ9」では、実例として、「今回の法律によって成果が上がれば3時に帰れる」というような紹介も出ていた。何に基づいてそういう説明をされたのか聞きたい。

#### (NHK側)

産業競争力会議の文章にあった「成果で支払う賃金制度」という文言が、法案で消えたという指摘があった。これについては、成長戦略の中で「時間ではなく、成果で評価する働き方を希望する働き手のニーズに応える」と記されており、法案の要綱でも新しい制度の名称について「特定高度専門業務・成果型労働制（高度プロフェッショナル労働制）」と、成果型という文言を明記している。また、法案で制度の適用条件として「高度の専門的知識等を必要とし、その性質上従事した時間と従事して得た成果との関連性が通常高くないと認められるもの」と記されている。厚生労働省の説明では「時間ではなく、成果で評価する働き方の必要条件として記した」としている。そのため、働いた時間ではなく、成果で報酬を決めるという表現を使っている。閣議決定し、政府が提出した法案であり、政府の法案提出の意図、目的を紹介したうえで説明した。この法案については賛成論、反対論もある。柔軟で多様な働き方ができ、労働時間も減るという賛成意見とともに、長時間労働の抑制策が不十分で、長時間労働を助長する、対象の労働者が最低限のルールのプロテクトさえ受けられなくなるという批判もかなりあると承知しており、賛成論と反対論をバランスよく伝えていく。「ニュースウオッチ9」では、「成果が上がれば3時に帰れる」とは紹介していない。制度

を紹介するためにAさんとBさんを想定したアニメを使っている。仕事を終えたAさんが帰る時間で、後ろにある時計が3時になっていた。分かりやすくするために6時、9時ではなく、3時ということもありえるという1つの例として挙げた。この法案ができれば3時に帰れることを意図したものでない。この法案は賛否両論があるので、問題点も含め、幅広く意見を紹介していきたい。

- 賛否も意図も別の話だ。実務的に何が変わるのかという説明についてだ。意図があるのであればそれを報道すればよい。法案の説明の能書きで、なぜ「成果で支払う」ということばが入るのかという単純な質問だ。文言が残っていても、事実関係として賃金が変わることはどこからも出てこない。それは別の報道で伝えてほしいということだ。再検討をよろしくお願いしたい。
- 4月5日(日)の日曜討論「農協改革・TPP“農業再生”の道筋は」の評価、反応がどうだったのか教えてほしい。
- 4月11日(土)、18日(土)の超絶 凄(すご)ワザ!「真球頂上決戦～日本VSドイツ～」は、日本とドイツで真球を精緻に作る対決で、科学技術のドイツ対職人技の日本というコントラストの効いた戦いでドラマチックだった。最後にどちらが優れているか競い合う際にハプニングが起き、日本チームの真球が挑戦前に落下してしまい番組が終わっていたが、次回再挑戦するそう。次回も楽しみにしている。

(NHK側)

「超絶 凄(すご)ワザ!」は、今日再度の対決を収録する予定だ。

- 「超絶 凄(すご)ワザ!」は、私も見たが、どうなるのかと思ったところで次週となった。最初からそういう予定だったのか。

(NHK側)

そうではない。発射台の調子が悪く、これでは勝負にならないということになった。ドイツもベストの状況で戦いたいと同意してくれたため、日を延ばして実施することになった。

- 超絶 凄 (すご) ワザ! 「真球頂上決戦～日本VSドイツ～」は、日本チームの真球が落下した瞬間にどうなるのかと思った。次回の再対決の結果、落としどころをどうするのが気になっている。アナログか、機械技術か、その差を出すだけの結果にだけは終わってほしくない。人間はこういうことができるという意味で、ドイツはドイツのよさ、日本は日本のよさがあるという結末になるといいと、ドキドキしながら待っている。
  
- 4月12日(日)の統一地方選挙の開票速報で、開票率0%の当確とは何なのかについてきちんと説明がされていた。前回の選挙の後の番組審議会が開票率0%の当確とは何なのかという意見があったことに対応したのだと思う。よい取り組みだ。
  
- 福井地方裁判所の高浜原発の再稼働差し止め訴訟に関するニュースと解説について批判をしたい。4月15日(水)の「NHKニュース おはよう日本」で高浜原発再稼働差し止めの事実関係を伝えていた。このニュースの肝は、ニュースでも伝えていたが、「原発の新基準は緩やかすぎ、安全性は確保されない。だから再稼働を認めない仮処分を出した」ということだ。その後で2人の識者とされる人のコメントを紹介していたが、なぜ2人とも反原発派、脱原発派なのか。放送法第4条第1項第4号に反しているのではないかという気がする。1人は東京電機大学の助教で「安全性が確保できないという、原子力規制委員会はずっと社会の意見を聞け」と言っている。もう1人は「地震動しか判断していない。火山動にも目を向けろ」という発言だった。これらは、判決を踏まえたコメントになっていない。2人とも知名度のある方ではなく、これから育てていこうという気持ちがあるのかもしれないが、多くの人が見ている「NHKニュース おはよう日本」、「ニュースウオッチ9」はコメンテーターの質も求められると思う。ある程度しっかりとした人を出してもらいたい。樋口英明裁判長は新基準の考え方を否定し「これに適合しても安全性を確保できない」と言っている。普通に考えるとゼロリスクを求める非現実的な考えだと思う。新基準が緩やかすぎると言うのであれば、それを示すデータが必要だ。それを抜きに安全性は確保できないという判断をしているところ、論理を飛ばしているところが問題だ。その意味でいうと、NHKもバランスをとった解説がなぜ付けられないのかと思う。最近の原発訴訟での差し止め判決は、樋口裁判長が1年前に出している大飯原発と今回の2つだが、まずその判断が特異だという指摘があってよいと思う。原発訴訟では、最高裁が1992年の四国電力の伊方原発訴訟で「原発の安全審査については高度で最新の科学的、技術的、総合的な判断が必要で、行政側の合理的な判断にゆだねられている」という判決を言い渡している。そういう意味でも福井地裁は踏み込んだ判決をしている。4月15日(水)の時論公論「高

浜原発“再稼働差し止め”の衝撃」では、「東日本大震災後、裁判所の判断が変わった。今後の審査に影響を与える」と解説しているが、控訴審を見ないで言うことは少し短慮だと思う。東日本大震災前、2006年の金沢地裁での志賀原発差し止め訴訟で、差し止めの判決が出ているが、その後、高裁で逆転判決、最高裁でも上告が棄却されている。東日本大震災後に裁判所の判断が変わったというのはミスリードではないかという気がする。高浜原発訴訟の一連のニュースで、原告のことを「住民側」と表現しているが、この原告は京都、大阪、兵庫の運動家の人たちだ。4月の福井県知事選では現職の西川一誠さんが「原発ゼロでは日本は成り立たない」と主張し、得票率8割で再選されている。今回のニュースの場合は、「一部の住民側」と言うべきだと思う。

#### (NHK側)

高浜原発訴訟の一報を伝えた際には、「全面勝訴」「住民側」という表現を使ったが、それだけでは足りないと考え、「NHKニュース7」では、「そういう判決が出たが、仮処分の決定には異議申し立てなどができ、最高裁まで争うことが可能で、その過程で決定が覆れば仮処分の効力は失われ、逆に取り消さなければ効力が続く」と説明した。菅官房長官の「独立した原子力規制委員会が専門的見地から十分に時間をかけ、判断したものであり、政府としてはそれを尊重し、再稼働を進めていく方針に変わりがない」というコメントや、高浜町の野瀬豊町長の「司法の判断は重いと認識しているが、やるべきことを自分の責任で判断することによって変わりがない」というコメントも伝えている。時論公論「高浜原発“再稼働差し止め”の衝撃」で解説委員は、「決定を出した3人の裁判官のうち2人は去年大飯原発の運転差し止めを命じる判決を出した裁判官で、司法の判断が変わったとするのは早い」と言い、「ただ、世界最高水準と自負する規制基準が全否定されたのだから、原子力規制委員会は裁判所の指摘を検証し、基準に反映すべき点がないのかどうか、審査方針に変更がないのか、広く国民に考えを示す必要があると思う」と述べている。「ニュース シブ5時」では、原子力規制委員会の田中俊一委員長が会見で「新基準について世界と比較し、最も厳しいレベルにあることは国際的にも認知されているが理解されなかった」と述べ、現状で基準を見直す考えがないことを明らかにしたことも伝えた。「NHKニュース おはよう日本」

はもう一度確認し、バランスが取れるように検討したい。

- 田中委員長の会見をニュースで扱ったことは的確だったと思う。コメントした識者2人がともに反原発の立場ということは、識者がこう見ていると偏った印象を与えかねない。確認をしてもらったほうがよいと思う。
- コメンテーターの質も考えてほしい。自分勝手に話をしているだけで、判決と組み合っていないかった。
- 4月16日(木)のアニメ「英国一家、日本を食べる」(新宿・思い出横町)を見た。前半がアニメ、後半が実写という構成で、非常におもしろい番組だと思った。これからどういう展開になるのか楽しみだ。放送が深夜だが、誰をターゲットにしているのか不思議だ。一般の人が見やすい時間の方がもっとよいのではないか。今から時間帯を変えることは無理かもしれないが、再放送なりで工夫してほしい。

(NHK側)

「アニメ 英国一家、日本を食べる」はNHK国際放送と連動した新しい試みだ。国際放送で英語版を放送し、日本語版を国内向けに放送している。アニメというと子どもや若い世代向けが多いが、テーマ性も考慮し、もう少し年代の高い方にも見ていただけるような試みで制作している。秋まで放送は続く予定で、今後の展開にも期待してほしい。再放送は火曜日の午後4時5分から放送している。

- 4月19日(日)の大河ドラマ「花燃ゆ」で「草莽崛起(そうもうくつき)」という難しいことばが出てきた。私は字幕放送を表示して見ていたため理解できたが、普通の人であれば理解できないのではないかと思った。

(NHK側)

大河ドラマ「花燃ゆ」では初回から難しい漢語がたくさん出てきている。制作現場には「難しいものはちゃんと文字で示したほうがよい」と言っている。どこまでを文字で表すのかは検討したい。

- 連続テレビ小説「まれ」は、大変春らしく、毎朝元気をもらっている。子どもも好きで、「『まれ』を見せない」と言うと早く着替えてくれるので助かっている。

展開がかなり速く、単純にワクワクし、毎日楽しみにしている。希の父親のキャラクターと大泉洋さん本人のイメージがぴったり合っていて思わず笑ってしまうし、田中裕子さんも貫禄があり、毎日見ていると気持ちがいい。主題歌を土屋太鳳さんが作詞したと聞いた。土屋さんのブログも毎日見ているが、本当に希のような感じで初々しく、とてもすてきな人だと思う。「花子とアン」では花子の妹役だったが、全く違う印象だ。同僚にも大人気で「まれ」のことを話してから仕事を始めている。

- 連続テレビ小説「まれ」はテンポが速く、楽しく見ている。逆に大河ドラマ「花燃ゆ」はテンポが遅い感じがする。実在の人物を取り上げたドラマなので簡単に速くはできないのかもしれないが、もっと展開があったほうがよい。1週分見逃すと前の週の内容について気になるものだが、最近は見逃しても気にならないと家族も言っている。今後の展開に期待したい。
  
- 4月4日(土)のE T V特集「“グローバル人材”を育成せよ～京都大学・改革への挑戦～」を見た。京都大学の取り組みや、大学へのアンケート調査のデータなどは興味深かったが、焦点を絞り切れていない印象を持った。番組を構成していた京都大学のルポの部分、大学へのアンケート結果、グローバル大学かローカル大学かという富山和彦さんの仕掛けた論争の話などが有機的に結合していない印象も持った。これは番組の中でも何度か触れられていたが、グローバルリーダー、グローバル人材ということばの意味が依然として混乱したままで、定義が定まっていないためだと思う。番組の中で出てきたいくつかのコンセプトを考えると、グローバルリーダー、グローバル人材という場合、個人にとってのグローバルスキルを身につけさせる教育の問題と、社会にとってどんなグローバルリーダーが必要かという問題があると思う。それはさらに2つに意味が分かれていて、例えば日本が生き抜いていくためのリーダーの話なのか、あるいはグローバルコミュニティそのものにとつてのリーダーの話なのか、その辺りの位置づけがあいまいなままのような気がした。安倍首相や下村文科相が、世界の大学ランキングで日本を上位に上げたいと言っているが、それは日本がグローバル時代を生き抜くうえで必要なリーダーを育てるといふ話のように聞こえた。また、一方で京都大学が育てようとしているのは日本のリーダーでなく、グローバルコミュニティにとつてのリーダーであるとも感じる。富山さんなどが行っているグローバル大学かローカル大学かという話は、個人がこれからのグローバル時代をどう生きてくのかというスキルを、どう与えるかという話のような気がする。半ばしかたがないところもあると思うが、このように、グローバル人材、グローバルリーダーというコンセプト自体が混乱したまま日本では議論が進んでいる。京都大学の人たちもそれで悩んでいて、それがそのまま番組に表れていたと思う。グローバル人材とは何なのかということ巡る混乱そのものを相対

化し、整理して見せる視点があると、いくつかのおもしろいテーマがもう少し有機的に結び付いたのでないかと思う。大事なテーマだと思うので、これからも取材で掘り下げてもらいたい。

(NHK側)

京都大学の試みそのものも指導教官を含め、手探りの状態だったと思う。そういう手探りの状態をルポしたらどうかと制作現場には伝えた。もう少し相対化し、混乱の様子を整理して見せられればよかったが、取材をする側が整理しきれなかった面がある。これをきっかけに、また次の段階に進んでいきたいと思う。

- 4月18日(土)のE TV特集「終わりなき戦い～ある福島支援プロジェクトの記録～」を見た。福島県は国によって除染が進んでいるが、住んでいる方々は不安に感じている。ある科学者のグループが福島県に足を運び、出張所のような形で専門的な知見から相談を聞き、自分たちの体を使って問題を解決するという「福島プロジェクト」の活動を追いかけたドキュメントだ。定点観測で追いかけたドキュメントだったが、だんだんに震災のことが忘れられてしまう中で、忘れさせないというこだわりのある人たちの行動を追うことは意義があると思った。活動している人たちの平均年齢は66.6歳で高齢だ。科学者として実績を持っている方々で信頼性も高く、テレビを見ている老人たちにとっても刺激を与えるような意味のある番組でもあったと思う。
- 3月24日(火)、25日(水)のハートネットTV「生きるためのテレビ2」を見た。昨年10月に20代の自殺が多いということで「生きるためのテレビ」が放送され、この審議会でも意見交換したが、それに続く番組だと思って見た。「生きるためのテレビ」は大変印象的、衝撃的で、いまだに心に残る番組だが、今回は二番煎じで、昨年の続きとしてはもったいない番組だった。出演者の人選が適切でなく違和感もあった。ただ、若者が発言できる場としてはよい番組なので、工夫しながら続けていただきたい。メールでのメッセージの中で、50代の方からの「10代のときから死にたいと考えていて、“死にたい”に免疫ができた」というコメントが紹介されていた。若い人たちだけでなく、今回紹介された50代の方のように、大人の意見を紹介することもよいのではないかと感じた。今回の番組では、死にたいという気持ちを受け止めてくれる場所や、相談員の自己紹介をきちんと伝えていたことがよかった。宗派を越えてお坊さんたちが相談窓口を設けていることにも驚き、また1つ情報が増えたと感じた。寄せられたメールを読むときの間の置き方、背景

の映像、音楽の構成がリラックスできるもので、うまくできていると思った。年を取ると、映像を見ながら、ことばを聞きながら、ツイッターの文字を読むのが大変だ。若い方は読めるのかもしれないが、ツイッターの文字の表示が速く、長文だと読み込めないうちに次々先に進んでしまう。印象的な文章もあるので、もう少し工夫してもらえたらうれしい。

(NHK側)

ハートネットTV「生きるためのテレビ」は4月23日(木)に3回目を放送する予定だ。遺族、残された家族に焦点を当てた番組となる予定だ。

- 3月28日(土)の第44回日本農業賞「新しい農業を切りひらく！」(Eテレ 後4:00~4:43)を絶賛したい。受賞されたプロ農家をととても分かりやすく紹介していたと思う。リポーターの春香クリスティーンさん、篠山輝信さんという若い2人のおかげで、番組が明るく楽しくなり、また内容も難しくもなく、大変よかった。彼らが「あさいち」や「うまいっ！」などの番組で育てられていることも後で知った。番組の流れもよかったと思う。趣味と農業の両立を求め、新規就農する方々が助け合いながら産地復活へ向け頑張っている活気ある姿に始まり、消費者の目線で技術改良を続ける個別農家、後継者問題や耕作放棄地問題などから地域を守るためにみんなの土地をみんなで耕作する姿など、地域の工夫による多様な農業の展開が紹介され、とても有意義だったと思う。また、「ラジオあさいちばん」では、2週間にわたって日本農業賞受賞者のインタビューを放送していた。苦労や喜びの声に直接触れることができよかった。
- 4月5日(日)のドキュメンタリーWAVE「破綻する影の銀行～中国社会を揺るがす新たな危機～」を見た。中国で起きている民間投資会社の破綻の問題を取材しており、どういう問題が起きているかよく分かった。中国政府がこの番組の取材をよく許したと思う。住民と地方自治体との対立場面があったが、取材をするにあたって問題はなかったのか。また、すぐには難しいとは思いますが、続報があればぜひ見たい。

(NHK側)

中国への取材は、地方政府に食い込むなど、いろいろなルートで入っていく。中国というお国柄、中央政府による取材の制限などもとときにはあるが、地方や市井の中に入る取材ではその限りではないこともある。ディレクターたちもそれぞれ

のルート、ノウハウを持っている。そういったものを駆使し、日本の皆さんに中国の実情をいろいろな角度から伝えるために頑張っている。今回の番組は視聴者からも好評だったので、今後もフォローし取材を続けていく。形になったらまたドキュメンタリーで伝えたいと考えている。

- 3月28日(土)のザ・プレミアム「“まつり”にかけた演歌道～北島三郎 最終公演～」(BSプレミアム 後 7:30～9:29)を見た。「まつり」は、私の恩師が好きな歌で、この歌を聴くと、毎回カラオケで思いを込めて歌う恩師の姿が浮かぶ。なぜ恩師は「まつり」を毎回歌っていたのか、恩師が亡くなってから私も一度だけ歌ったことがある。そのときは分からなかったが、この番組を見て、北島さんの「まつり」に対する思いと意気込みが分かった。通常、何かを極めた人に、「なぜ続けているのか」と問いかけると、「好きだから」という答えがお決まりのように出てくる。人間は、物事を選ぶときに好きか、嫌いだけの固定観念に陥りがちだ。しかし、番組の中で北島さんからは「歌が好きだから」ということばは一度も出ず、「自分の仕事だから」と話していた。北島さんは、歌にかけるプロフェッショナルだと思った。どれだけ苦しくても、きつくても、やらなければいけないという思いを持って、その状況を楽しみ、いろいろな人と分かち合う強さの中で、あそこまで続けてこられたという思いを表現されていた。好きでないとすぐにやめてしまう、好きなことに対してしか力を出せないという弱いところを北島さんに締めてもらったような感じがした。
- 4月19日(日)の「ワラッチャオ！」という子ども向け番組を見た。子どもたちをただ笑わせる全く新しい子ども番組ということで、子どもと一緒に見た。子どもも笑っていたが、大人が見てもおもしろいような笑いだった。「おかあさんといっしょ」、「いないいないばあ!」、「みいつけた！」などのEテレの番組があるが、私の子どもは「みいつけた！」は子どもっぽく、飽きてしまう。今は「Let's 天才てれびくん」を好きで見ているが、「ワラッチャオ！」は6歳の子どもにはちょうどよいと思った。たまには総合テレビでも見られると大変うれしい。
- 毎回ホッとさせてくれる番組が「世界で一番美しい瞬間(とき) 10min.」だ。美しい風景を伝える旅番組はたくさんあるが、風景はもちろんのこと、そこで起こっている伝統的なもの、人間模様などを通じて、目と心を癒やしてもらっている。短い時間でも、世界にはこういう場所やストーリーがあり、自分のいる世界は見方も考え方も狭いと思わせてくれる番組だ。大変癒やされている。

- NHKは、いろいろな問題に焦点を当てて報道しているが、特に難しい問題、例えば原発や基地の問題など、複雑な要素が絡み合っている問題の報道を見聞きするときに、何か釈然としないことがある。複雑な問題になればなるほど、住民対政府というような構図で報道されることが多い。NHKには、どちらが正しいか、どちらが悪いかの答えを出してほしいのではなく、自分でものを考えるための多角的な視点を期待している。住民対政府、国民対政府のような報道になってしまうと、国民、住民みんなが同じように考えているのかといつも釈然としない。もう少し幅広く見せてもらえれば、ものを考える幅が広がる。そういう視点を入れてほしい。
  
- NHKには、公平公正・迅速正確に視聴者が自分で判断するための情報を的確に出してほしいということだ。一方的な情報だけを出すと正しい理解ができない、視聴者が判断できないところもあると思う。

NHK編成局  
番組審議会事務局